

7302

12670
付圖

相原古墳群

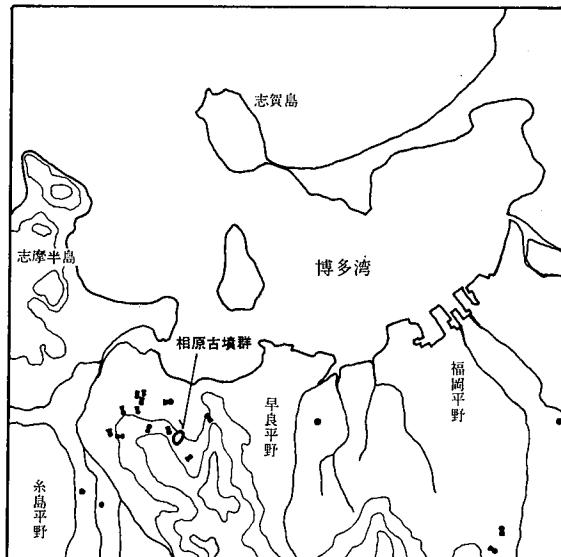
福岡市埋蔵文化財調査報告書 第28集

1974. 3

福岡市教育委員会

相原古墳群

—福岡市今宿所在後期古墳群の調査—



昭和49年3月

福岡市教育委員会



序

福岡市では「緑と文化の都市」として総合的な都市づくりをめざしております。しかしながら急激な都市化にともなう開発の波は、いやおうなしに私たちをおそい、文化財保護の問題の困難さを痛感しています。

今回調査されました相原古墳群もそうした状況のなかで行なわれたものです。さいわい関係者各位の御協力によって、林道の予定線を移動して破壊を最小限にとどめることができたことは文化財行政に携わる一人として本当にうれしく思います。報告書の刊行にあたって、文化財の意義をいま一度原点にたちかえって考えるべきときではないかと思われてなりません。本書が教育の場で、そして学問研究の場で活用いただければ幸甚です。

昭和49年3月31日

福岡市教育委員会

教育長 正木利輔

例　　言

1. 本書は福岡市農林水産局が計画した一般林道相原線の開設に伴う事前調査として、福岡市教育委員会文化課が昭和48年8～10月に行なった相原3・4・6号墳の調査報告書である。
2. 本書の執筆はつぎのとおりである。

第1章 柳沢一男
第2章 1 柳沢・藤田和裕
2 柳沢・藤田
3 柳沢・藤田
第3章 柳沢

3. 遺構実測図の作製・製図は柳沢・藤田があたった。遺物実測図の作製・製図は柳沢があたった。
4. 遺構写真は柳沢・藤田が撮影した。遺物写真は柳沢が撮影した。
5. 図版遺物写真に付したナンバーは、挿図のナンバーに一致する。
6. 本書の編集は柳沢が担当した。

相原古墳群調査報告書

本文目次

第1章	序説	1
1	はじめに	1
2	今宿周辺の自然環境	2
3	今宿周辺の歴史環境	2
第2章	調査の記録	9
1	相原3号墳	9
2	相原4号墳	24
3	相原6号墳	29
第3章	横穴式石室平面図形の検討	42
	結語にかえて	52
	本文註	53

図版目次

本文対照頁

PL 1	相原古墳群遠景	7
PL 2	相原古墳群近景	7
PL 3	相原 3 号墳全景	9
PL 4	相原 3 号墳墳丘と溝	10
PL 5	相原 3 号墳石室各部	11
PL 6	相原 3 号墳遺物出土状況	14
PL 7	相原 4 号墳全景	24
PL 8	相原 4 号墳墓塚と石室	25
PL 9	相原 4 号墳石室各部	25
PL 10	相原 6 号墳全景	29
PL 11	相原 6 号墳墳丘	30
PL 12	相原 6 号墳石室各部	31
PL 13	相原 6 号墳遺物出土状況	33
PL 14	相原 3・4・6 号墳出土遺物 I	
PL 15	相原 3・4・6 号墳出土遺物 II	
PL 16	相原 3・4・6 号墳出土遺物 III	
PL 17	相原 3・4・6 号墳出土遺物 IV	
PL 18	相原 3・4・6 号墳出土遺物 V	

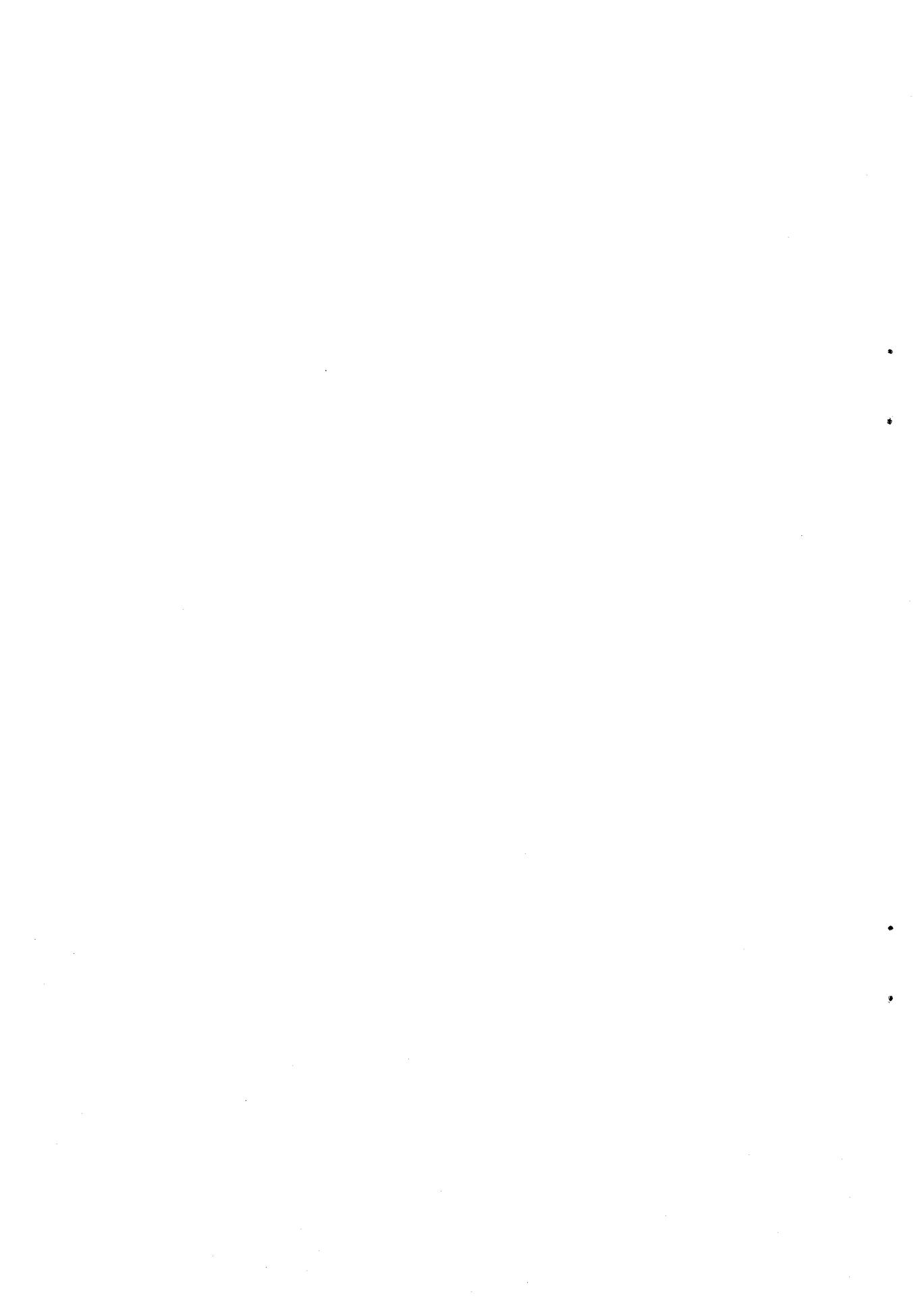
表目次

Tab 1	相原 3 号墳出土ガラス玉計測値	23
Tab 2	相原 3・4・6 号墳石室各部計測値一覧	43

挿 図 目 次

本文頁

Fig 1	周辺遺跡分布図（縮尺 1/30000）	3
Fig 2	周辺古墳群分布図（縮尺 1/10000）	5
Fig 3	相原 3・4・6 号墳地形測量図（縮尺 1/400）	8
Fig 4	相原 3 号墳地形測量図（縮尺 1/200）	9
Fig 5	相原 3 号墳墳丘断面図（縮尺 1/60）	折り込み
Fig 6	相原 3 号墳石室閉塞部実測図（縮尺 1/50）	12
Fig 7	相原 3 号墳石室実測図（縮尺 1/40）	折り込み
Fig 8	相原 3 号墳石室床面下遺構および墓道実測図（縮尺 1/60）	13
Fig 9	相原 3 号墳出土遺物実測図 I（縮尺 1/3）	15
Fig 10	相原 3 号墳出土遺物実測図 II（縮尺 1/3）	16
Fig 11	相原 3 号墳出土遺物実測図 III（縮尺 1/3）	19
Fig 12	相原 3 号墳出土遺物実測図 IV（縮尺 1/3）	20
Fig 13	相原 3 号墳出土遺物実測図 V（縮尺 1/5）	折り込み
Fig 14	相原 3 号墳出土遺物実測図 VI（縮尺 1/3）	22
Fig 15	相原 3 号墳出土遺物実測図 VII（実大）	23
Fig 16	相原 4 号墳地形測量図（縮尺 1/200）	24
Fig 17	相原 4 号墳墳丘断面図（縮尺 1/60）	25
Fig 18	相原 4 号墳石室実測図（縮尺 1/40）	27
Fig 19	相原 4 号墳出土遺物実測図（縮尺 1/3）	28
Fig 20	相原 6 号墳地形測量図（縮尺 1/200）	29
Fig 21	相原 6 号墳墳丘断面図（縮尺 1/60）	折り込み
Fig 22	相原 6 号墳石室閉塞部実測図（縮尺 1/50）	32
Fig 23	相原 6 号墳石室実測図（縮尺 1/40）	折り込み
Fig 24	相原 6 号墳出土遺物実測図 I（縮尺 1/3）	34
Fig 25	相原 6 号墳出土遺物実測図 II（縮尺 1/3）	35
Fig 26	相原 6 号墳出土遺物実測図 III（縮尺 1/5）	38
Fig 27	相原 6 号墳出土遺物実測図 IV（縮尺 1/5）	折り込み
Fig 28	相原 6 号墳出土遺物実測図 V（縮尺 1/3）	40
Fig 29	相原 3 号墳石室の方眼による操作結果（縮尺 1/60）	44
Fig 30	相原 6 号墳石室の方眼による操作結果（縮尺 1/60）	47
Fig 31	高崎 2 号墳・今宿 1 号墳石室の方眼による操作結果（縮尺 1/60）	49
付 図	相原 3～6 号墳地山整形測量図（縮尺 1/100）	



第1章 序 説

1. はじめに

昭和46年本調査の契機となった一般林道、今宿相原線の開設計画が具体化し、本市農林水産局より教育委員会文化課に埋蔵文化財有無の確認の依頼があった。昭和43年度に行った遺跡分布調査の結果と照らし合わせたところ、林道予定線内には相当数の古墳が入っていることが知られた。そこで予定線内を踏査したうえで直接工事を担当する農林土木課と協議を行い、昭和47年工事区域内については、古墳を破壊する懼れのある予定線を変更して工事をすすめるとの確認を得ることができた。しかしながら昭和48年度工事区域は、相原古墳群の群集する丘陵上を通過しないかぎり林道の完成はありえないという困難な状況であり、文化課の発掘調査の終了を俟って工事を行うとの結論を得た。

48年度予定線内に存在する古墳は3基で、南から3・4・6号墳と呼ばれていたものであった。各古墳の発掘調査は8月1日から10月15日まで実施した。調査にあたっては農林土木課の方々、そして林道開設を心から臨んでおられた森林組合の方々から多大なご配慮とご協力をいただきた。記して感謝の意を表したい。

調査関係者

福岡市教育委員会

教 育 長	正 木 利 輔
教育委員会主幹	青 木 崇
文 化 課 課 長	清 水 義 彦
庶務会計	埋蔵文化財係長
	三 宅 安 吉
	係員
発掘調査	福 田 征 一
	担 当 者
	柳 沢 一 男
	調 査 員
	藤 田 和 裕
整理補助	寺 坂 文 香・大 島 陽 子

地元協力者（敬称略）

野 坂 文 吾・吉 積 源 一 郎・松 本 次 男・松 本 カ ラ ル・松 本 愛 子
松 本 勝 信・松 本 サ ツ キ・松 本 正・井 上 キ ヌ・八 島 ヨ シ 子
伊 藤 留 吉

2 今宿周辺の自然環境^(註1)

福岡市周辺の海岸部には博多湾にむかって開けた平野が幾つか形成され、糸島平野はその西端にあたる。旧志摩郡の大起伏丘陵との間に、博多湾と唐津湾に通じた糸島水道を狭んで主に瑞梅寺川と雷山川の堆積作用によって形成された扇状地状の平野である。往時、怡土・志摩を2分した糸島水道がはたしていつ頃現在みられるように埋没したかは明らかではないが、その位置は現在の筑肥線を越え志登の北西で大きく流れを西に変え船越湾にそそぐ雷山川と、板持の付近で東北にゆるくカーブし今津湾に流入する瑞梅寺川の下流域を結ぶ線上を貫いており、標高5mの等高線はこれと符合するよう、南・北でそれぞれ周縁している。糸島平野の東北端は博多湾の左転回潮流によって形成された大原～今津間、今山～長垂間の弓状の砂丘を瑞梅寺川が貫流し、河口付近は近世以降の開拓が進んだとはい、未だ内湾状にやや広がっている。

いまわれわれが大まかに今宿地区と呼ぶ場合、この瑞梅寺川の下流域東岸から、東の早良平野とを画する早良花崗岩によって形成された大起伏丘陵地（叶嶽・長垂山塊）の西麓部にいたる東西3km、南北1kmほどの海岸平野部を総称し、旧周船寺村・横浜村・今宿村・徳永村・女原村・上ノ原村・青木村を含む地域である。北は博多湾に面して弓状の長垂砂丘、南は早良～佐賀花崗岩を母岩とする背振山塊から派生した高祖山塊の小起伏山地があり、その山麓部は小河川の開析によって八手状を呈し、奥の浅い狭隘な谷地形をつくっている。叶嶽・長垂山塊の西麓部には上原～青木を結ぶ扇状地が広く発達しており、扇端は長垂砂丘にほぼ接する位置まで延びている。弥生時代の海岸線を大略現在の海拔4m前後と想定すると、それは今山を西端として砂丘内側をまわり長垂山麓にいたって反転する。ついで青木・谷の扇端を経て南に屈曲し、女原・徳永・周船寺の低位砂礫台地端をめぐって瑞梅寺川に続いている。砂丘内側は瑞梅寺川河口にみられるように内湾化していたと考えられ、南山麓を開析する各小河川の堆積によってラグーン状の湿原を呈したであろう。砂丘後背地は粗粒グライ土壤で生産力は低く、この地の開発は遅い。たとえば享和元年（1801年）徳永村庄屋惣右衛門の記録に「貞享中迄は村（徳永の北にある北原を指す）の三方は未入海の渦にて海藻等取居候由申伝候云々」^(註2)とあるほどである。

ここでは触れないが、糸島水道を間にて今宿地区の北西に対峙する志摩半島については下條信行氏の詳しい論述があるので参照していただきたい。^(註3)

3 今宿周辺の歴史環境

前述したように今宿地区の自然景観は、弥生時代～江戸中葉にいたるまで、長垂砂丘の内側は内湾状を呈していたと思われる。したがって昭和43～44年にかけて行なわれた福岡市教育委員会による分布調査でも、干拓地においては遺跡の発見はなかった。糸島水道を狭んで対峙す

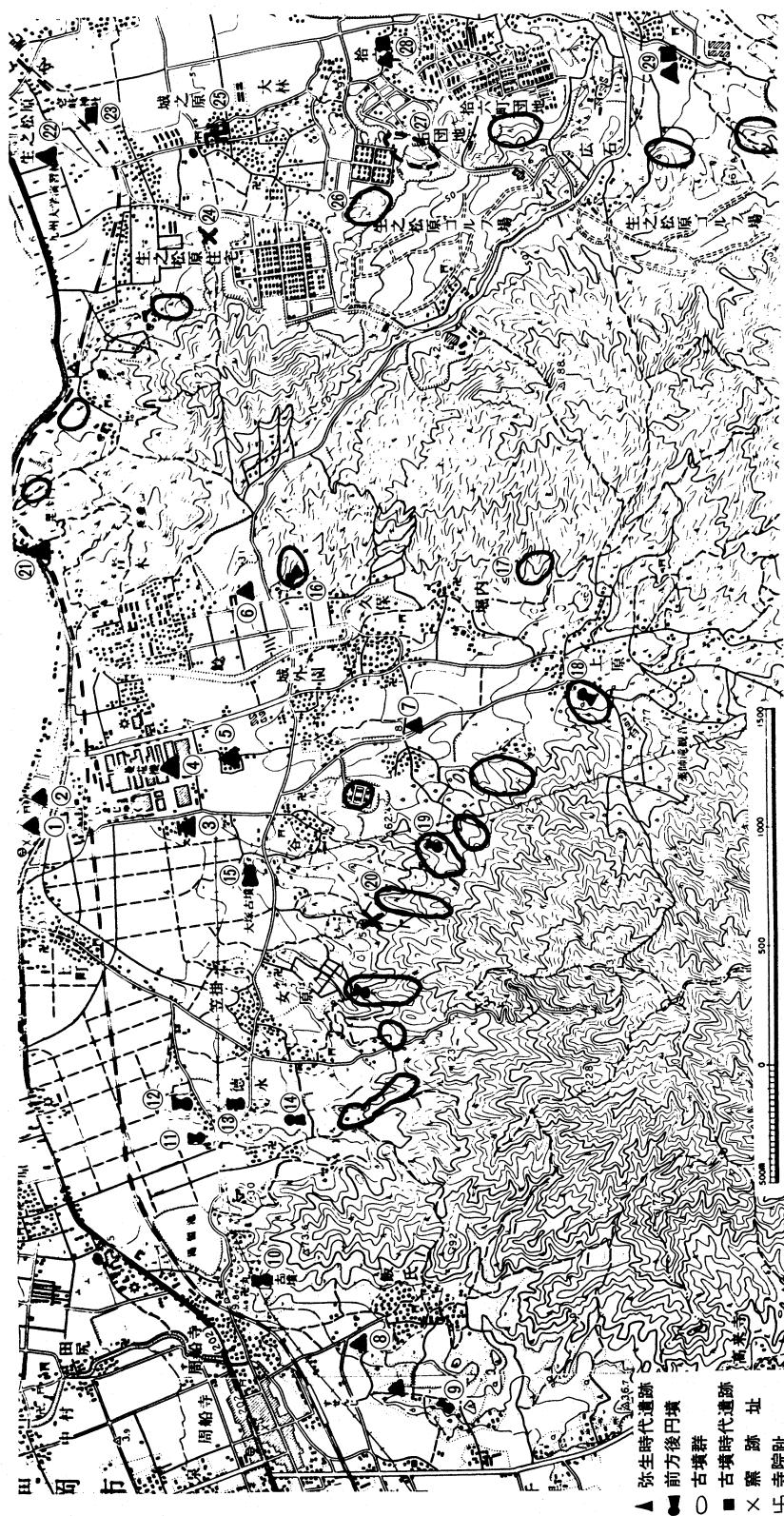


Fig 1 周辺遺跡分布図 (縮尺 1/30000)

1. 西松原遺跡
2. 地藏尊遺跡
3. 今宿小学校庭遺跡
4. 三菱電機工場遺跡
5. 青木遺跡
6. 鋸先弥生遺跡
7. 相原箱式石棺墓
8. 飯氏馬場遺跡
9. 飯氏第1古墳群 2号墳
10. 丸隈山古墳
11. 山ノ鼻2号墳
12. 山ノ鼻1号墳
13. 若八幡宮古墳
14. 下谷古墳
15. 丸隈山古墳
16. 鋸先古墳
17. 焼山古墳群
18. 本村1号墳
19. 谷上古墳
20. 小松原1号墳
21. 油坂石棺墓
22. 生松原遺跡
23. 下山門遺跡
24. 生之松原
25. 城ノ原廐
26. 高崎古墳群
27. 宮ノ前遺跡群
28. 湯納遺跡
29. 野方遺跡

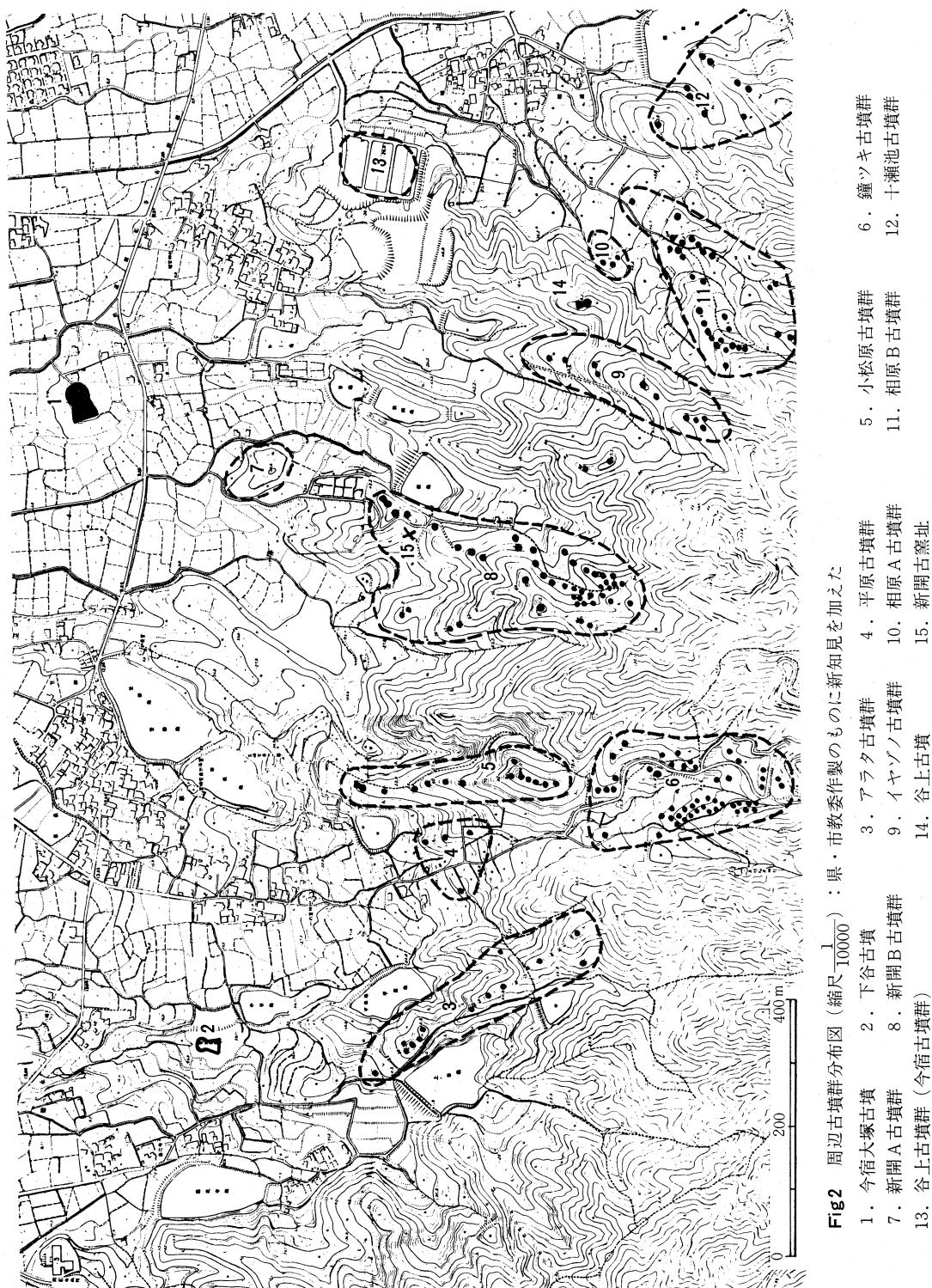
る志摩半島の東端の地形は、本地区と対応するように大原～今津の弓状砂丘と砂丘後背地をもち、そこではすでに縄文時代前期以降から古代人の足跡がみられ、また弥生時代においてもその開始期から遺跡の存在が知られている。以下本地区について概述する。

縄文時代 現在までのところオープンサイトの発見はない。わずかに飯氏鏡原遺跡と若八幡宮古墳の円形土塚から押型文土器の出土があるにすぎない。^(註4) ともに高祖山塊山麓の低位段丘上に位置するところである。

弥生時代 高祖山麓の西側の糸島平野に面したところでは、前期以降、低位段丘上に一定の遺跡の分布がみられる。飯氏馬場遺跡は前期末から後期終末までの墓地群で、甕棺・木棺・箱式石棺が検出されている。^(註5)とりわけ第3号石棺は石棺墓中では最大規模をもち、すでに破壊されていたものの周辺から仿製の内行花文鏡と刀子が出土して3号石棺の副葬品とされている。飯氏馬場遺跡西南の宇田川原遺跡でも有柄式磨製石剣が出土しており、この一帯は弥生時代伊観国の外縁に位置して今宿東部地区とは異なった様相をしめす。

著名な今山遺跡から長垂山塊の突端までは弓状砂丘がつながっており、弥生時代以降久しくラグーン状の砂丘後背地を形成していたところである。砂丘上には西から横浜遺跡群・今宿遺跡群の各遺跡が点在する。いままでのところ発掘調査によって得られた資料は皆無であるが、西松原遺跡では板付I式に遡るものもみとめられ、またその東側に隣接して前期末の金海式甕棺を出土した地蔵尊遺跡が存在する。近年市教育委員会によって行なわれた今山遺跡の調査によって、従来中期以降とされていた玄武岩による石斧生産は前期末に遡ることが明らかにされ、かかる石斧生産集団と砂丘上に点在する前期末以降の甕棺群との関係も極めて接近したものと考えられている。さて長垂砂丘後背地の東端の長垂山塊山麓と上原一青木扇状地の扇端微高地上には前期以降後期初頭までの遺跡群が、ラグーン状湿原を囲繞するように点在する。この付近も調査を経た遺跡はないが、東端部山麓に位置する鋤先遺跡では、板付IないしII式土器の採集が知られている。扇端の微高地上に立地する諸遺跡は中期以降に限られており、かかるラグーン地帶は粗粒グライ土壤で生産力は低いとされているが、東接する早良平野内にみる前期以降の遺跡の展開過程とまさしく符合するよう当初の可耕地として選択されたことは容易に推定されよう。^(註6) 現在扇央部には弥生時代の包含地は発見されておらず、わずかに数ヶ所の散布地と1ヶ所の箱式石棺墓の出土が知られているにすぎないが、将来増加する可能性はある。箱式石棺墓は上原字相原の標高16mの台地端に位置しており、数年前道路工事中に発見されたもので石棺内には土器が入っていたといわれるが現存しない。

ついで高祖山麓の低位段丘上と小起伏丘陵上での遺跡の分布は知られていない。谷上に存在した今宿古墳群の調査では、1号墳の墳丘盛土中から中期の土器片と石鏃が、また徳永に所在する若八幡宮古墳からも中期の土器片と玄武岩の磨製石斧片が出土している。^(註7) 相原6号墳墳丘中からも中期初頭をしめす土器片と打製石斧が出土しており、今後の精密な分布調査によって



遺跡の検出は不可能ではない。かくした場合、小起伏丘陵地を開析した谷地形を多く有する高祖山麓部の可耕地は、北側に全面するラグーン地帯よりも、狭隘な谷水田を求めざるをえない。

以上要約すると、前期初頭には砂丘後背地のラグーンを生産基盤に求めた小集団が砂丘上あるいは東部山麓地に定着しやがて今山における石斧製造が開始とともに中期になるとその分布は散在的ではあるが今宿地区全体を覆うようになり東部では扇央部への分散過程がみられる。

しかしこれ古墳時代をつける後期段階での今宿地区は後の前方後円墳をつくりだすにはあまりにも乏しい墓制内容しかめしていないのである。しかし唯一例外的なものとして油坂石棺墓がある。昭和15年に長垂山塊が博多湾に突出した先端部の筑肥線油坂トンネルの西側入口付近の土砂取り中に発見され檜垣元吉氏によって調査された。その時の報告はないが、石棺より出土した鏡が北九州古文化総覧Ⅰに紹介されている。^(註10) 鏡は方格規矩四神鏡で方格内に十二支の銘が入り後漢の舶載鏡とされている。他の副葬遺物や石棺の形状あるいは墳丘の有無についての記載もなく、鏡もすでに失なわれており、その実体を把む資料は何も残されていない。したがってこの鏡を副葬した石棺墓の時期を奈辺に求めるかは極めて困難と思われるが、弥生時代後期のある一時期につくられたこの墳墓が弥生時代総体の得た政治的成果の一つであるとするならば、今宿地区はいわば伊観国の外縁部に展開した1地域としての従属的地位を克服しえないながらも、一定程度の族長層の析出を経過したことは充分予想されるのである。

古墳時代 この期の集落址と推定される遺跡の分布は明らかでない。今までのところ砂丘上に位置する西松原遺跡からの採集品に限られている。

さて、高祖山麓の低位段丘上を横断する現在の周船寺—有田線は、律令制施行以降の大宰府から壱岐・対馬に通じる小路にほぼ一致するものといわれ、早良郡額田駅から広石を経て怡土郡比善駅に通ずる部分にあたり、この道路に沿って7基の前方後円墳が存在している。また徳永から谷をへて上原につづく小起伏丘陵上には稜線を中心にして古墳群が大きく7群に分布し、総数230余基におよぶことが明らかになっている。

古墳時代の今宿地区を特徴づけているものは古代官道に沿うように分布する前方後円墳の存在にちがいない。しかしながら調査を経た若八幡宮古墳と、古く開口し若干の遺物の現存する丸隈山古墳を除いては、墳丘の実測図もなくこの地域の研究の前進をさまたげている現状である。一応現在まで明らかになっている前方後円墳をあげると次のようになる。^(註11)

古墳名	立地	立地状況	埴輪	標高	主軸長	主体部	備考
① 若八幡宮古墳	丘陵端	単独		28m	(65m)	木棺直葬	二神二獣鏡 環頭大刀、豎矧板革縫短甲
② 山ノ鼻1号墳 (宮崎安貞碑古墳)	段丘上	単独		10m	(50m)	(竪穴式石室)	(主体部破壊)
	山ノ鼻2号墳	段丘上	単独	13m	60m	?	(全壊)
③ 丸隈山古墳 助古墳	丘陵端	単独	○	79.5m	横穴式石室	仿製鏡 ² 巴型銅器	
	丘陵端	古墳群	○	38m	?	?	

③	今宿大塚古墳	段丘上	単 独	○	10 m	60 m		
④	下谷古墳	丘陵上	単 独		28 m		(横穴式石室)	(全壊)
	小松原 1 号墳	丘陵上	古墳群		50 m	22 m	横穴式石室	(前方部一部破壊)
	谷上古墳	丘陵上	単 独		75 m	36 m	横穴式石室	
	本村 5 号墳	丘陵上	古墳群		55 m	30 m	横穴式石室 <small>(註12) 〔石室全長約 6 m 玄室長 1.6 m 玄室巾 1.4 m〕</small>	(全壊)
<small>{ 飯氏第 1 古墳群第 2 号墳</small>		丘陵上	単 独		10 m	51 m		(主体部破壊)
<small>(子捨塚)</small>								
<small>{ 飯氏第 I 古墳群 1 号墳</small>		丘陵上	古墳群					(前方部一部破壊)

また群集墳中には径20mをこす円墳の存在が知られており、かかる大型の円墳と前方後円墳の関係も検討されねばならないが、谷上（今宿）1号墳を除いては調査例がない。したがって糸島平野側の飯氏古墳群と叶嶽・長垂山麓の古墳群を含めると約300基と概算される今宿地区の古墳群の実態は、今後の調査によって次第に明らかにされると思われるが気がついたところをまとめておきたい。

紋上の前方後円墳は、規模・立地・墳形の検討と今までに明らかになっている主体部・遺物などを勘合して造営年代の古い順に配置したものである（ただし、飯氏第 I 古墳群 1 号墳と同 2 号墳〔子捨塚〕は除いた）。すなわち定型化した横穴式石室を主体部とする前方後円墳は④群に含まれる 4 基でこれらは一応 6 世紀前半代以降の造営と推定される。また明確に 4 世紀代に遡る古墳は現在のところ若八幡宮古墳の 1 基にすぎないが、②群の山ノ鼻 1・2 号墳がともに若八幡宮古墳と主軸方位を同一にし、かつ近接する立地的要素と 1 号墳に認められる葺石の使用を勘案すれば、紋上 2 基に若八幡宮古墳に接近した造営時期を与えることができないだろうか。ついで③群とした丸隈山・鋤先・今宿大塚の 3 古墳では唯一丸隈山古墳の造営時期が主体部の構造と出土遺物の検討からほぼ 5 世紀前半～中葉とされているにすぎず、他の 2 古墳については明らかではない。しかしこれら 3 基には埴輪円筒の使用が共通点として認めることができる。福岡市周辺では墳丘装飾に埴輪円筒を使用する古墳例は少ないが、1965～69年に行なわれた老司古墳の調査によって一応 5 世紀前半代に遡ることが知られ、最終末例を劍塚古墳とすることができれば、ほぼ 6 世紀中葉～後半代にまで下る可能性があると思われる。かように推定することができれば③群中の 3 基を 5 世紀前半～中葉頃から 6 世紀中葉頃に造営時期を求めるこども大過あるまい。そうした場合④群中のものと③群中のものは 6 世紀前半代頃で重複する可能性もあるが、立地上の要素を考えてみるとその可能性のある古墳は下谷古墳 1 基に限られるがすでに破壊されている以上疑問点として残すほかはない。

ついで立地状況からすると、①・②群は前方後円墳のみで 1 つの集合体を形づくっている。③群では鋤先古墳の周辺に竪穴式石室をもつ可能性のある円墳群が存在するほかは、いづれも丘陵上あるいは段丘上に単独に立地している。④群中では下谷古墳を除いてはすべてが丘陵上

に群集墳中の1基として造営されており墳丘の小型化が顕著にみとめられる。以上のことからして、これらの前方後円墳の形成はおおむね①→②→③→④群の過程を辿ったと推定することができる。

さらに今宿の古墳群の中には、谷上（今宿）2・3号墳のように主体部に箱式石棺や小型竪穴式石室をもつ小円墳や、上述した鋤先古墳周辺の竪穴式石室を主体部とする円墳群の存在が認められ、5世紀代にはすでに群集墳形成の萌芽がみられる。その後の6世紀中葉以降の圧倒的な群集墳の形成は、谷上前方後円墳の③→④群にみられる墳丘の縮小化と分布の拡散化を強要した要因となった構造的な社会変化を現象しているものといえないだろうか。

前述したように今宿の弥生時代の展開過程と後期の墓制内容は、後の前方後円墳群を造営せしめるだけの豪族の析出を保障するにはあまりにも貧弱である。

しかしながら古墳時代前期以降、後期にいたるまで前方後円墳を営んだ今宿は、いわば怡土国を2分するような形で濃密な古墳の分布地域として存在しつづけたことは確かである。

今宿地区の古墳群の研究は将来に俟つところが多い。今回調査した相原古墳群もその中の1支群にすぎず、この地の古墳群の性格づけも怡土国内に分布する古墳群とのかかわりにおいて追求されねばならないのであろう。

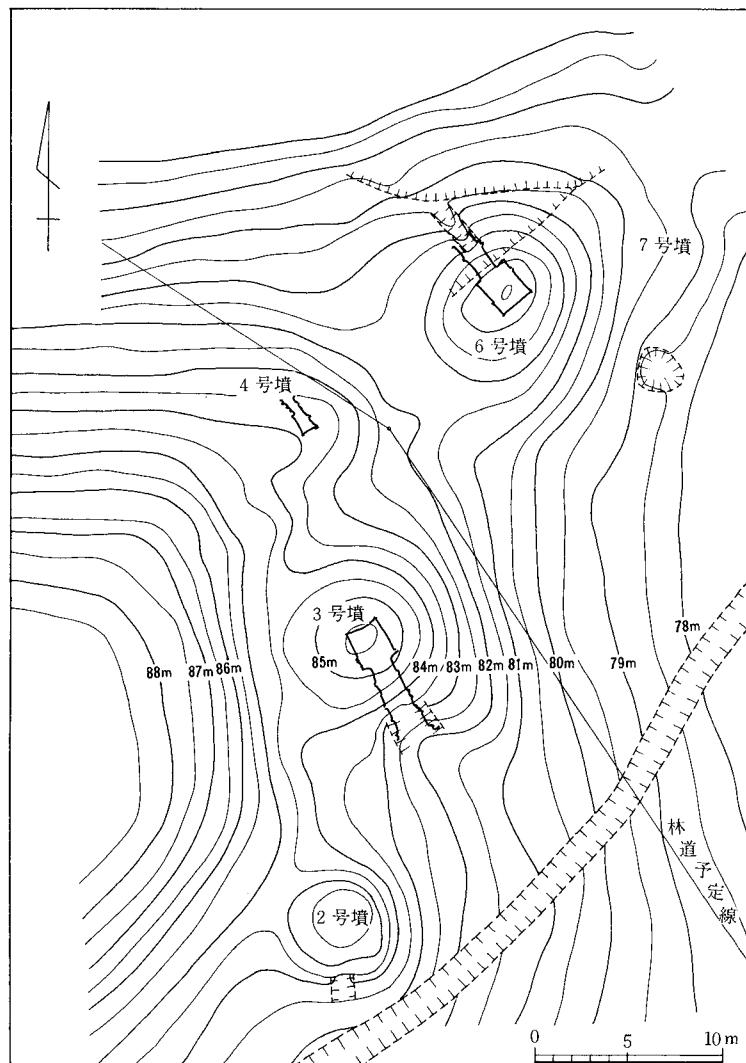


Fig 3 相原古墳群3・4・6号墳地形測量図（縮尺1/400）

第2章 調査の記録

1 相原3号墳

(1) 位置と現状

本墳は墳丘東側基底部で標高81.5mに位置し、相原古墳群のなかでも最高所の一群のなかに含まれる。尾根稜線上に立地する4号墳と墳丘裾部を接し、その位置は稜線からゆるく下る東斜面にある。したがって、調査前の観察によると、墳丘基底部の高さは墳丘の北側と南側では

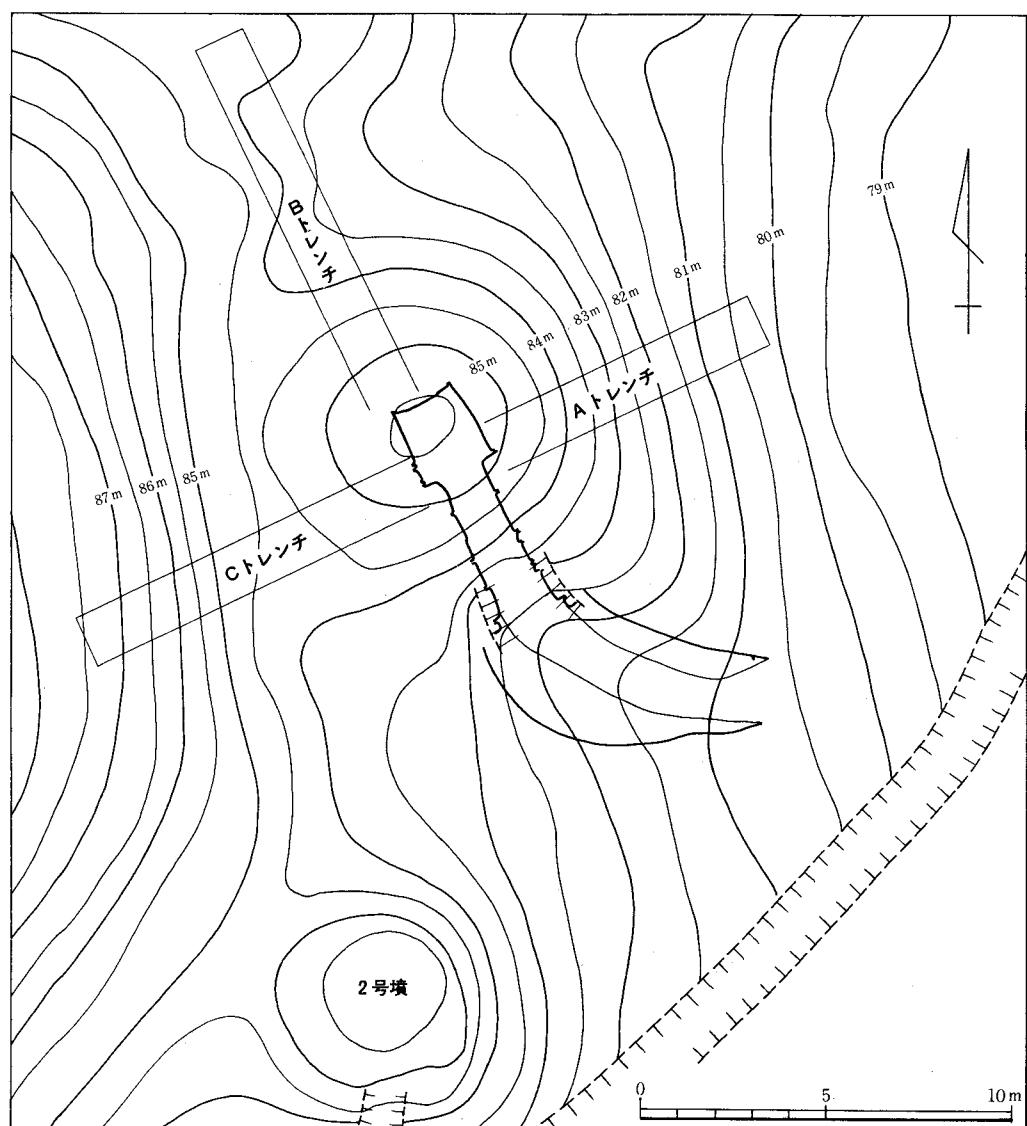


Fig 4 相原第3号墳地形測量図（縮尺1/200）

おおよそ3mの差がみられた。また墳丘の西から南側にかけて溝状の凹地がめぐっており、それが古墳築造時の地山整形によって生じたものかと推定された。斜面の傾斜変更線は本墳の南西に位置する2号墳の西側に続いて延長することがみとめられた。墳丘の大きさは北側が斜面の低いほうに流れているためしっかりした裾線はみとめられなかつたが、一応81m～81.5mの等高線を裾部と想定した。それによって直径約13m、高さは北側墳丘裾からはおおよそ5mほどの円墳と推定することができた。

(2) 墳丘

墳丘の調査は、石室の主軸の延長線上と主軸に直交する3本のトレンチを設定し、周溝の有無、墳丘の盛土過程、石室構築と盛土過程の関係、墳丘裾部の列石などを調査した。その後各トレンチ壁を残して全面にわたって表土および堆積土を剥ぎ、残存する墳丘面と溝を露出させ墳丘のプランを追求した。

墳丘基底部 本墳は稜線から東斜面にかけて位置するために古墳築造の第1工程として高い側の斜面を削りとり、低いほうを若干埋めて地山面を整形し墳丘基底部としている。石室主軸線に直交するA-Cトレンチでは約18°の傾斜をしめす斜面の高い側は、石室主軸線から9.4mのところに削りだしの上端をみとめることができ、約5mにわたって断面レンズ状を呈する溝状にカットしており、上端から底面までは2.7mほどの深さである。Bトレンチでは墳丘基底面は平坦に削平され、裾部は巾2.6m、深さ0.6mの鈍いU字溝となっている。この溝状の地山整形は墳丘の規模を決定すると同時に基底部をより平坦にする技術的な配慮、さらには墳丘をきわだたせるといった意味をもつと推定される。本墳では墳丘北側裾から南側裾まで西側を半周している。かってわれわれはかかる地山整形による溝状の遺構が斜面に築造された古墳に一般的にみとめられ、その形状から馬蹄状溝と呼んだが、その性格は墳丘設計にともなう地割的な要素を勘合しなければならないと思われる。

盛土 紙上の調査によって本形の墳丘は南北径11.8m、東西径12mをはかり、南と北側の裾部がほぼ平行する不整な円形のプランを確認することができた。最も低い北側の裾部は標高80.7m、高い南側で84mほど、墳頂は85.5mであるので、墳丘の高さは北側で約5m、南側では2mたらずである。墳丘盛土はFig 5にしめしたごとくである。層序からすると粘土を使用した互層状のものではなく、地山整形あるいは墓塙や墓道の掘さくによって得た土を使用しており後期の群集墳では通有のものである。盛土過程は大きく3次にみとめられ、1. 墳丘基底面の低い側に基壇状に積みあげ、2. 石室壁体構築と同時平行的に行い天井部架構ののち、3. 石室全体を覆いさらに墳丘全体を整えている。

墓塙と墓道 墳丘盛土を全面除去しなかつたので墓塙については各トレンチの所見によって規模・形態を推測するしかない。A-Cトレンチでは巾は4.5mをはかり、斜面の高い

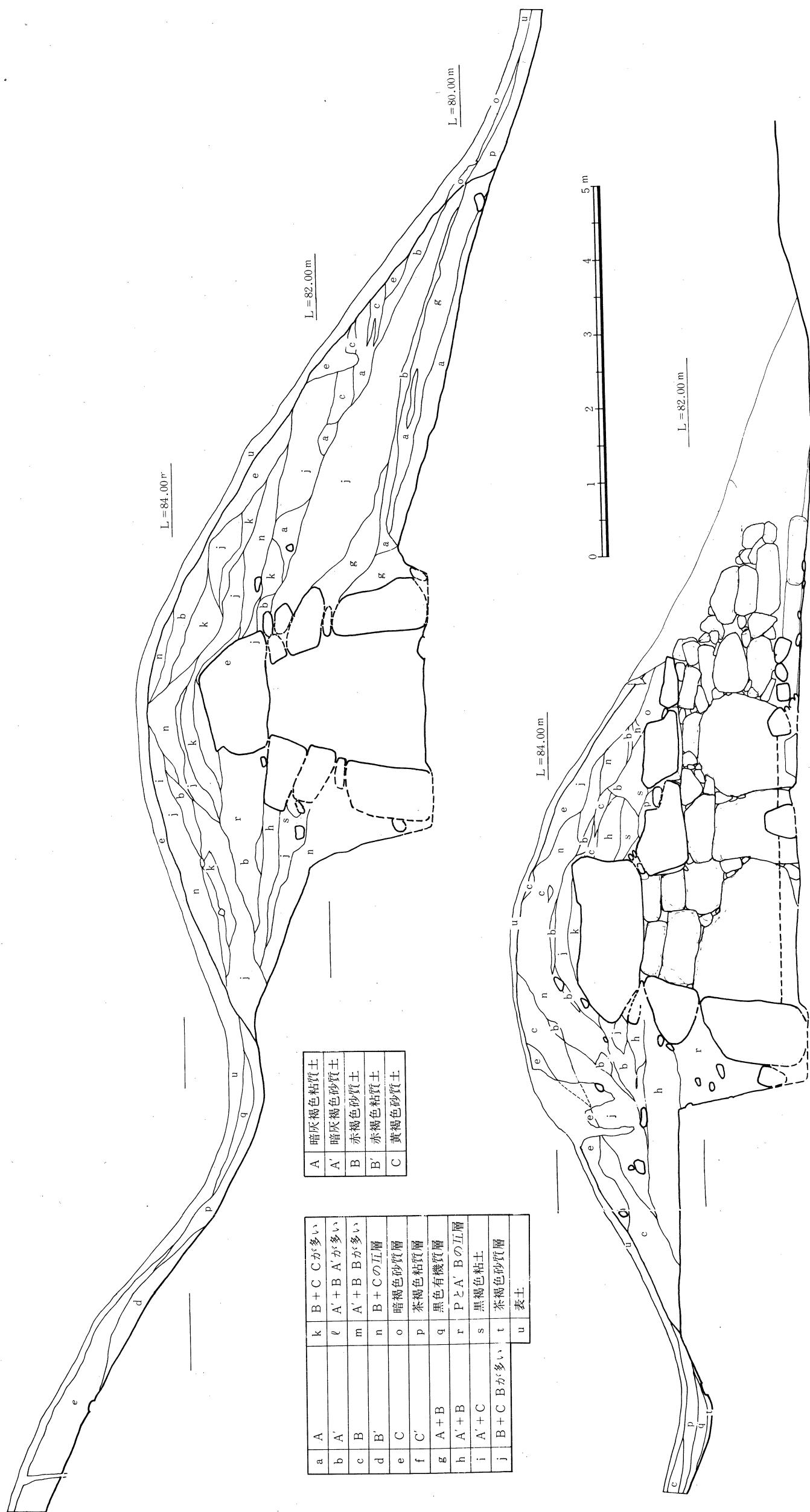


Fig. 5 相原 3 号填墳丘土層実測図 (縮尺1/60)

側では地山面からの、低い側では地山上に 0.4~0.5 m ほどの盛土をした面からの掘り込みである。深さは左壁側で 1.7 m 以上、右壁側では 0.4 m であるが底面はほぼ水平位をたもつてゐる。石室、玄室の腰石は墓塙の中央線からほぼシンメトリーの位置に据えられている。奥壁側では、深さ 1.6 m、掘りこみ上端は奥壁前面から 1.4 m の位置にある。羨道部付近の墓塙の形態は不明であるが、墓道の奥部（羨道入口部にあたる）の巾が徐々に外開する徳久利形の墓塙になるものと推定されよう。墓道は羨道入口部左右に貼石状の石組みからはじまり石室主軸線からはずれて北東に大きくカーブしている。約 6.5 m ほど続いて自然斜面に消えており、底面はしだいに下って比高差はほぼ 1 m をはかる。巾は羨道入口部で 3 m、中ほどでやや広がるが先端部にむかって徐々にすぼまり、断面形は傾斜のゆるい逆台形状を呈している。

(3) 石室

本墳の内部主体は主軸線を S-26°-E にとり南南東に開口する単室の両袖型横穴式石室である。石室はすでに開口し、盗掘を受けてはいたが、石材を目的とした破壊からはまぬがれ、天井部および石室周壁は完存していた。しかし玄室と羨道部は盗掘や以降の乱掘によって床面が完全に破壊され、床面を構成していたと思われる礫石が散在していた。

石室は矩形の玄室に素型の両袖を設け、入口部にむかって開きぎみの羨道を付したきわめて端整でシンメトリカルなプランをしめしている。羨道入口部には墓道にのびる貼石状の石組が付してあり、それを含めた石室全長は右壁で 6.85 m、左壁で 6.50 m をはかる。しかし石室全長にみられる長さのちがいは、石室プラン全体の歪みから生じたものではなく、貼石状石組みの不安定な壁体構築によるものと解される。使用石材はすべて花崗岩山石転石である。

閉塞施設 Fig 6 にしめすように天井石とのあいだが 0.3 m ほど破壊されているが、多くの例から当初はほぼ完全に密封されていたと推定される。その位置は墓道側で奥壁より 5.2 m、羨道内側では第 1 棚石を根石としており、その間約 1.5 m である。墓道側からみると雑然としているが、羨道側は整然と組みあげられており、下部には大ぶりの転石を用いている。上になるにしたがってしだいに小ぶりのものを使用している。

玄室部 奥巾 1.71 m、前巾 1.94 m、右壁長 2.17 m、左壁長 2.05 m をはかり、前巾の広い台形に近いプランをしめす。周壁最下段には、大ぶりの未加工転石を腰石に使用している。奥壁は巾 1.6 m 以上、高さ 1.4 m ほどの腰石を据え、上にやや小さめのものを横積みにして 2 段に構成されている。左右の側壁も腰石の上に 2 段の横積みがなされ、全体では 3 段に構成される壁体で、その配置はシンメトリーを意識した周到な石材選択を思わせる。玄室内の周壁にはそれぞれ持ち送りがみられ、奥壁よりも左右側壁の 2・3 段目に強い内傾がみとめられる。袖部は腰石を縦位に据え、左袖巾 0.40 m、右袖巾 0.35 m をとるもので、玄門、冠石などの施設をもたない素型をしめす。

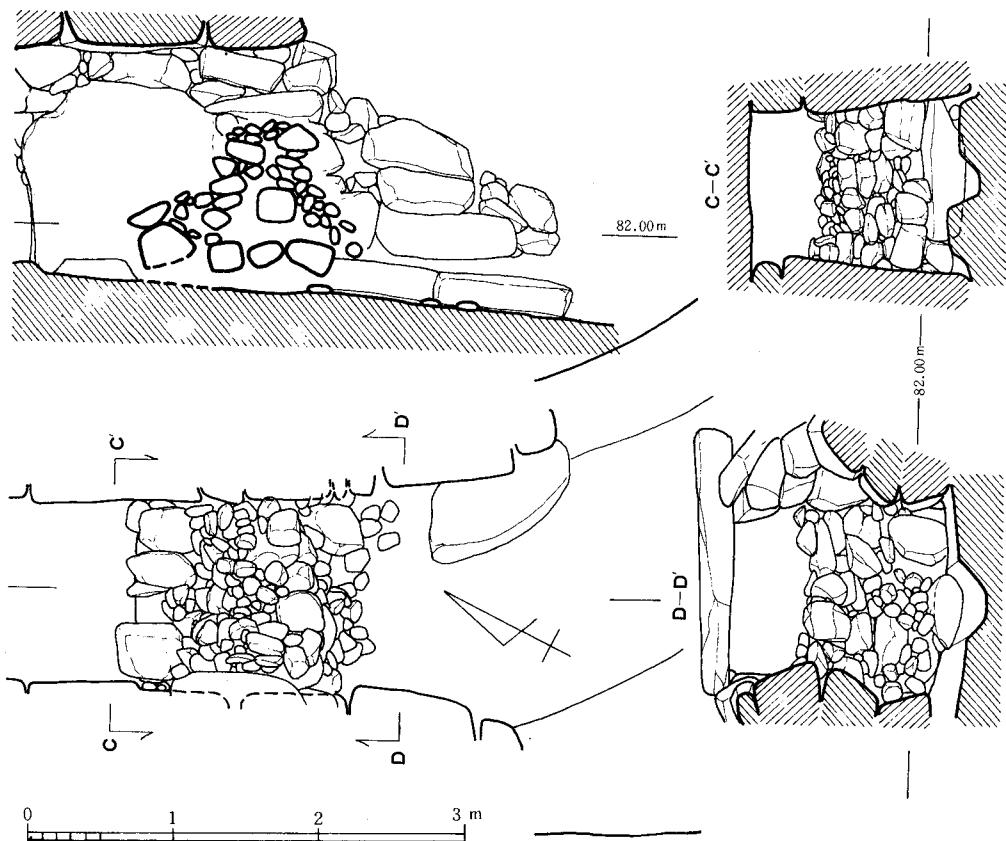


Fig. 6 相原第3号墳閉塞部実測図（縮尺1/50）

羨道部 奥巾約1.20mをはかり、入口部にむかって直線状に徐々に外開する。腰石を使用した側壁の前から先は貼石状の石組となり壁線は「ハ」字状に外開する。貼石状石組み部分は断面逆台形状を呈し、天井部の架構は当初からなかったものとしてよい。したがって羨道入口部は側壁に腰石を用いた先端部に求められよう。羨道床面には2ヶ所に樋石を配置している。入口部から入ったところと袖石のあいだにあり、本稿では、前者を第1樋石、後者を第2樋石と呼んでおきたい。第1樋石は細長い1石からなり側壁との間隙は小石で充填し、第2樋石は2石横列にしている。左右側壁は腰石を据えてその上を横積とし、天井部とのあいだは小石を充填している。

天井部 玄室1石羨道3石からなる。玄室上には、巾1.5m、長さ2.4m、厚さ0.8mの巨石を用いて羨道最奥部の天井石の上面に重ねている。羨道上の3石は平坦な部分を天井面としてそろえ、ほぼ水平位に配置しその先端は奥壁から4.84mに位置している。

底面 閉塞部の下面を残して、前述したように玄室にも羨道にも床面は保存さ

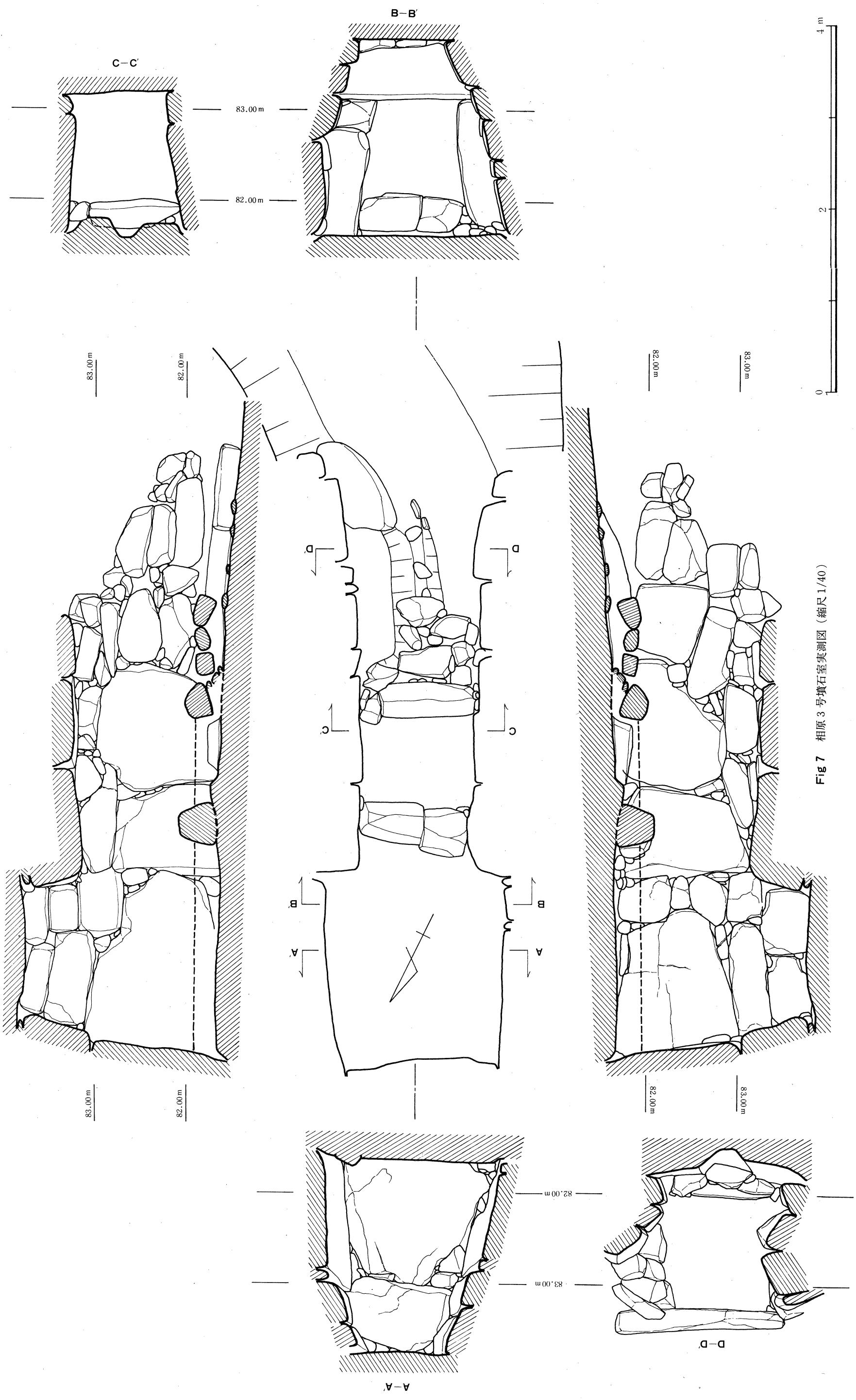


Fig. 7 相原 3 号墳石室実測図（縮尺 1/40）

相原 3 号 墳

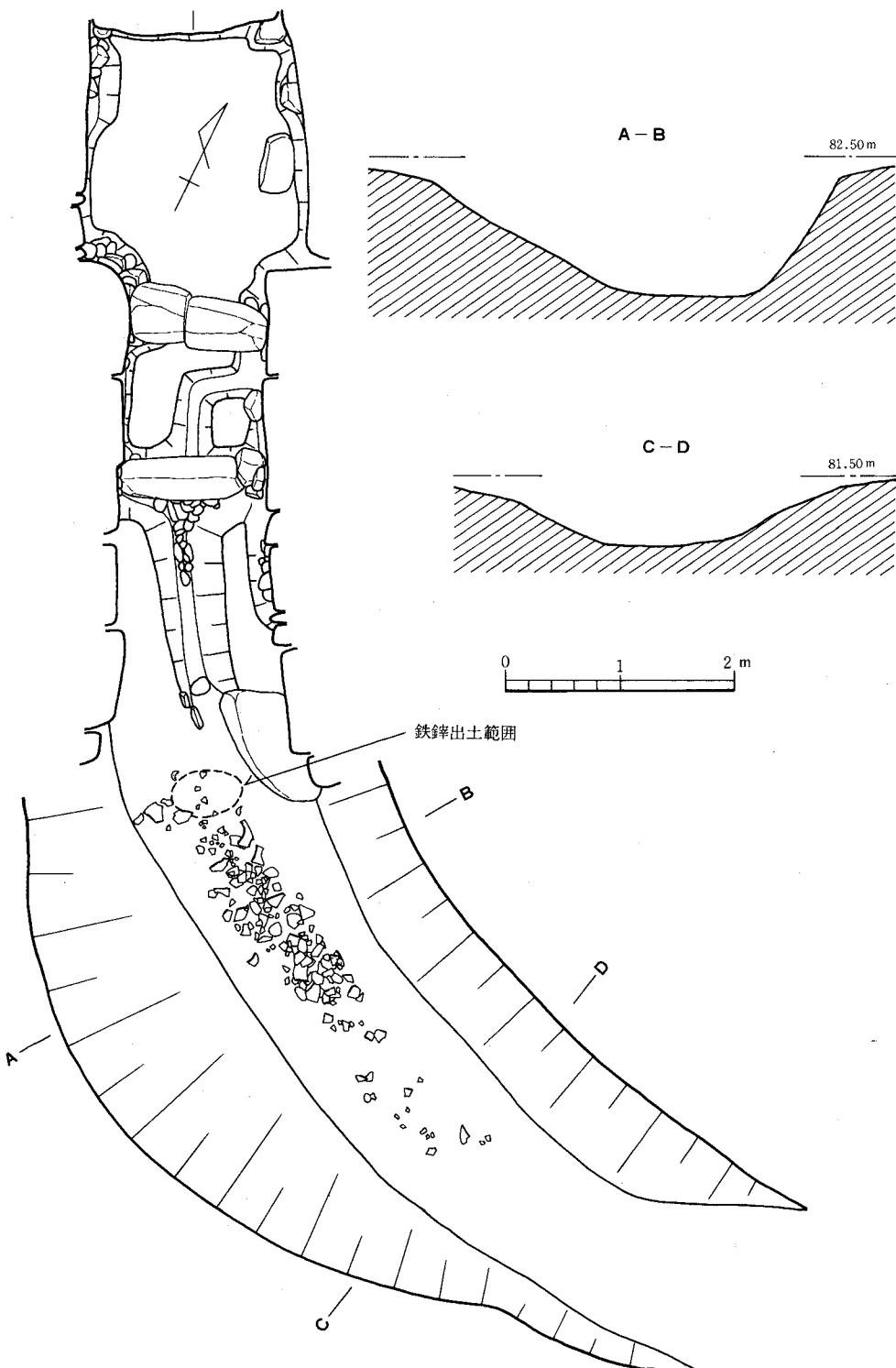


Fig 8 相原 3 号 墳石室床面下遺構および墓道実測図（縮尺 1/60）

れてはいない。調査時に大量の人頭大の転石が玄室内に散在していたことから、これらを用いて床面を構成したと推定することができる。おそらくは玄室・羨道とも墓塚底面から 0.2mほど上部を床面として利用していたものであろう。

床面下施設 墓塚底面は主軸線でやや玄室部が低くなっているがほぼ水平位である。玄室・羨道の腰石を据える際に一段低くほりくぼめ、さらに栗石を使用して安定をはかっているため、横断面形はかまばこ状を呈している。また左右両袖石のあいだに置かれている第2樋石の右壁と接合するところから墓道にかけて排水溝が掘られている。袖石下の掘り込みから伸び第1樋石と第2樋石のあいだで直角に屈曲して底面の中央を流れ、第1樋石の下を通して羨道入口部では暗渠になって、樋石より 1.9mのところで墓道底面に流れ込んでいる。^(註18) 巾 0.2~0.3 m、深さ 0.1~0.2 m のU字溝である。床面がすでに欠失している樋石のあいだでも暗渠になっていたと思われる (Fig 8)

(4) 遺物

出土状況

石室内は古くすでに盗掘をうけているため盗りこぼしと思われる玉類と須恵器の小破片が出土したにとどまる。須恵器・土師器の大半は、墓道底面に堆積した黒色有機質土層中からの出土と、墳丘東南裾の溝中から集中的に出土したものである。しかし墓道の黒色土にしろ数型式のものが破片となって混在しており、層位によって型式が分類される状態ではなかった。また墳丘東南裾部には大形甕の底部が3個密集して盛土中に穴を穿ち底部を据えた状態で出土した。いずれも体部や口頸部は溝あるいは墓道から出土したものと接合している。墳丘盛土からは3本のトレンチによっても何の遺物も検出されていない。なお墓道奥部の底面からは10数個の鉄鏃がまとまって出土し、また墳丘西側裾部からは壠状の内面のただれた土師器が出土したことは注意されよう。

本墳から出土した遺物はつぎのごとくである。

(1) 容器 須恵器
土師器

(2) 装身具

(3) 鉄鏃

遺物

^(註19) 須恵器

杯蓋

口縁部径、天井部調整手法、口縁部内面のかえりなどによってIV類に大別する。

I類 (Fig 9-1~6) 口径12.0~13.0cm、器高3.1~4.0cmをはかる。

相原 3 号 墳

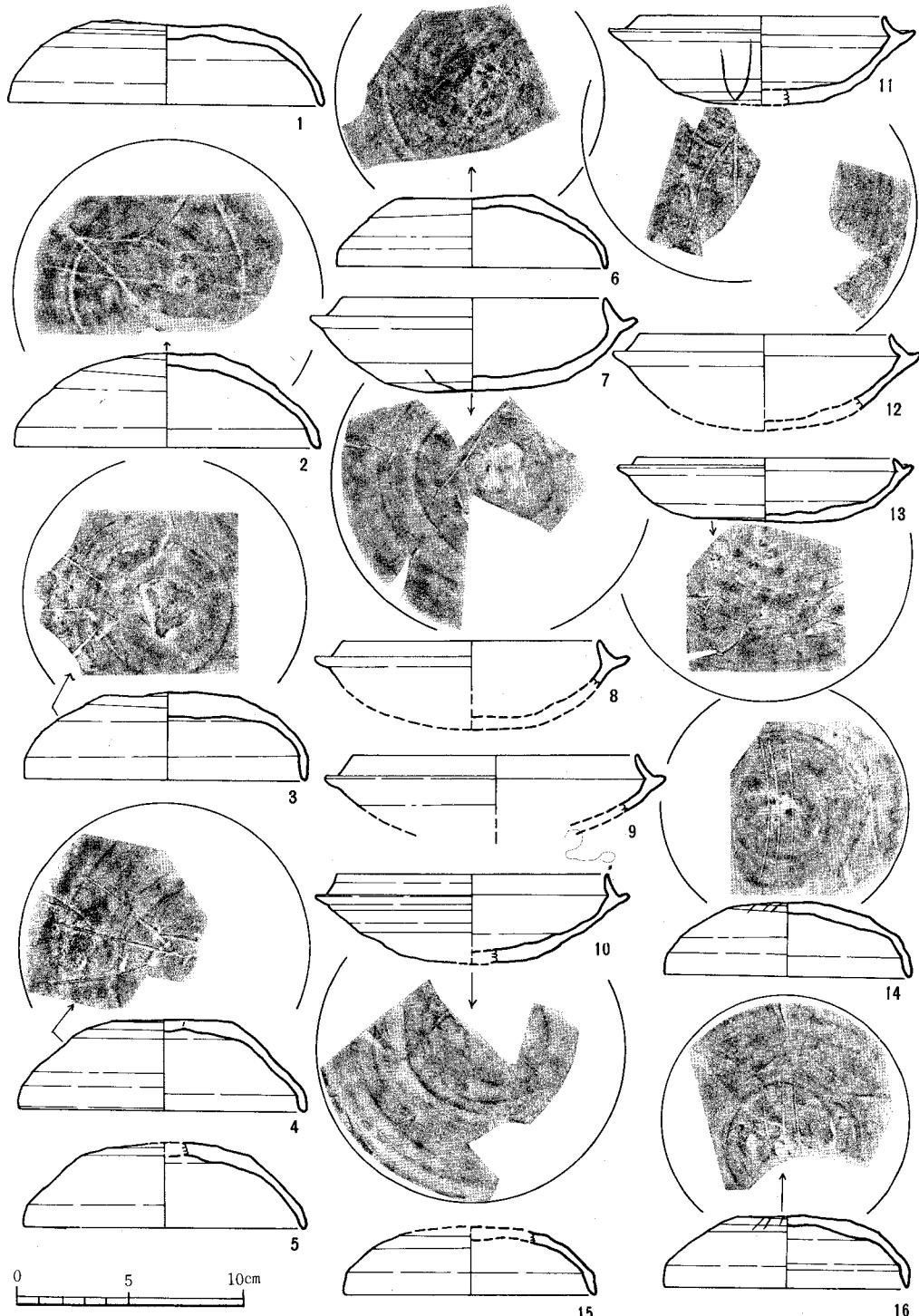


Fig 9 相原 3 号 墳出土遺物実測図 I (縮尺 1/3)

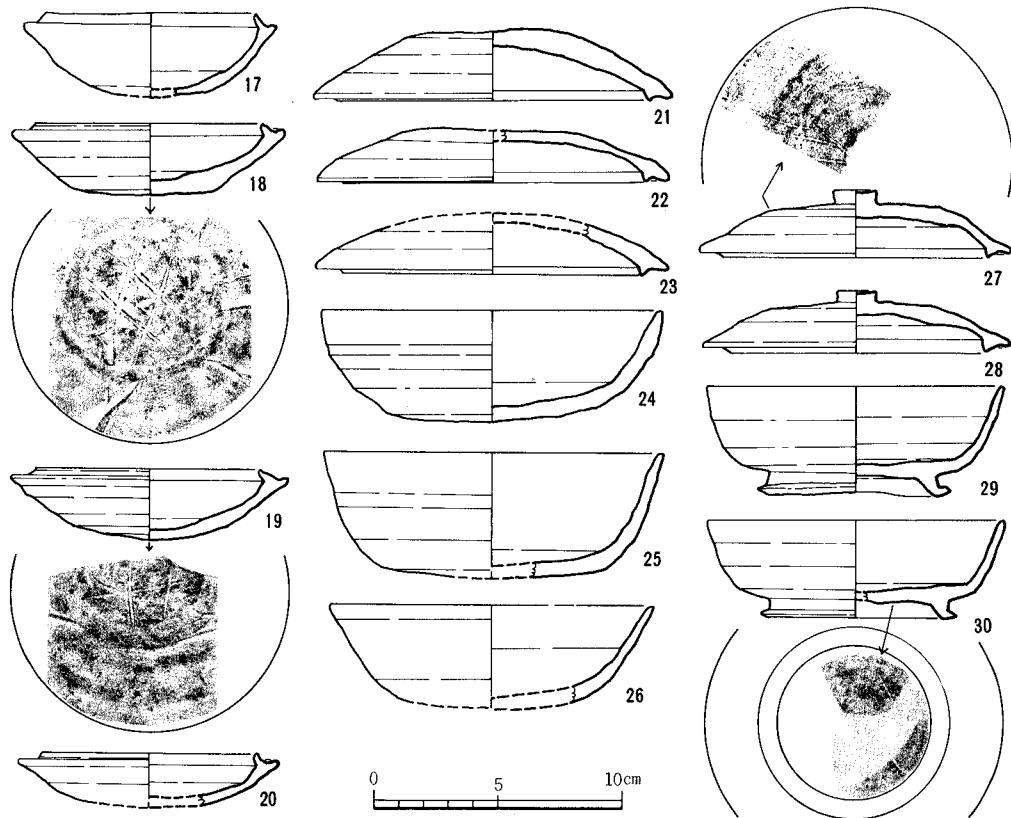


Fig. 10 相原3号墳出土遺物実測図II（縮尺1/3）

I a類 (Fig 9-1~3) b類よりも口径がやや大きめで、天井部の回転によるヘラ削りの範囲は天井部径の1/2ほどである。天井部と口縁部のさかいは不明瞭な弱い稜線がある程度で、丸い椀を伏せた形態をしめし、口縁端部は丸くおさめている。天井部内面はナデ仕上げ調整が施されている。

I b類 (Fig 9-4~5) 天井頂部は平坦となり、平坦面から口縁部とのさかいまで強い傾斜で下降する。天井部の回転によるヘラ削りは狭く、ヘラ移動痕に段がついてヘラ切り離しのまま未調整のものと思われる。口縁部は短かく引きだされ、端部は丸くおさめる。2と4は口縁内面がやや肥厚している。すべてに天井部内面にはナデ仕上げがみとめられる。

II類 (Fig 9-14~16) 口径11.0~11.2cm、器高3.0cmをはかる。

16は天井部を失っているが、わづかに残っているヘラ記号が14、15と一致し、したがって14~16は形態・法量・ヘラ記号をほぼ同じくしてお同一時の作製といえる。形態・手法はI b類と似ているが法量が縮少している。

III類 (Fig 10-21~23) 口径14.3~14.5cm、器高2.3~2.8cmをはかる。

扁平な形態をしめし、口縁部内面にかえりをもつ。天井部の狭い範囲に回転利用のヘラ削りを施している。かえり径はほぼ12cm前後、高さは0.3~0.4cmでいづれも口縁端部よりも下面に突きでている。天井部内面にはナデ仕上げ調整が施されている。

IV類 (Fig10-27・28) 口径12.5cm、器高2.2cm~2.5cmをはかる。

口縁部内面にかえりを有し、天井部にボタン状のつまみを付す。天井部の回転によるヘラ削りの範囲は狭い。かえりは0.5cmの高さで基部は太く端部はするどくおさめている。天井部内面にはナデ仕上げ調整を施している。

杯

I類 (Fig9-7~13) 口径10.8~12.5cm 最大部径13.0~14.9cm、器高2.8~4.1cmをはかる。

I a類 (Fig9-7・8) 8は底部を失うが7と同じく安定した底部をしめす。受け部は厚く、上外方に引きだされる。たちあがりは1cmほどで基部に稜線を入れない。端部はやや尖りぎみにおさめている。回転利用のヘラ削りの範囲は底部径の1/2ほどに施されている。

I b類 (Fig9-9~12) 9は最大部復原径14.8cmと最大のもの。たちあがりは0.9~1.1cmで強い内傾をしめし、基部には鋭い稜線が入る。底部の回転によるヘラ削りは狭く、平坦面をなすものもある。底部内面はナデ仕上げ調整が施されている。

I c類 (Fig9-13) 最大径にたいして器高のきわめて低く扁平なもの。底部は平坦となり、回転によるヘラ削りはその平坦面に限られる。たちあがりは0.6cmと低く内傾する。

II類 (Fig10-17~20) 口径8.4~9.2cm、最大径10~11.2cm、器高2.8~3.4cmをはかる。

II a類 (Fig10-17) 底部の高くまるい感じをあたえる。たちあがりは0.5cmと低く強く内傾する。底部には回転によるヘラ削りはなく掌持ちのヘラ削りが施されている。

II b類 (Fig11-18~20) 底部は浅く扁平である。たちあがりは0.4~0.5cmと低く強い内傾をしめし、端部はするどくおさめている。底部の調整手法は異なり、18は掌持ちのヘラ削り、19はヘラ移動痕に強い段が残りヘラ切り離しのまま未調整、20は狭い範囲の回転によるヘラ削りである。底部内面にはナデ仕上げ調整が施されている。

III類 (Fig10-24~26) 蓋受け部のないもの。口径13.1~13.5cm、器高4.1~5cmをはかる。底部は平坦につくられ、すべて掌持ちヘラ削り調整を施す。25・26は底部から上外方に直線状に引きだされ、端部は丸くおさめている。底部内面はナデ仕上げ調整が施されている。

IV類 (Fig10-29・30) 付け高台をもつもの。口径12cm、器高3.9~4.3cmをはかる。高台は高く、端部は外方にひきだされ安定した感をあたえている。口縁部は上外方に引きだされ、端部は尖りぎみにおさめている。底部は器表面が荒れており調整手法を明らかにしがたい。底部内面はナデ仕上げが施されている。

椀 (Fig11-31) 復原口径12.5cm、器高8cmをはかる。底部と体部のさかいは不明瞭で、体部は内弯ぎみに引きだされる。口縁部は短く外反し、端部は丸くおさめている。底部から体部にかけて回転によるヘラ削り調整を施す。底部内面にはナデ仕上げ調整を施している。

高杯 (Fig11-32~40) すべて無蓋高杯である。形態からIV類に大別する。

I類 (Fig11-32) 細みで長い脚部に小型の杯部のつくもの。脚端部はラッパ状に開くと思われるが欠失している。脚柱部の中位よりやや上に凹線が入るが透しはない。杯は底部と口縁部のさかいに2本の凹線がめぐり、口縁端部は丸みにおさめている。

II類 (Fig11-33・34) 低い脚部に小型の杯部のつくもの。33は杯部口径12cm、脚端径7.5cm、器高7.5cmをはかる。脚部はゆるく下外方に開き、端部は鈍いかえりがつく。杯底部は33は回転によるヘラ削り、34はカキ目調整が施されている。

III類 (Fig11-35~38) 低く極端に外開した脚部に、口径の大きな深い杯部のつくもの。38は脚端部の破片であるが本類に含まれよう。法量は口径13.2~13.6cm、脚端径8.7cm~9cm 器高7.6cm~8cmとほとんど一定している。回転によるヘラ削りを施した底部から内弯ぎみにひきだされた口縁部は長く延び、端部は尖りぎみにおさめられている。脚端面には1~2本の凹線がめぐっており、脚部内外面にはシボリ痕がみられる。杯底部内部はナデ仕上げが施されている。

IV類 (Fig11-39・40) ともに脚部から杯底部の破片で全体を知りうるものはない。脚部は大きく外開し、角度をかえて肥厚した端部は安定している。杯部は明らかでないが39では上外方に内弯ぎみにのびていてIII類の杯部に似るものかもしれない。脚部内外面にはシボリ痕が残る。

瓢 (Fig11-41・42) 器高10.8~11.2cmをはかり近似した形態をしめしている。42は扁平な球形の体部に短い口頸部がつく。頸部は強く外反し、ゆるい陵線をつくって口縁部を引きだし端部は丸みにおさめている。体部中位に2本の凹線がめぐり、そのあいだに41はヘラによる斜線文が、42は列点文がめぐって文様帶となっている。体部の調整は若干ちがいがあって42は上半から下半分にかけてカキ目が、底部は掌持ちのヘラ削りが施され、41は体下半部に回転によるヘラ削りが施されている。

提瓶 (Fig11-43) 口頸部の破片である。口縁部は素形でやや内弯する。口径8.3cm。

平瓶 (Fig11-44) 口頸部の破片である。体部の中央からずれて斜位に付されるもので端部は丸みにおさめる。

短頸壺蓋 (Fig11-45・46) 45は口径10cm、器高2.4cm、46は口径8.8cm、器高2.7cmをはかる。天井部は回転によるヘラ削りが施されている。口縁部はやや内弯し端部は尖りぎみにおさめている。天井部内面にはナデ仕上げがみられる。

有蓋短頸壺 (Fig11-47) 口径 5 cm、器高 4.8cm をはかる。肩は強くはって底部にゆくにしたがってせばまる体部に、やや内傾する短い口頸部を引きだしている。体下半部は回転利用のヘラ削りが施される。

長頸壺 (Fig12-48・49) 48は口径 9 cm、器高14.8cmをはかる。口頸部は直線状に外反し端部は丸くおさめている。体部の最大径のところに1本の凹線がめぐる。下半部から底部にかけて回転利用のヘラ削り調整を施す。49は下半分部を欠失する。口頸部は外反し端部は丸みにおさめる。口縁部に2本の凹線が、また体部最大径の位置に2本の凹線が入り、そのあいだに

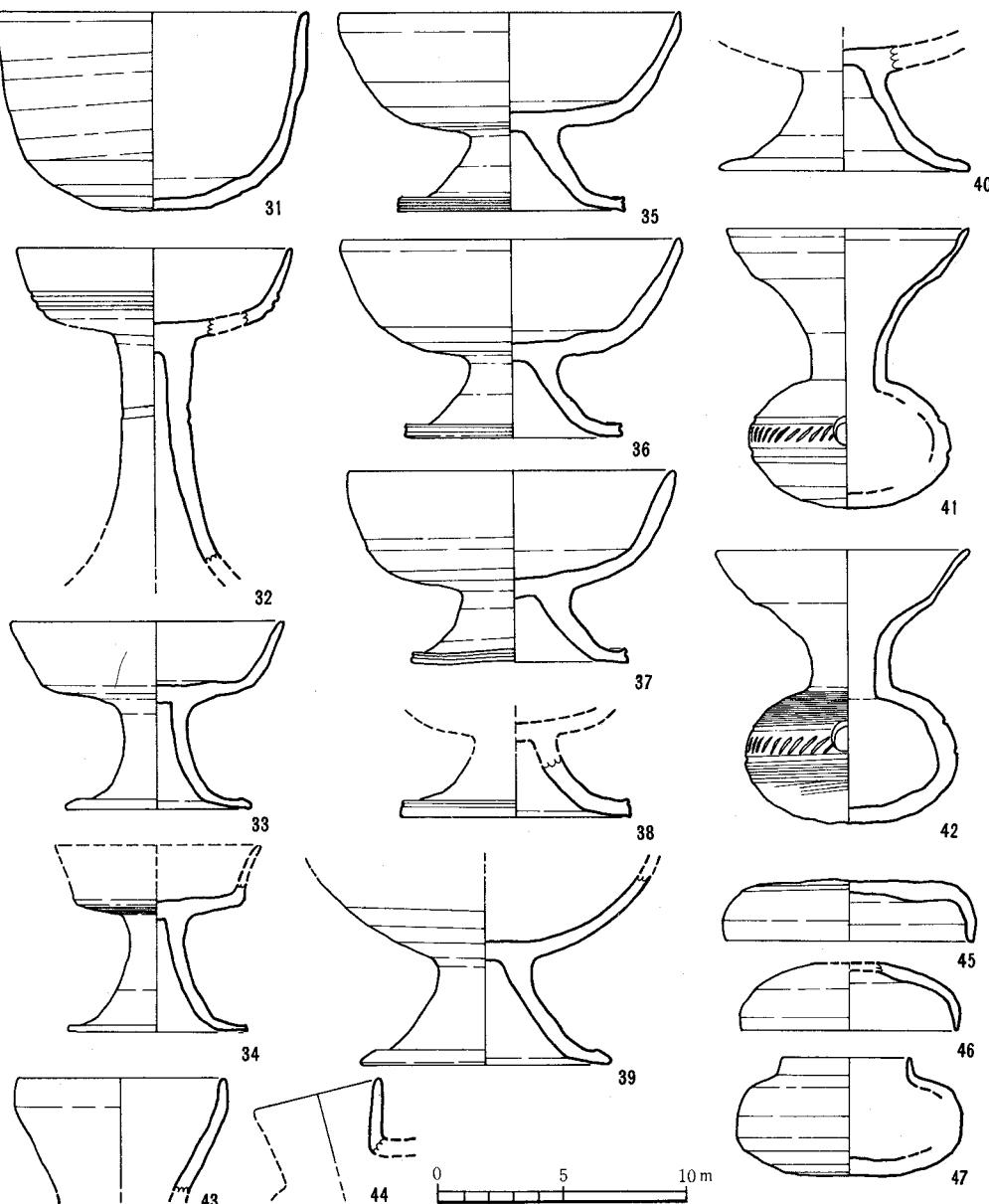


Fig11 相原3号墳出土遺物実測図III (縮尺1/3)

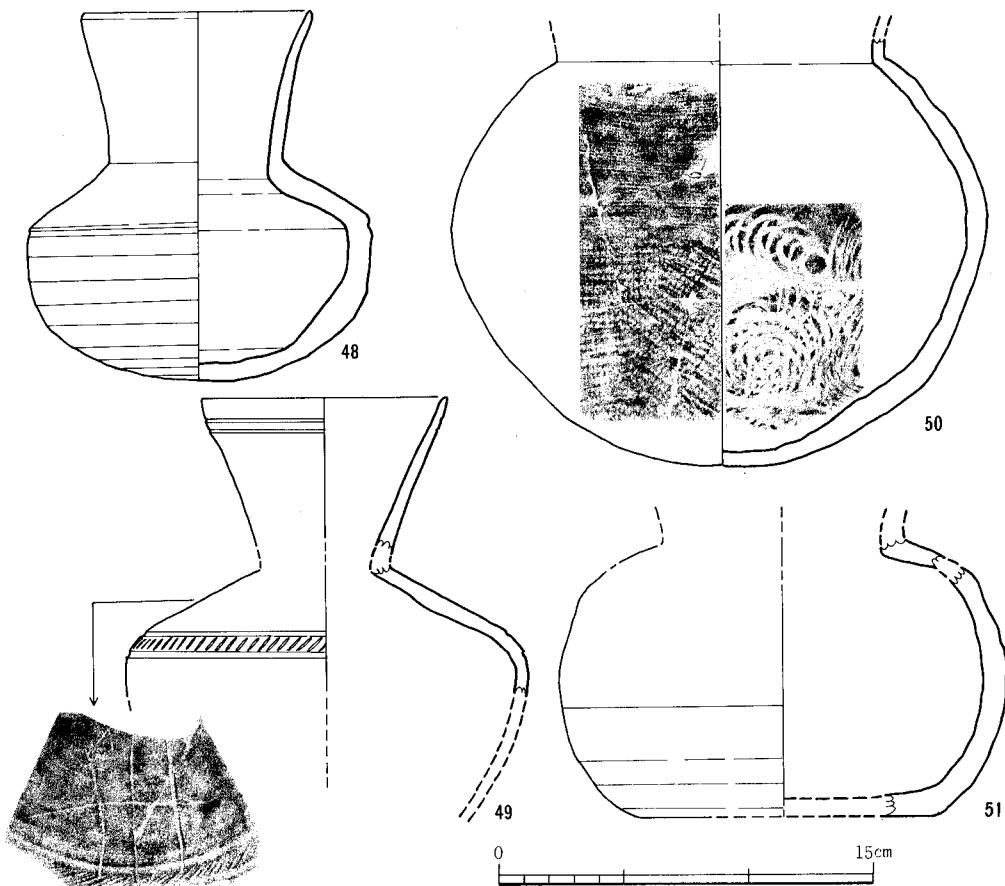


Fig 12 相原3号墳出土遺物実測図IV（縮尺1/3）

列点文をめぐらして文様体としている。

直口壺 (Fig 12-50) 口頸部を欠失する。体部は球形を呈し、最大径は中位よりやや上にある。体部内面は中位から下半に同心円文が、外面には格子ふう叩き目文が残り、上半部はカキ目が施されている。

中型壺

I類 (Fig 13-54・56) 口頸部は低く大きく外反する。体部は肩が強く張って最大径を上位に置いている。56 (付図・3号墳No.3壺) は口径28cm、器高44cm、最大径45.6cmをはかる。口縁端面下に一条の鈍い凹線がめぐっており、端部はやや肥厚して丸みにおさめている。体部内面には同心円文と平行文が交互にみとめられる。平行文は接合部の接着のために用いられたものとすれば、当て板の同心円文とは区別して叩き目文としなければならない。これらから体部は3段構成によって成形されたものと思われる。器表は全面に細いハケ目状の擦痕が、上半部にはカキ目が施されている。頸部には2個のヘラ記号が並列している。54は復原口径28cm、

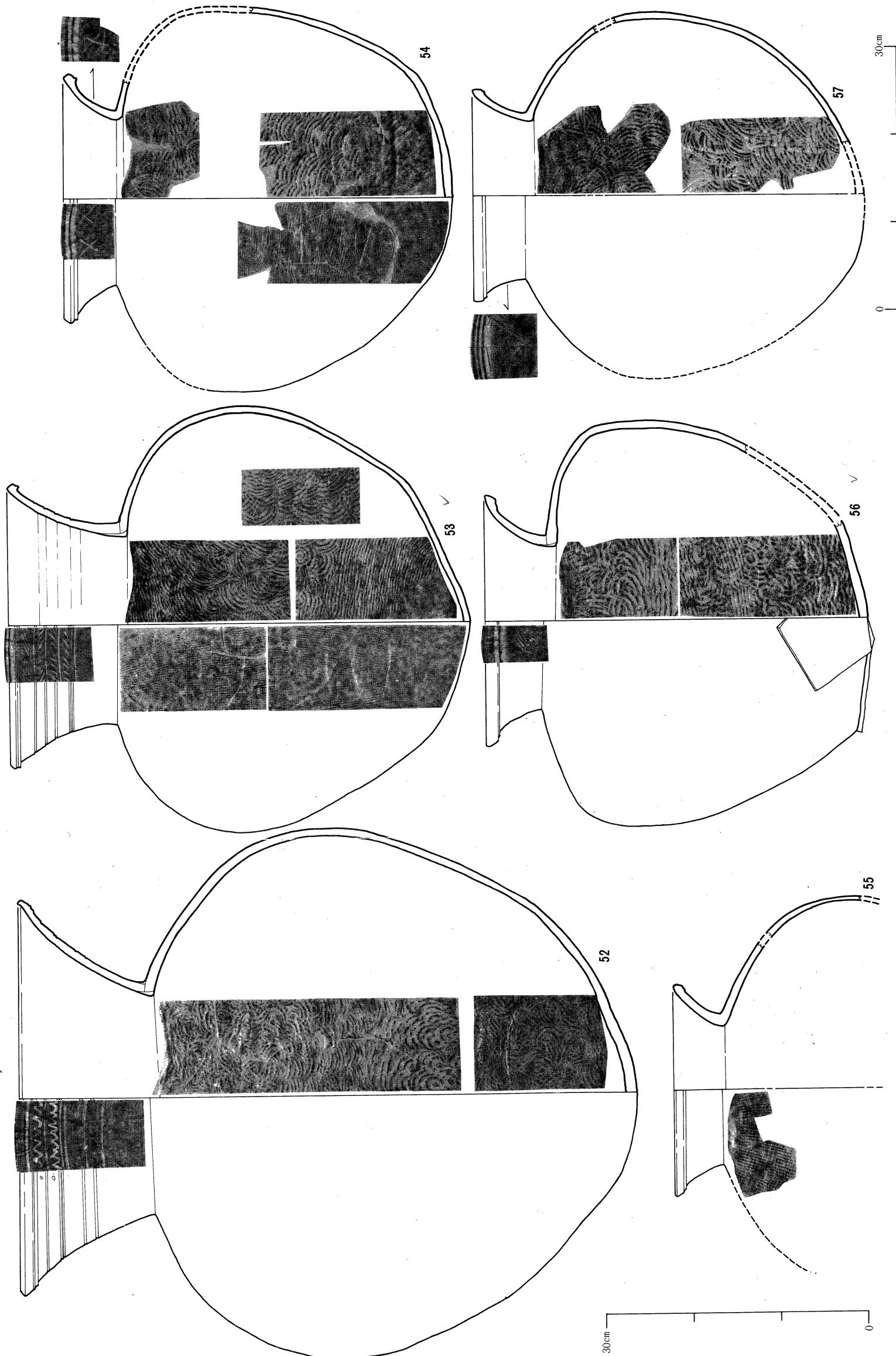


Fig.13 相原3号墳出土遺物実測図V (縮尺1/5)

推定器高約44cmで56とほぼ同形態をしめしている。体部内面には同心円文が残っており、4段の成形と思われる。外面はハケ目状の擦痕がみとめられ、叩目文は消されている。頸部には××と☒☒(うち1個はちょうど欠失部分にあたっている)のヘラ記号が対応する位置にある。

II類 (Fig13-55・57) I類に比して体肩部は強く張らずにナデ肩を呈し、球形をしめす。55は口径24cm、体部中位以下を欠失して全体を知ることができない。口頸部は短かく、I類ほど外反せず上外方に外開している。口縁端面下に鈍い凸帯を付し、端部は丸みにおさめている。体部内面は同心円文が残り、外面には格子ふう叩き目文の上にカキ目調整が施されている。57は口径24cm、器高は復原値で約45cmをはかる。体部成形は4段から構成される。体部内面は同心円文、外面には細いハケ目状のナデの上にカキ目が施されている。

大型甕 (Fig13-52・53) 52は口径46cm、器高70.2cm、体部最大径60.3cmをはかる。口頸部は上外方に外開し、口縁端面下に小さな凸帯を付して端部は上内方に鋭く引きだしている。頸部には4条の凹線をめぐらして、口縁端面と上2条とのあいだに、先端丸棒状の施文具によって単線の波状文をめぐらしている。口頸部の器表は丁寧な横ナデ調整を施す。体部は最大径をやや上位において以下は徐々にすぼまる。体部内面は同心円文が密に残っており、6段から構成されることが観察された。器表は最大径から上部は灰かぶりによって観察できないが、下半分では叩き目文の残るところはなく、横位または斜方向のヘラナデが全面に施されている。色調はねずみを呈しているが、体下半部から底部にかけてセピア色に変っており、焼成時における大形品の炎まわりの状態をしめしているといえよう。53は口径32.6cm、器高52.8cm、体部最大径49cmをはかり、52をひとまわり小型にした形態である。口頸部は52ほど外反せずたちあがっている。頸部には4条の凹線をめぐらしそのあいだにヘラによる斜行文を付して文様帶としている。上から2段目は右下りの斜行文で、他は左下りである。口端面下には小さな凸帯をつけ端部は尖りぎみにおさめている。体部内面は同心円文、底部から下半部には平行叩き目文がみとめられ、それによって5段の積み上げによる体部成形を推定できる。器表には全面にヘラナデが施されて、叩き目文はすべて摩り消されている。

土師器

高杯

I類 (Fig14-1・2) 1は杯部の破片で口径13cmをはかる。底部と体部とのさかいに稜線を付して上外方に外反する形態をしめす。内外面とも丁寧なヘラみがきが施されている。2は脚部片で外面は上下方向のヘラ削りが、内面は横位のヘラ削りが施される。色調は赤褐色を呈し焼成は充分である。

II類 (Fig14-3・4) いづれも破片で全体を知ることはできない。杯部と脚部は同一のものとして作られており接合した痕跡はない。器面は磨滅していて、3の脚柱部に上下方向のヘラ削りをみとめるにとどまった。いまのところ類例のない形態である。高杯というよりも

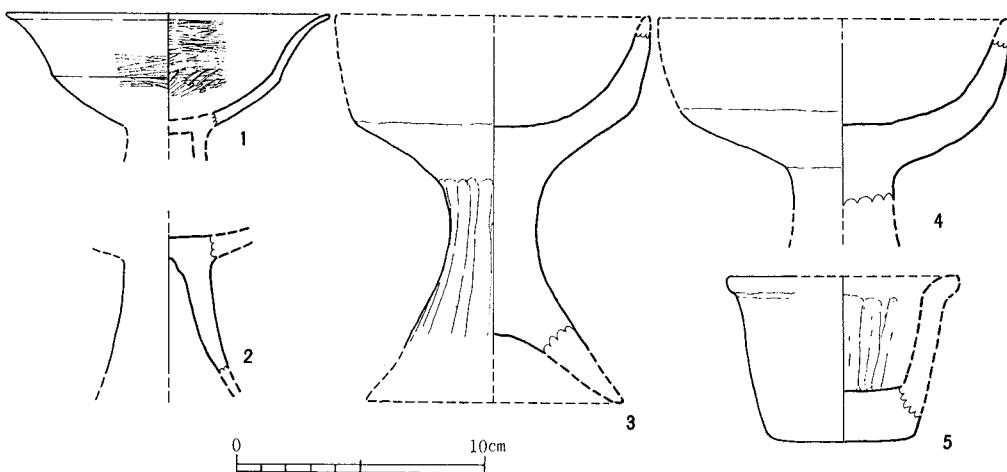


Fig 14 相原3号墳出土遺物実測図VI (縮尺1/3)

むしろ器台か支脚としての用途が考えられるが、ここでは一応高杯とした。

椀 (Fig 14-5) 墳丘西側裾部の溝中から出土したもの。復原口径 9.4cm、器高 6.6cmをはかる。厚い底部からわずかに外開する低い体部に小さく口縁部を折りまげた底の浅い椀状の形態を呈する。胎土には砂粒が多く中には石英粒もみとめられる。外面は茶褐色を呈するが内面は須恵器窯址の窯壁のようにねずみ色に焼けただれ器表の剥離が著るしい。また底部内面に見える石英粒は肉眼の観察では光沢をはなちガラス状に溶解しているように思われる。したがって本土器が容器として用いられた後に供献されたことは明らかであるがはたして内面が焼ただれなおかつ石英をガラス質に溶変させるものは何であったろうか。石英粒がガラス質に溶変する現象は福岡市内で調査された製鉄址より出土するふいご羽口のなかに認められる。したがってかかる現象は本土器の内面に何の付着物も残さないが、仮りに溶解鉄が流入したことによって生じた結果と想定することも不可能ではないことを示唆している。現在のところ古墳時代に遡る堀の類例を知らないため断定はできないが、堀として使用された可能性が極めて強いとも思われるが、類例の追加をまちたい。

装身具

耳環

(Fig 15-1) 石室内ではなく閉塞部から1mほどの墓道底面より出土した。径2.4×2.1cm、厚さ 0.5×0.7 cmをはかり、中実の銅胎に金箔を置いたものである。

管玉

(Fig 15-2) 碧玉製で淡青灰色を呈する。径 0.7cm、長 2.5cm、孔径 0.3cmをはかり、両側穿孔である。

丸玉

(Fig15-3~10) すべてガラス製である。法量はTab 1にしめした。形態的には断面の球形のもの(3)と平たいもの(8)、その中間形態をしめすものがある。

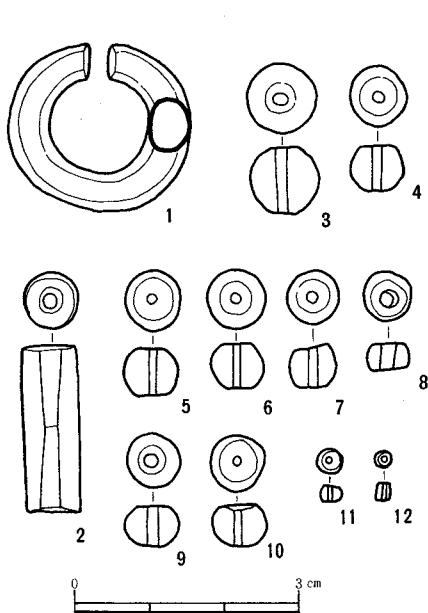


Fig 15 相原3号墳出土遺物実測図VII (実大)

Fig 15	短 径	長 径	高	孔 径	色 調
3	9.1	9.2	8.7	1.6	濃 紺
4	7.8	7.8	6.1	1.2	"
5	7.4	8.0	6.2	1.2	"
6	7.8	8.0	5.9	1.1	"
7	7.0	7.0	5.7	1.3	"
8	6.4	6.6	3.3	1.9	"
9	7.1	7.3	5.5	1.8	淡 緑
10	7.0	7.3	5.6	1.2	赤 褐
11	3.3	3.6	2.0	0.7	淡 青
12	2.3	2.4	2.0	0.7	"

Tab 1 丸玉小玉計測値
小 玉

(Fig15-11・12) ガラス製である。法量はTab 1にしめした。2個とも形態的には不安定である。

鉄 錚

総数12個である。こぶし大のものを最大として小さなものでは径1cmほどのものもある。冶金学的分析が間に合わなかったので形態的観察にとどまるが、表面はケロイド状を呈して重く、内に含まれる鉄分の多いことが推定される。ちなみに鉄錚12個の総重量は570g、最大のもので190gを測定した。

2. 相原4号墳

(1) 位置と現状

本墳は高祖山系より北東に伸びる丘陵尾根上に立地する。

調査前の観察では、墳丘は目立ったものではなく、ただ、本墳北東部に存在する6号墳との境が、明確に落ち込んでいるため、尾根上に隆起した状態のように見受けられた。平板による

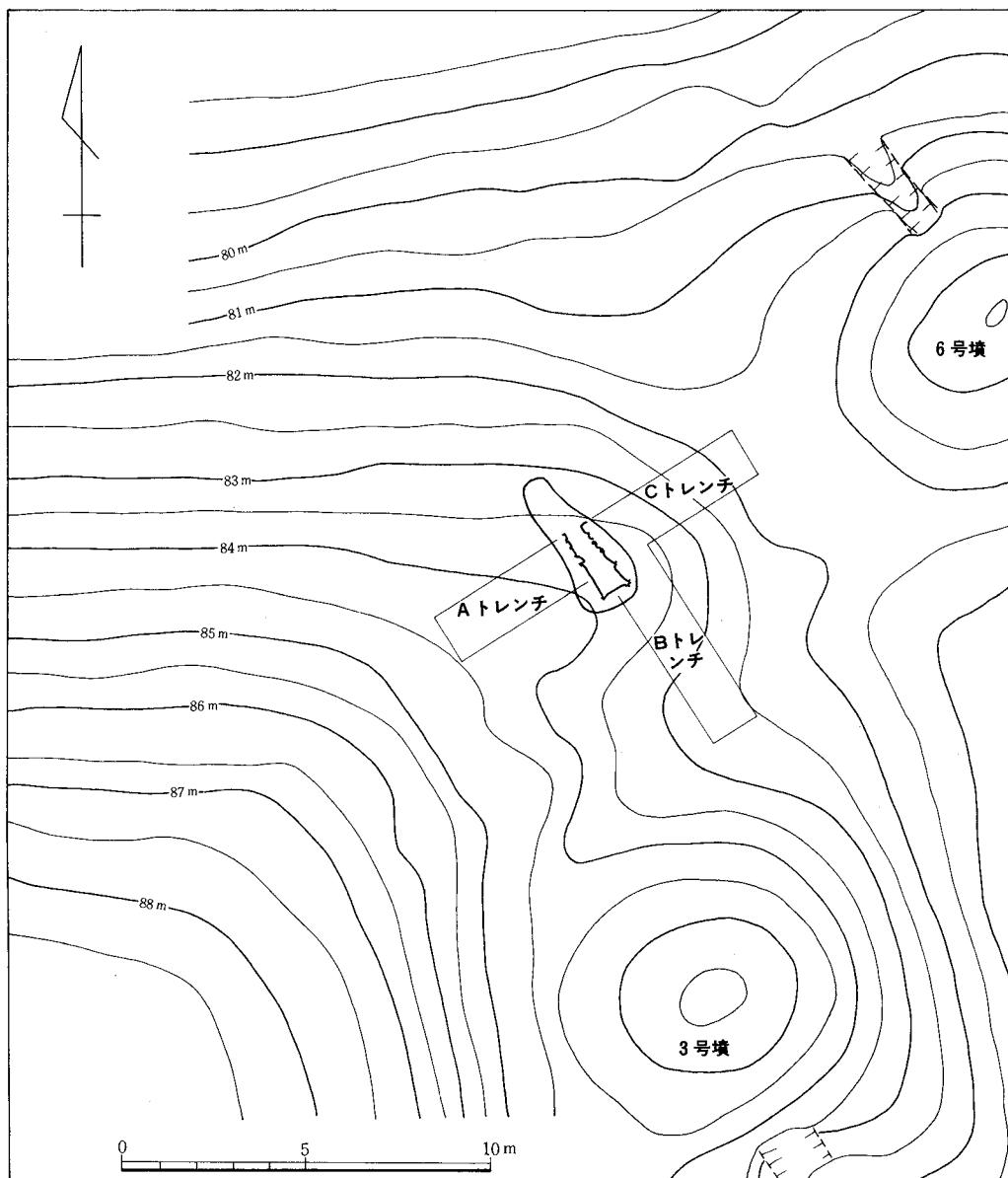


Fig 16 相原4号墳地形測量図（縮尺1/200）

測量でも盛土としての完全な形には現われず、北東部に舌状に流れのような形となり、外見からは古墳かどうかの判断ができかねる状態であった。

(2) 墳丘

一応、十字にトレンチを入れることとし、ほぼ中央部と思われる場所にある土地境界の目印として立つ杉の抜根からはじめた。この部分には、花崗岩の板石、人頭大の石などがかなり散乱しており、また、杉の根もかなりの大きさの板石をかかえ込んでいた。南西～北東のA、Cトレンチを掘る際、須恵器の破片が出土し、ほぼ中央部に石組みらしいものの出土を見た。南東～北西のBトレンチを掘るにしたがい、先の石組みは小形の石室の一部であることを確認し、このBトレンチによって小形の石室を持つ古墳であることが判った。

ABトレンチから観察すると、本墳築造時における明確な墳丘は残存せず、ただ、赤色、または赤褐色砂質層が墳丘の盛土であろうと考えられる。これは中央部からAトレンチでは約1.3mの部分まで認められ、Bトレンチでは約2mの部分まであるが、削られているため、これより先は明確ではない。しかし、下方の同色層が、上方の同層が削られて堆積したものと見られるところから、石室中央部からしても2.5mをこえる所までは及んでいなかったものと考えられる。さらにCトレンチでは2mをこえない部分までに存在する。

本墳築造時には墳域あるいは墳丘の規模・装飾に気を使わなかつたものと見え、このことは築造時に、墳丘の裾部分を明確にしていないことからも窺われる。まず、地山面は、南西から北東に向って、

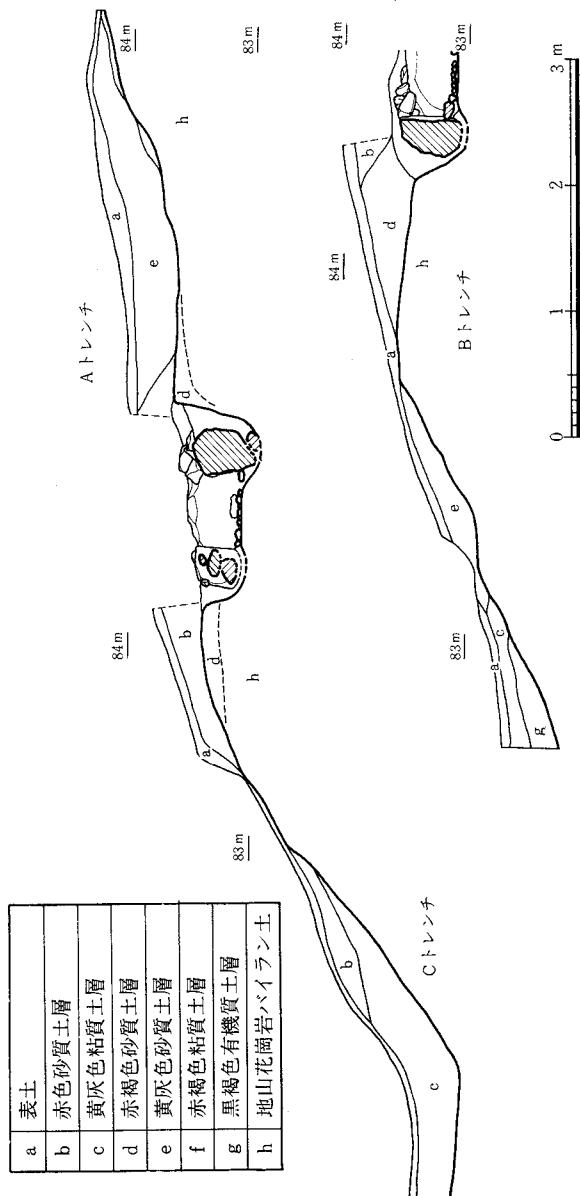


Fig. 17 相原4号墳墳丘断面図 (縮尺1/60)

約15°の傾斜でゆるく下り、石室中央部から 1.4mほどの所から傾斜が大きくなる。この間には、溝、列石など区域を分ける意識をもつ特別の施設は全くなく、さらにCトレンチによっても、地山の尾根には何の施設もない。以上のことから、本墳は、自然の尾根上にわずかに整地した後、深さ玄室奥壁部で約 0.4m、幅 1.8m、長さ 4.2mで、玄室部分を水平にし、羨道出口にくにつれ低くなるような土塹を掘り、さらに、奥壁、側壁、玄門部の樋石の部分を掘り下げた後、石室を構築したことが知られる。さらに石室の架構終了後は、土塹を掘った際の土のみを、わずかに盛土とわかる程度にかぶせただけであったろうと考えられる。

(3) 石室

N-32°-Wに開口する小形の横穴式石室である。まず、先述したように長さ 4.2m、幅 1.8mの、石室の形に似た土塹を掘るが、先端部分は、通常の横穴式石室の墓道を意識してか、わずかに細くしながら若干伸びている。この土塹に、奥壁に 1 個、北東側の側壁（以下、東側壁と記す）に 2 個、南西側の側壁（以下、西側壁と記す）に 1 個の腰石を横にして据える。西側壁の石材は、本石室中、最大の石であるが、高さ 0.6m、幅 1m を超える。この際、数個の人頭大の石を根じめ石として使用し、腰石を安定させている。石室はこの部分までしか残在せず、西側壁と奥壁の接する部分に 1 段ないし 2 段に小形の石が横にして築いてあるが、この上部に積み石があったかは不明である。通有の横穴式石室ならば、さらに数段の積み石があるのが常であるが、本墳の場合は、例えば、普通の横穴式石室のもつ機能上必要な羨道が、形骸化して残され、または装飾的に付けられていることからしてわかる通り、この上部の構造についても速断をさけざるを得ない。このことは、後述するように、横穴式石室的な使用方法と異なることからもいえることである。

次に玄門部分の石材は縦にして使用しており、この部分から先の羨道部では石材を横にして使用することで両者の間の区別を付けている。羨道部の横にして据えた石材は、玄室の腰石に較べると、据え方が甘く、ただ横にして置いているという感じで、この上部にはたいした積み上げはなされていなかったと思われる。これは、本来の横穴式石室の持つ機能と関係のないことによるものであろう。西側羨道部石材は東側のそれのはぼ倍の長さが残存するが、構築時からの互いの長さなのか、判然としない。

玄門部（奥壁から約 1.1m）と、羨道部（奥壁から約 1.5m）の部分には、仕切りの樋石を据えており、この両樋石間には数個の拳大の石を入れている。玄室内部にも、地山の床面のすぐ上に、これも拳石大の石を一面に敷き詰めており、さらには、奥壁に接する両側壁間のはぼ中央に、幅 15cm、長さ 20cm、厚さ 8cm ほどの石が据えられているが、枕石として使用されたものであろうか。

以上のように、機能の面からは異なるが、石室の構築の方法、形態は通常の横穴式石室のそれと、あまり異なることはなく、ただ、その大きさが、通常のものにくらべて大変小さい。石

相原 4 号 墳

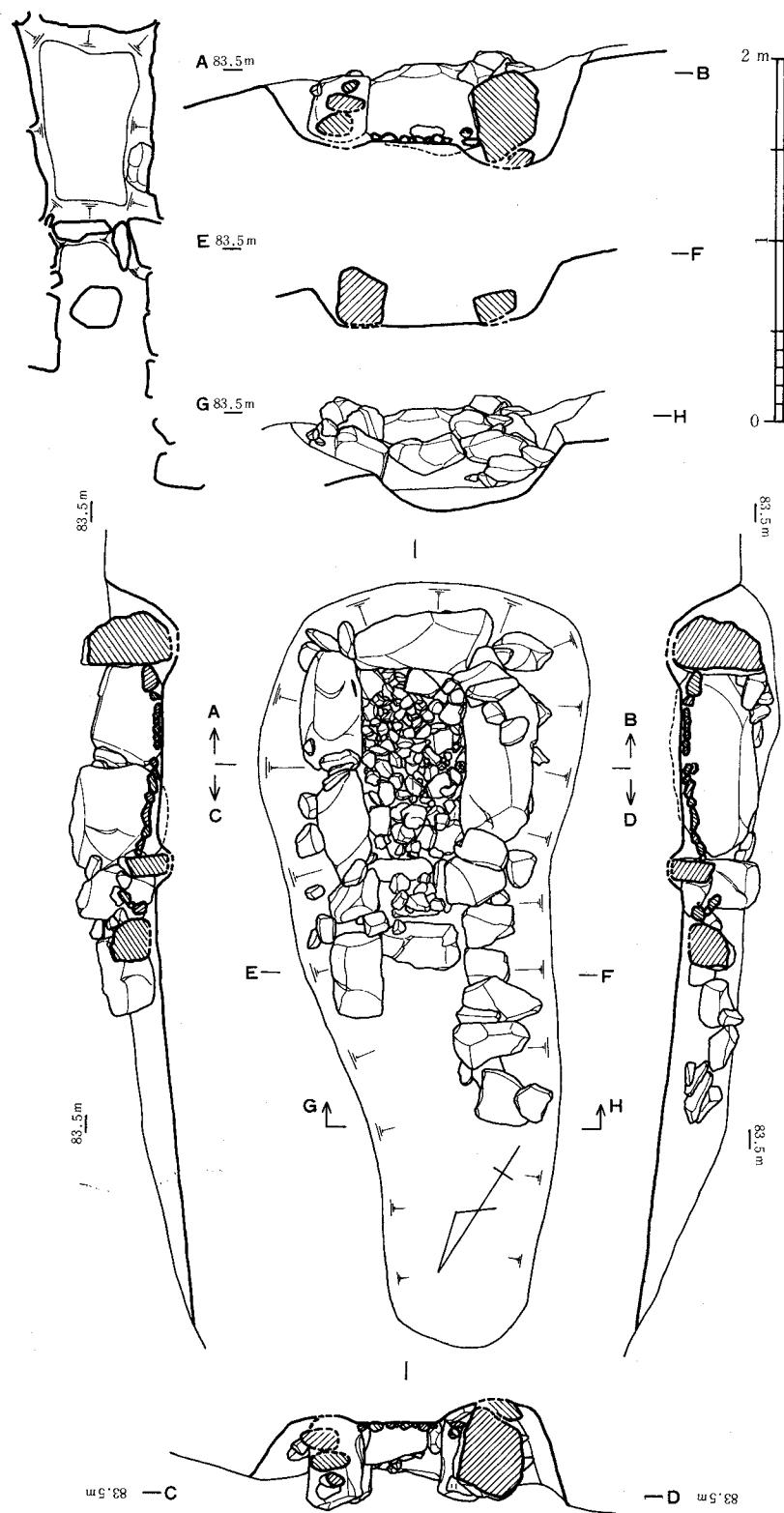


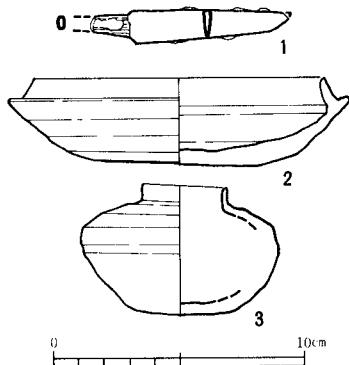
Fig 18 相原 4 号 墳石室実測図 (縮尺 1/40)

室の各部分の法量は以下の通りである。石室の長さ、内側の樋石から奥壁まで 1.1m、幅は、奥壁部で 0.75m、中央部で 0.65m、玄門部で 0.6m、玄門部幅 0.35m、羨道部幅 0.5m を計る。

(4) 出土遺物

出土状況

遺物の数はさほど多くはない。出土の場所は、石室内と石室外（墳丘）とに大別できる。石



室外からは数点の須恵器が出土した。器形は杯蓋、杯身などであるが、破片となって、散在して出土したため、これらを直ちに、本墳築造時の供獻物としてとらえられるかは不明である。

石室内からの出土品は、須恵器小型短頸壺 1 個、刀子一本のみである。小型短頸壺は、奥壁と玄門とのほぼ中央部に、西側壁に接するように、口を上にして据えられており、刀子は、奥壁と東側壁の接する部分に置かれていた。いずれも、埋葬時における位置を保つ

Fig 19 相原 4 号墳出土遺物実測図（縮尺 1/3） ていると考えられる。（藤田和裕）

遺物

刀子 (Fig19- 1) 基端部と鋒端を失欠する。現状で 8 cm をはかる。平造で両闘をもち、茎部には木質が残存する。

杯 (Fig19- 2) 口径 11.5 cm、最大部径 13.5 cm をはかる。たちあがりは 1 cm ほどでやや内傾し、端部は尖りぎみにおさめる。受け部は上外方に引きだされている。底部は回転利用のヘラ削り、底部内面にはナデ仕上げが施されている。ねずみ色を呈し焼成は充分。

小形短頸壺 (Fig19- 3) 口径 3.5 cm、最大部径 7.8 cm、器高 5.0 cm をはかる。口頸部は体部から引きだされ薄みで低く、端部は丸みにおさめる。体部中位に浅い凹線がめぐり、上半部は回転によるヘラ削り、下半部には掌持ちヘラ削りが施されている。（柳沢一男）

(5) 小 結

本墳は、丘陵尾根上に営なまれた小形の横穴式石室を主体部として持つ古墳であるが、どの程度の墳丘を持っていたか不明であり、その墳形も明らかではない。

主体部は、小形の横穴式石室であるが、竪穴式石室的な性格も合せ持つとも考えられる。竪穴式的性格というのは、まず、石室への通路としての羨道であるが、この大きさでは、また先述した構築の仕方からしても、とうていその機能を果し得ず、このことから、石室構築後に遺体を納めるということは無理で、やはり天井部から埋置したものと考えねばならず、この意味において竪穴式石室的であり、さらに、追葬の可能性も上記のことを考えると不可能となり、築造当初から当人のみの埋葬を意識している点もまた竪穴式石室的であるといえよう。（藤田）

3. 相原 6 号墳

(1) 位置と現状

本墳は、ゆるく伸びる尾根中央部にほぼ北西、尾根とは直交して谷に向いて開口する円墳である。4号墳の北東部に接する。

墳丘中央部から羨道側の山林はかって開墾を受け、表土が削られてはいたが、墳丘・石室とともにさほどの変形もなく残っていた。

調査の、本墳の中央より南西側の墳丘、つまり林道が墳裾部にかかる恐れのある部分に、多

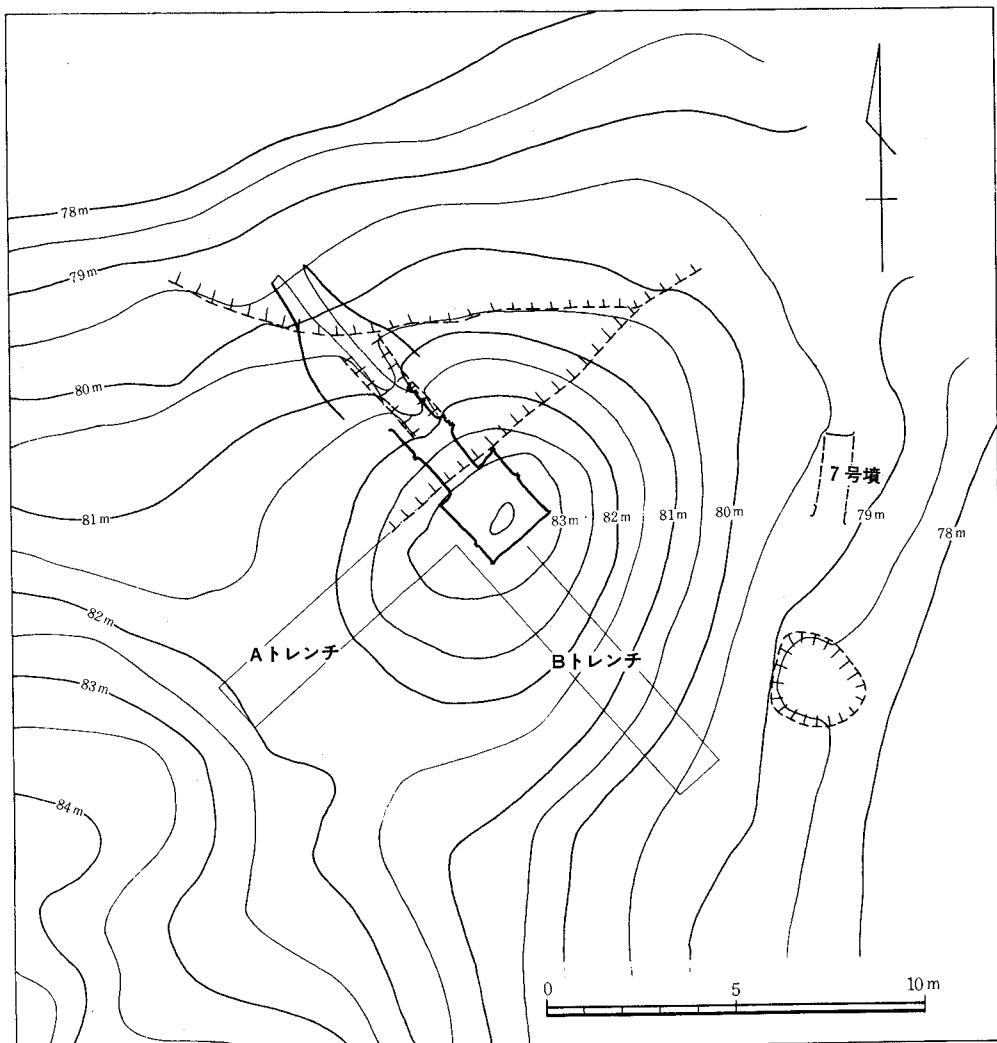


Fig20 相原第6号墳地形測量図（縮尺1/200）

数の土器片の散乱する事実が知られてたため、この部分の築造時の状況、及び墳裾部の確認をその目的のひとつとし、石室は清掃、写真撮影、実測を行なった。

(2) 墳丘

墳丘の調査は、墳丘中心部から南西にAトレンチ、南東にBトレンチを設定し、土塙と地山との関係、土塙と石室との関係、石室の構築方法、盛土の状況および築造時における墳丘の規模などの確認を目的とした。その結果、次のようなことを知ることができた。

まず、丘陵尾根のほぼ中央に、水平に近い平面を作ったあと土塙を掘り下げ、さらに石室の法量、石材の大きさなどを考えて、腰石の据えられる部分は、腰石の安定をはかるためもう一段深く掘り下げている。この段階でAトレンチのように南西側の尾根をそのままにしておくと、墳丘の外見の高さが減じるのを防ぐため、さらに、墳墓の域の表示のためと考えられる深さ0.2m～0.3m、幅3.6mほどの浅い溝状の施設を設けている。土塙のこの部分からの掘り込みの深さは2.2mと深く、Bトレンチは1.2mと旧地山面の高さの差がある。尾根上に、以上のように石室の外法を考えて土塙を掘り下げ、順次石室を築き上げる方法を取るが、石室の腰石には、その下に根石を置いて安定をはかり、次段から小口積みに積み上げるが、いわゆる三角持ち送りの技法を各所に使用するため、石室外側の盛土を除けると、石材が放射状に積まれている様子がよく観察される（Fig21）。

墳丘は、赤褐色粘質土、地山の白色花崗岩バイラン土、赤褐色花崗岩バイラン土、暗灰褐色砂質層、およびそれらの混じった土を石室の構築にあわせて順次、つきしめつつ盛り上げている。Aトレンチでは、玄室中央から4.6mの所からはじまる溝状施設の掘り込みの傾斜に続く土層の変化が見られ、この部分を築造時の墳丘の裾部と考えた。Bトレンチでは石室中央から4.6mの所には、ひとかかえほどの石を置いてあるのがわかった。以上のことから、玄室中央より4.6mの所が、本墳の裾である確信を抱いたが、このことは、次の事実から一層はっきりとした。

遺物の出土状況、つまり築造時における土器の設置の状況、および墳裾部の確認のため、羨道とAトレンチ間（以下、I区と呼ぶ）と、AトレンチとBトレンチ間（以下、II区と呼ぶ）の二区域の表土を剥いだ。この際、Aトレンチで認められた墳裾部の傾斜の変化する状態はI区においても認められ、この部分に6個の石を配しており、この石は羨道最外部の貼り付けたような石積みの部分につながり、墳裾部にめぐらした石列と見て間違いない状態であった。II区においてもこの傾向は存在し、8個の石が単独、あるいは並べた状態で置かれていた。

墳丘の北東側半分は未掘であるため、以上述べたような状態は確認できなかつたが、全体にめぐるものと考えてよからう。

墳丘北東側の地表での、玄室中央からの4.6mの距離では、Aトレンチで知られた墳裾部よ

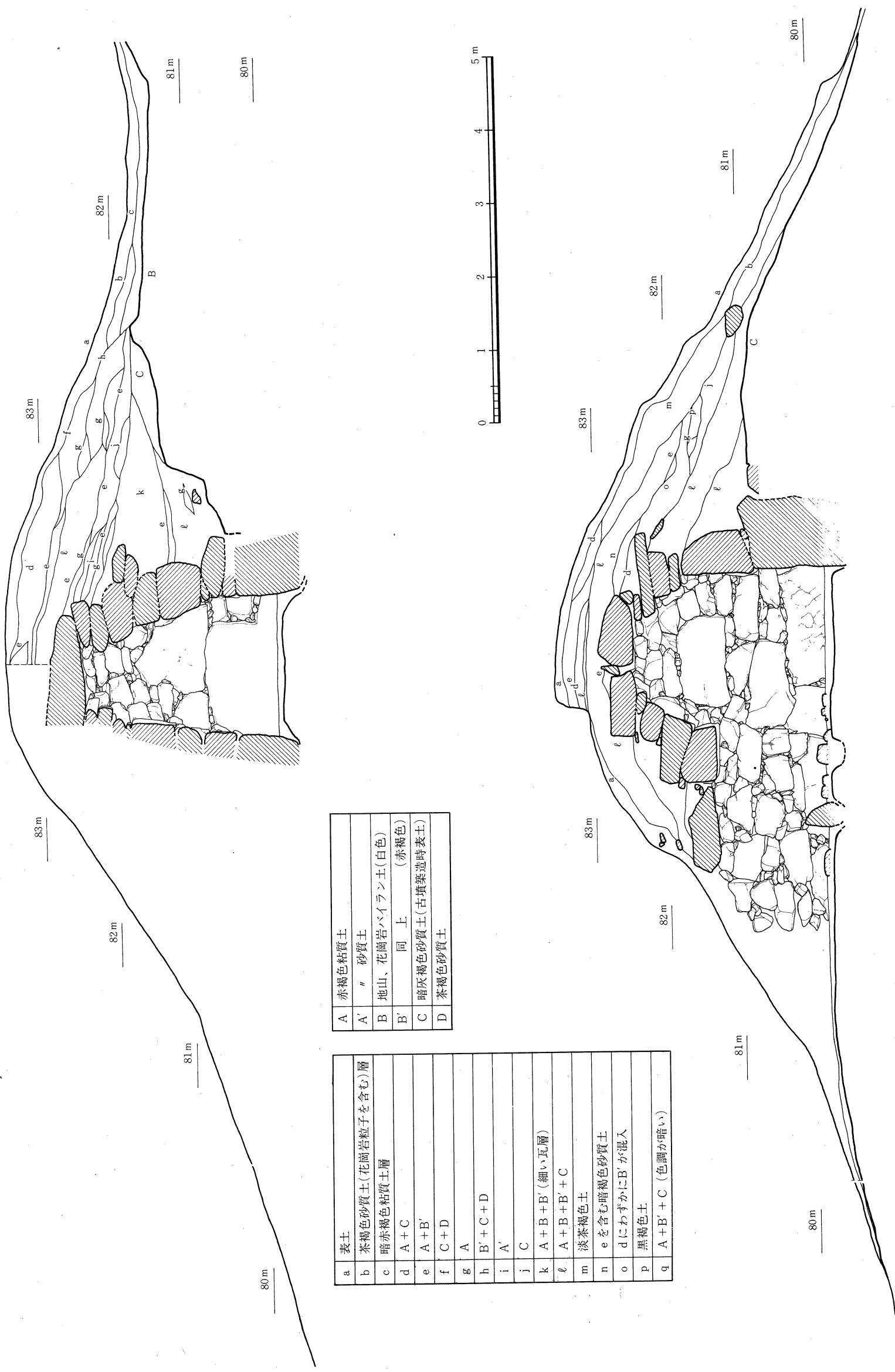


Fig 21 6号填埴丘断面図 (縮尺1/60)

り、水平高で約60cmの差があるが、地山の傾斜などを考慮するとき、さほど問題にはならないと考える。

以上のことから、本墳の直径 9.2m、床面からの高さ3.65mの値を得た。

(3) 石室

主軸をN-41°-Wに向ける单室で両袖型の横穴式石室である。石室は、いわゆる三角持送りを各所に使用しており、天井の部分は、主軸で床面の長さの1/3、幅でも1/3ほどで、かなり内傾がきついドーム状に構築している。

石室全長は約4.2mである。玄室の長さは、北東部側壁（以下、東側壁と呼ぶ）で、2.42m、南西部側壁（以下、西側壁と呼ぶ）で2.15mとなり、さらに、中央奥壁から玄門までは2.30mとなり、若干の違いが見られる。幅について見ると、奥壁部で1.98m、玄門部寄りでは2.00mである。玄門部分の不揃いを気にしなければほぼ長方形になる。高さは2.70mを計る。

石材は全て花崗岩を使用している。大形の石材を横にして腰石としているのは、各壁とも共通しているが、特に奥壁では、2m×1m以上の大好きな石材を使用している。下から順次、大形の石材から小形の石材へと積み上げるが、各石材間の隙間に小さな角礫をつめて形を保っている。床面より90cm、奥壁腰石の高さで、石室構築の一過程を思わせる。横にはほぼ一直線に走る目路が、東・西側壁にも見られる。石室を築く際の、一応の区切りになっていたものであろう。この線より上部は、持ち送りの技法を使用しており、奥壁は下から2段目までは、ほぼ垂直に積み、2段目は腰石より10cmほど内側にせり出しているが、3段目から急に内傾し、最高部の石は、腰石の位置より約70cm内側に出ている。西側壁も奥壁と同じく70cmほど内側に傾いているが、東側壁の傾きは若干少ない。それでも40cmほど内側に傾く。玄門上部の玄室側の壁面についても、この傾向は同じで、玄門天井石の玄室側から50cmほど内側にせり出している。そして、全ての側壁が内傾する壁面に圧力をかけ、崩壊を防ぐべく2枚の天井石をかぶせてこの石室を完成させている。

床面には、構築時には全面にわたって敷石があったと考えられるが、以前にかなりの盗掘を受けたものと見え、調査時には、西側の玄門寄りの部分だけに、平らめの人頭大の石材が構築時の状態と考えられる姿で残存していた。石室の高さはこの面からのもので、地山の面からは2.80mを計る。

玄門も、東・西両側とも石材を横にして積む方法を取っているのは玄室部分と変わらない。まず、東側では腰石として1.5m×0.6m以上の石材を据え、その上に4段に横にして積み上げ、西側では1.6m×0.6mの石材を用い、東側と同じく4段に横にした石材を積んでいる。玄門の幅は床面で95cm、天井部で55cmを計る。

羨道はこの部分から、東側壁で2.43cm、西側壁で2.42mの長さを持ち、ほぼ一直線に外に伸

び幅はほとんど変わらない。玄室と同じく側壁は内傾しており、玄門部分で東側壁は床面から10cm、西側壁で30cmほど内傾している。高さも一定しており、1.4mある。石材も玄室と同じく横にして積み上げ、天井石の乗る部分の側壁は強固に築いているが、その外側は、単に、羨道の壁面に、形が崩れない程度に積み上げたという感じを与え、上部の天井石の存在は肯定しがたい。羨道の天井石は2個である。玄室・羨道ともに非常にていねいな石の積み方をしている。

羨道部には2個所に仕切り石を置いている。以下、玄室寄りのものを第2樋石、外側のを第1樋石と呼びたい。第2樋石は、まず石室構築時の土塹床面よりさらに20cmほど掘り下げ、0.3m×0.95mの石材を据えている。玄室奥壁より2.6mの距離がある。第1樋石は奥壁から3.25mの所にあり、これも深さ20cmほど掘り下げ、0.4×0.9mほどの石材を置いているが、この部分で東側の腰石が外側に切れるため寸法がたらず、さらにもう1個を合せて使用している。両樋石間には、人頭大の石を敷きつめている。

閉塞の施設は、奥壁から3.7mの所にその中心を置く。その中心となるものは、0.6×0.9m厚さ約0.25mほどの板石であり、これを第1樋石の前にもたせかけるような状態に立てて使用している。その横、前面ともにひとかかえほどの石材を積んでいるが、石材間の隙間に土砂を充填している。調査前、かなり破壊されていたためか特に面をそろえたような感じは受け

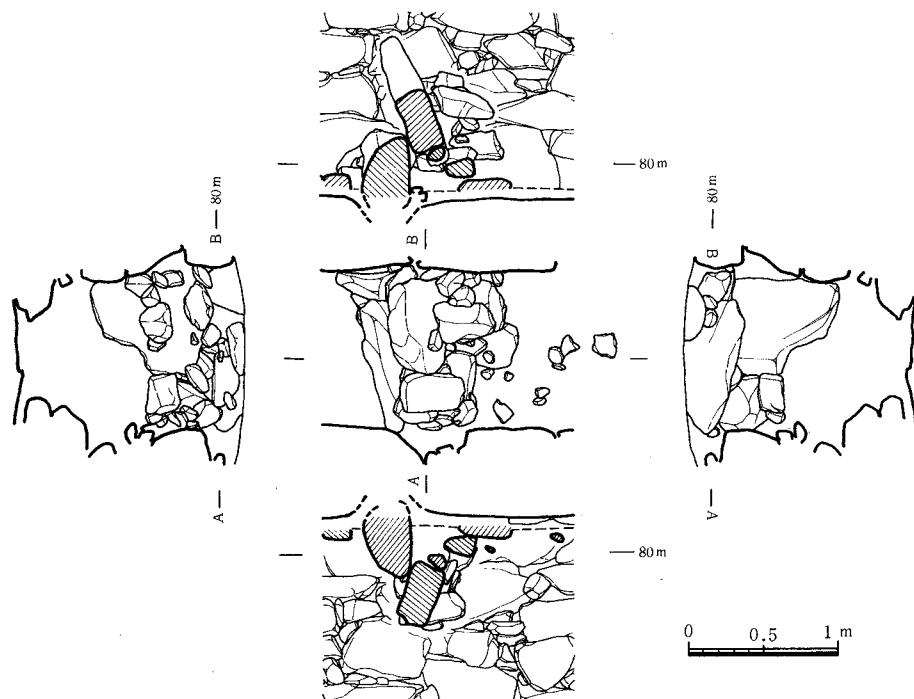
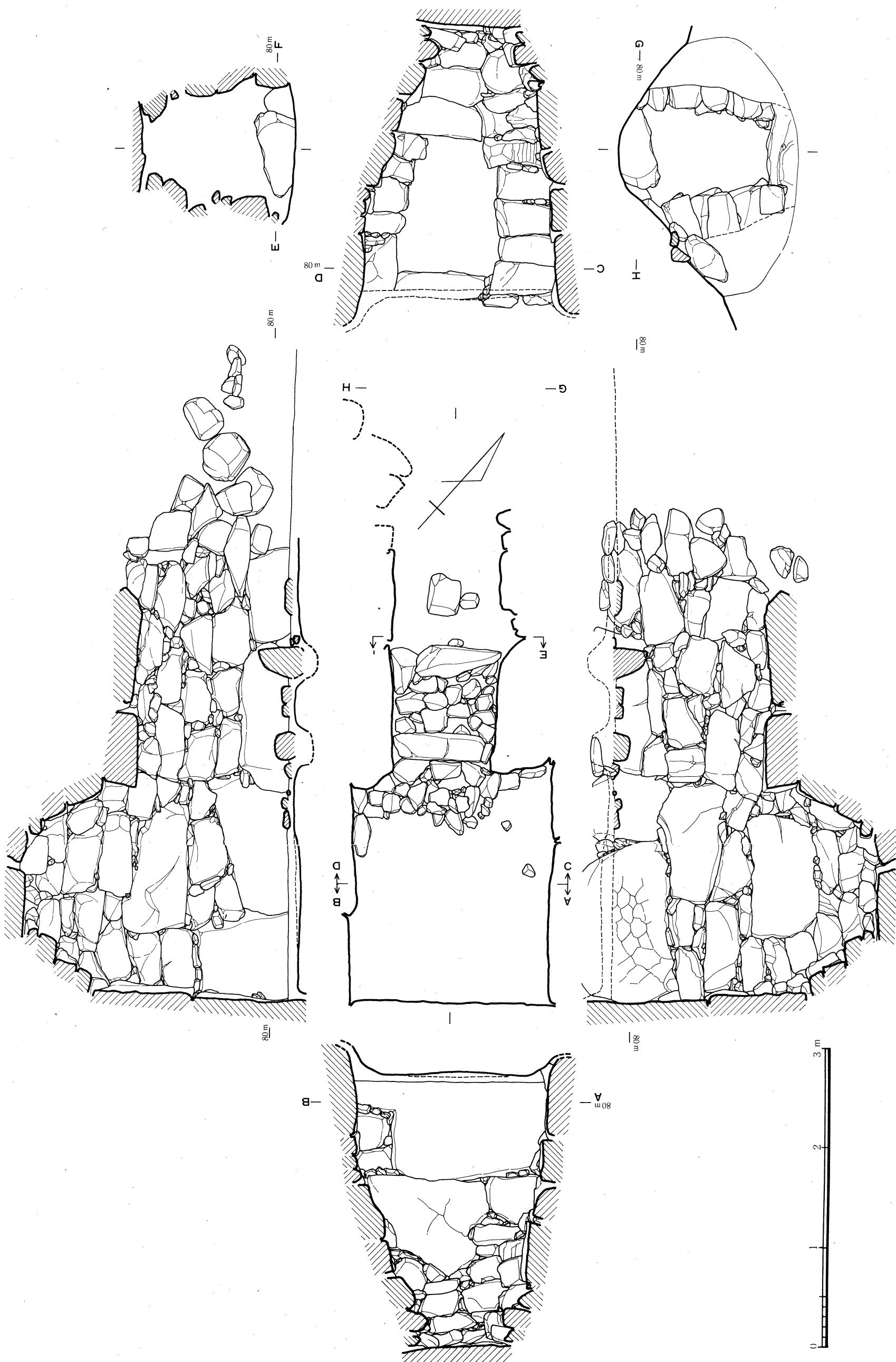


Fig 22 相原第6号墳閉塞部実測図（縮尺1/50）

Fig 23 相原 6 号墳石室実測図 (縮尺 1/40)



ない。残存する閉塞の施設の最高位は床面から95cmを計り、人ひとりの通行がかろうじて可能であった。

床面には敷石・樋石のほかには、排水溝などの施設は見受けられない。

墓道は、羨道からわずかに下りながら約3.5mほどまっすぐに伸びるが、先端部分でゆるく北に向く。先端部は、後年、削り取られているため不明である。

石室構築時に、天井石間の隙間、側壁の裏側に、青灰色の粘土で目張りをしている部分が観察された。

(4) 遺物

出土状況

遺物は、墳丘、墓道、玄室から出土した。墳丘からのものが最も多く、次に墓道、玄室からは杯身・杯蓋の1セットのみが出土した。

まず墳丘からの遺物は、発掘調査前、墳丘南西部の地表面に甕などの破片が散乱しているのが知られ、一部のものは採集されていたが、表土除去作業のさいにも、多数の遺物が散乱していることがわかった。さらに1区の墳裾部には須恵器の甕底部が、築造時の地山表面を、浅く掘り下げて据え置かれた状態で出土し、さらにその西側に土師器の甕が同じように置かれていた。これらのことから、墳丘築造時には、かなりの量の土器が、墳丘上に設置されていたものと考えられる。

墓道からもかなりの量の遺物の出土を見たが、ほとんどのものが破片となって散乱していた。須恵器甕の破片が多数を占める。これらの破片のなかには、墳丘から出土するものと同一個体のものもある。これらは、当初からのものとは考えがたく、築造時に墳丘上に置かれていたものが流入したと考える方が妥当であろう。

玄室内からは東側壁側の玄門部分に杯が身を下にし、蓋をさかさにしてかぶせ、ほぼ水平にして置かれていた。

墳丘の東側半分は、未調査のため墳丘全体の状態は不明であるが、前述したように、かなりの量の土器が墳丘上に立て並べられていたことが想像される。石室内にもあったと思われるが、開口時にその多くが持ち出され、かろうじて玄門部の杯のセットのみが見逃がされたものと思われる。本墳から出土した遺物はつぎのごとくである。

(1) 容器 須恵器

土師器

(2) その他 弥生式土器

(藤田)

遺物 須恵器

杯蓋 口径・口縁部内面段の有無、天井部調整手法によってIII類に大別する。

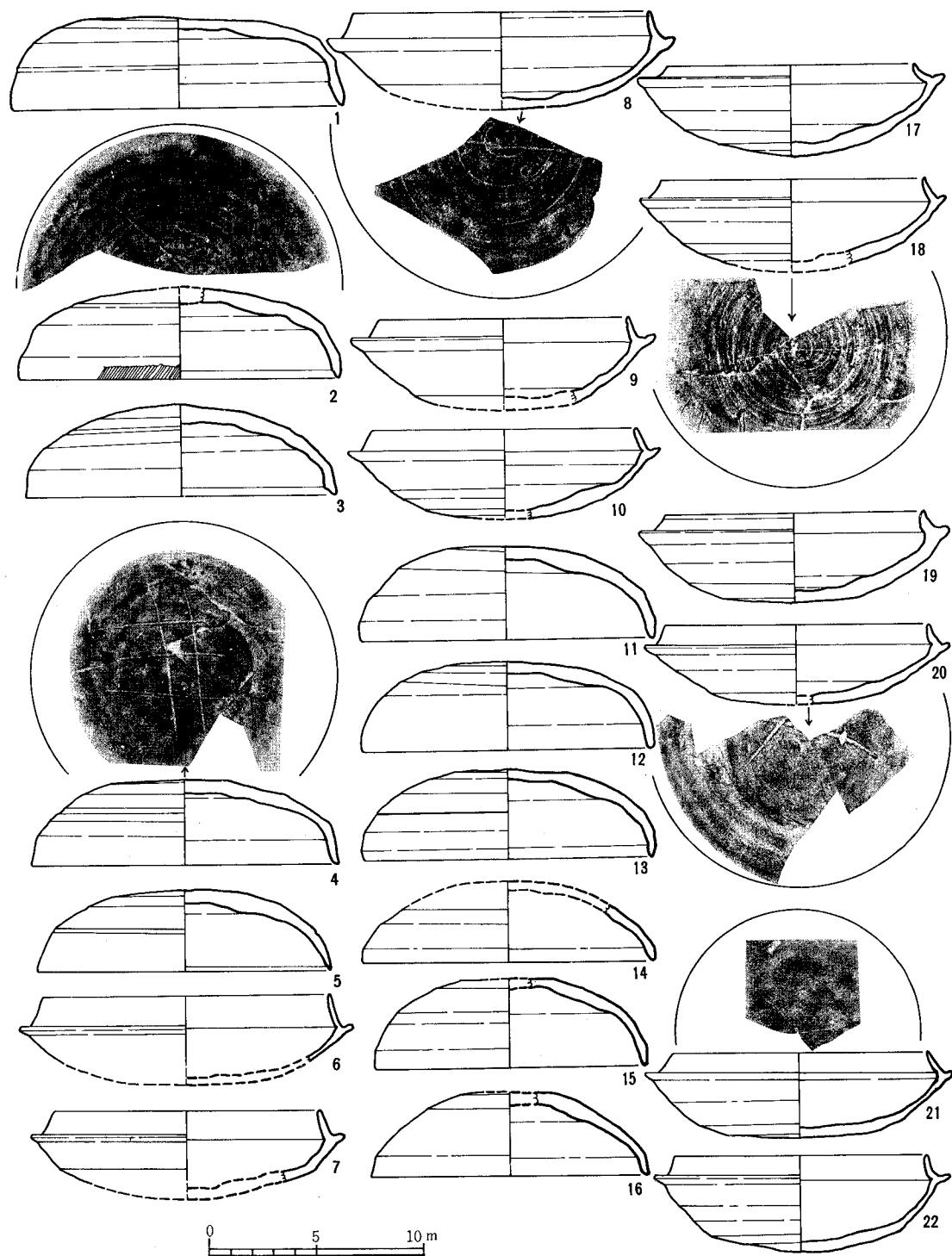


Fig 24 相原 6 号墳出土遺物実測図 I (縮尺 1/3)

相原 6 号 墓

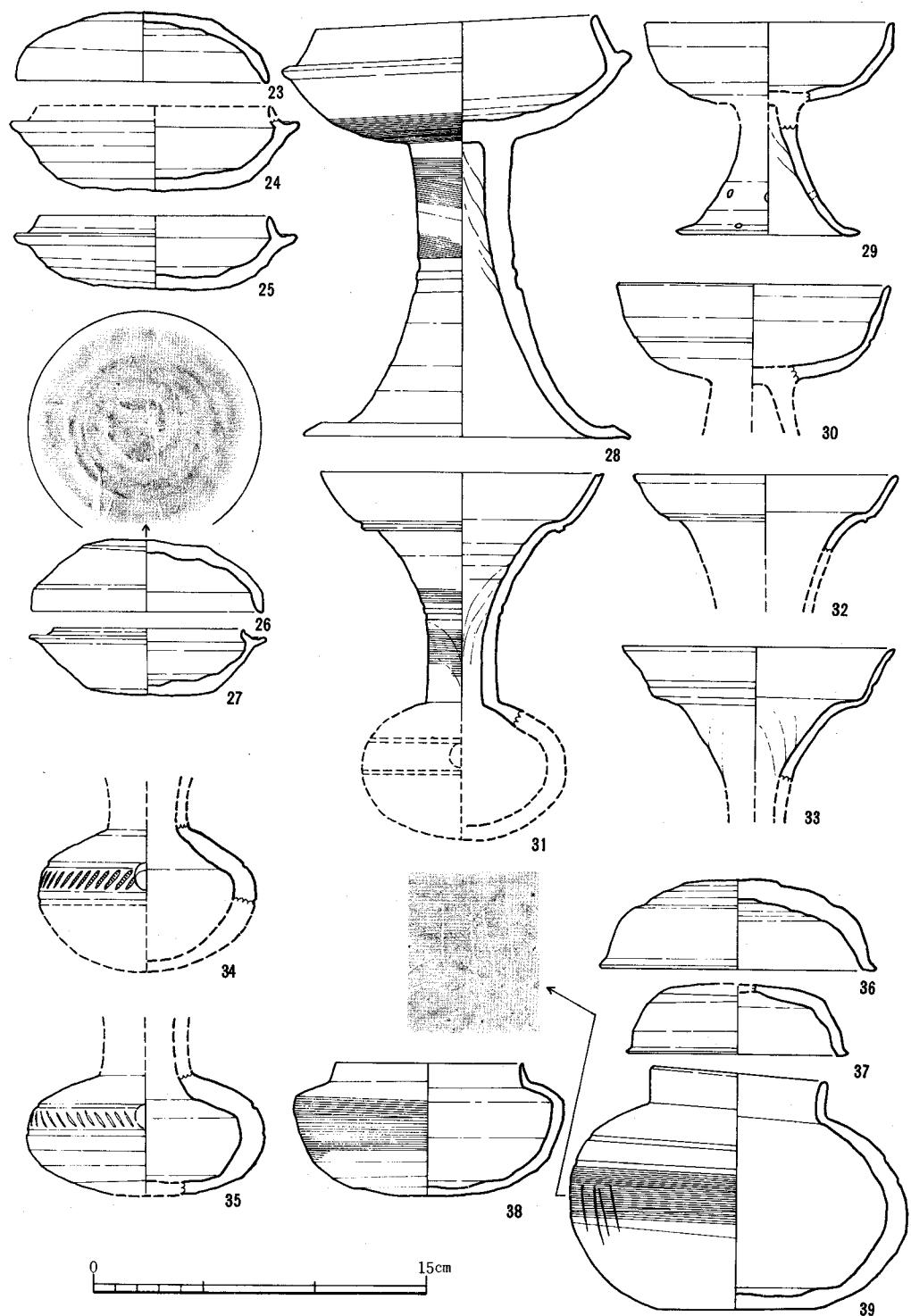


Fig25 相原 6 号墳出土遺物実測図 II (縮尺 1/3)

I類 (Fig24-1～5) 口径13.7～15.4cm、器高 3.8～4.3cmをはかる。

I a類 (Fig24-2・3・5) 口縁端部内面に段をもつが、天井部、口縁部の形態は一定していない。2は天井部回転利用のヘラ削りは体部とのさかい近くまで施され、下外方に引きだされた体部はやや内彎ぎみの口縁部につづく。口端面にはヘラによる細い斜線文がめぐる。3は天井部と体部のさかいが不明瞭で全体に丸みをもった形態をしめす。天井部の回転ヘラ削りのあいだに凹線状の段がつく。5は3を扁平にした形で、天井部と体部のさかいに凹線をめぐらす。天井部内面にはナデ仕上げ調整を施す。

I b類 (Fig24-1・4) 口端面内側に段のないもの。1はI類中最大の口径をもつ。天井部には広い範囲に回転によるヘラ削りが施され、天井部と体部のさかいは、1には鈍い段が、4は不明瞭で稜線を付す。口縁端部は丸みにおさめている。天井部内面にはナデ仕上げが施されている。

II類 (Fig24-11～16) 口径12.5～13.5cm、器高は4cm前後をはかる。

II a類 (Fig24-11～14) 天井部と体部のさかいは不明瞭で、丸い椀を伏せた形態をしめしている。口縁端面に弱い稜線を付して引きだされたもの(11・13・14)と、丸みのもの(12)があり、前者の13・14は内面が肥厚して、端部は尖りぎみにおさめている。13は天井部と体部のさかいに細い凹線がめぐる。天井部は回転利用のヘラ削りが施されているが、I類に比してその範囲は狭く、頂部から若干下ったところから施されている。天井部内面にはナデ仕上げ調整が施されている。

II b類 (Fig24-15・16) 口径はII a類よりも小形化して、天井頂部は狭い平坦面をなしでいる。平坦面から直線状に下外方にのび、弱い稜線を付して、口縁部は短く引きだされている。端部は尖りぎみにおさめる。天井部の調整は頂部平坦面より少し下ったところから回転利用のヘラ削りが施される。内面はナデ仕上げを施す。

III類 (Fig25-23・26) 口径10.5～11.5cmとなり、最も小形化したもの。

III a類 (Fig25-23) 形態はII a類に近似する。天井部の回転利用のヘラ削りは頂部に限られ、口端部は丸みにおさめている。天井部内面はナデ仕上げを施す。

III b類 (Fig25-26) 口径10.5cmをはかり最小のもの。形態は天井頂部が平坦をなしII b類にほぼ一致する。天井頂部の平坦面はヘラ切り離し後に若干の掌持ちヘラ削りが施されている。口縁部内面はやや肥厚し端部は尖りぎみにおさめる。天井部内面にはナデ仕上げを施す。

杯 杯蓋に対応してIII類に大別する。

I a類 (Fig24-6～8) 口径12.5～13.7cm、最大部径14.6～16.2cmをはかる。たちあがりは1.4～1.6cmと高く、内傾度は弱い。6は細みで基部に鋭い沈線が入る。8は口端部より少し下ったところに浅い凹線をめぐらしている。底部の回転利用のヘラ削りは広い範囲に施さ

れている。内面にはナデ仕上げ調整が施されている。

I b類 (Fig24-9・10・18) 口径12cm最大部径14~14.5cmをはかり、I a類より若干小形のもの。たちあがりは1.2cmほどでやや内傾する。9は端部から少し下ったところの内面に浅い凹線が入り、10は横ナデによって端部を斜めにおさめている。底部の回転によるヘラ削り調整の範囲はI a類よりも狭まる。内面にはナデ仕上げが施されている。

II類 (Fig24-17・19~22) 口径11.5~12cm、最大径13.8~14.2cmをはかる。たちあがりは1cmをこえるものではなくおおむね0.7~0.9cmで、内傾度はI類よりも強く、17のように極端な内傾をしめるものもある。端部はほとんど丸みにおさめている。底部は浅く、平坦化しており、回転利用のヘラ削り調整はI b類と同程度の範囲に施される。内面はナデ仕上げが施されている。

III a類 (Fig25-24・25) 口径10.5cm、最大部径約13cmほどである。たちあがりは1cmほどでやや高く、端部は尖りぎみにおさめる。底部の回転利用のヘラ削りはII類よりもさらに狭まる。内面にはナデ仕上げを施している。

III b類 (Fig25-27) 口径8.5cmをはかる最小のもの。杯蓋III b類 (Fig 25-26)と重なって玄室内の攪乱層中から出土した。たちあがりは0.5cmほどで内傾し、端部を上方に引きだしている。底部は掌持ちヘラ削り調整、内面にはナデ仕上げ調整を施している。

有蓋高杯 (Fig25-28) 杯部口径12.5cm、最大部径15.5cm、脚端径16.7cmをはかる。脚柱部は凹線によって2分されるが透しではなく、ラッパ状に開き、端部は下外方に短く引きだされる。杯部は杯I類に形態が類似しており、底部にはカキ目が施される。また脚柱部もカキ目が施され、内外面にはシボリ痕が残る。

無蓋高杯

I類 (Fig25-29) 杯部片と脚部片は接合できず推定復原である。脚部は低く、強く外開している。柱部と端部の2ヶ所に円形の小さな透しがある。破片であるため透しの方向は不明である。杯部は口縁部が短くたちあがって杯蓋II b類を逆さに付したものに似ている。

II類 (Fig25-30) 脚部を欠失する。口径12.4cmをはかり、体部中位には一条の凹線をめぐらす。口縁端部は丸みにおさめる。底部には回転によるヘラ削りが、また内面にはナデ仕上げ調整が施されている。

聰 (Fig25-31~35) 破片のみで全体を知りうるものはない。口頸部は31と32に口縁部と頸部のさかいに凸帯がめぐる。33は凸帯がなく、屈曲して上外方に外反する。体部は34では球形をしめすが、35は中位が大きく張りだしている。いづれも中位よりやや上のところに2本の凹線をめぐらし、そのあいだに、列点文、斜行文を施して文様帶としている。31は頸部にカキ目調整が施されており、31、33には頸部内外面にシボリ痕がみとめられる。

短頸壺蓋 (Fig25-36・37) 37は法量からみて39の蓋になるものであろう。36は口径12cmを

はかり大形である。天井部は回転利用のヘラ削りが施され、体部とのさかいに段を付している。口縁端部は36・37とも外方に引きだされている。37の天井部は掌持ちヘラ削り調整が施され、内面にはナデ仕上げが行われている。

有蓋短頸壺 (Fig25-38~39) 38は広口のもので、口頸部は体部から垂直に引きだされて端部は鋭くおさめる。体部の上半から下半にかけてカキ目が、下半部から底部にかけては回転によるヘラ削り調整が施されている。39は体部に太めの口頸部を付したもので、端部は丸みをおさめている。体部の上半位に2条の凹線をめぐらし、以下はカキ目調整を施す。下半部から底部は掌持ちヘラ削り調整である。

器台 (Fig26-40~42)

I類 (Fig26-40) 脚部の一部に推定復原したところがあるが、口径33cm、脚端径28cm、器高は約51cmほどになると思われる。脚部は6段に文様構成され、最下段を除く各段には透しが入る。透しには円・長方形、三角形の3種が用いられており、円周の6ヵ所にはほぼ60度づつずらして配置されている。最上段の円形透しと4段めの三角形透しが上下にならび、対応する位置に、2段、3段めの長方形透しと5段めの三角形透しがあたっている。各段にはカキ目調整が施され、最上段と最下段を除いてはカキ目の上に先端丸棒状の施文具によって単線

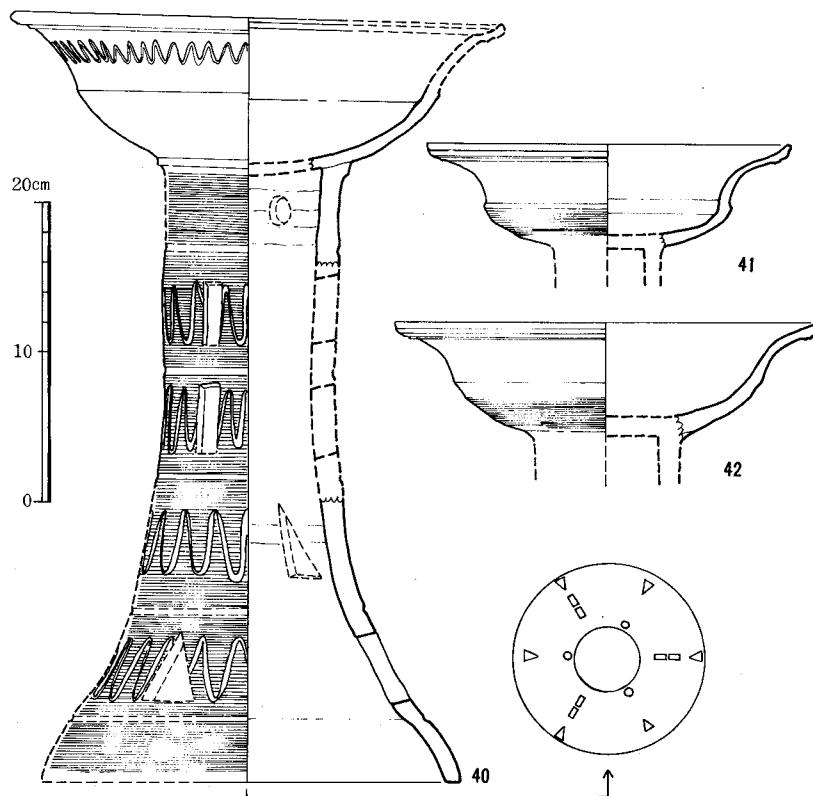
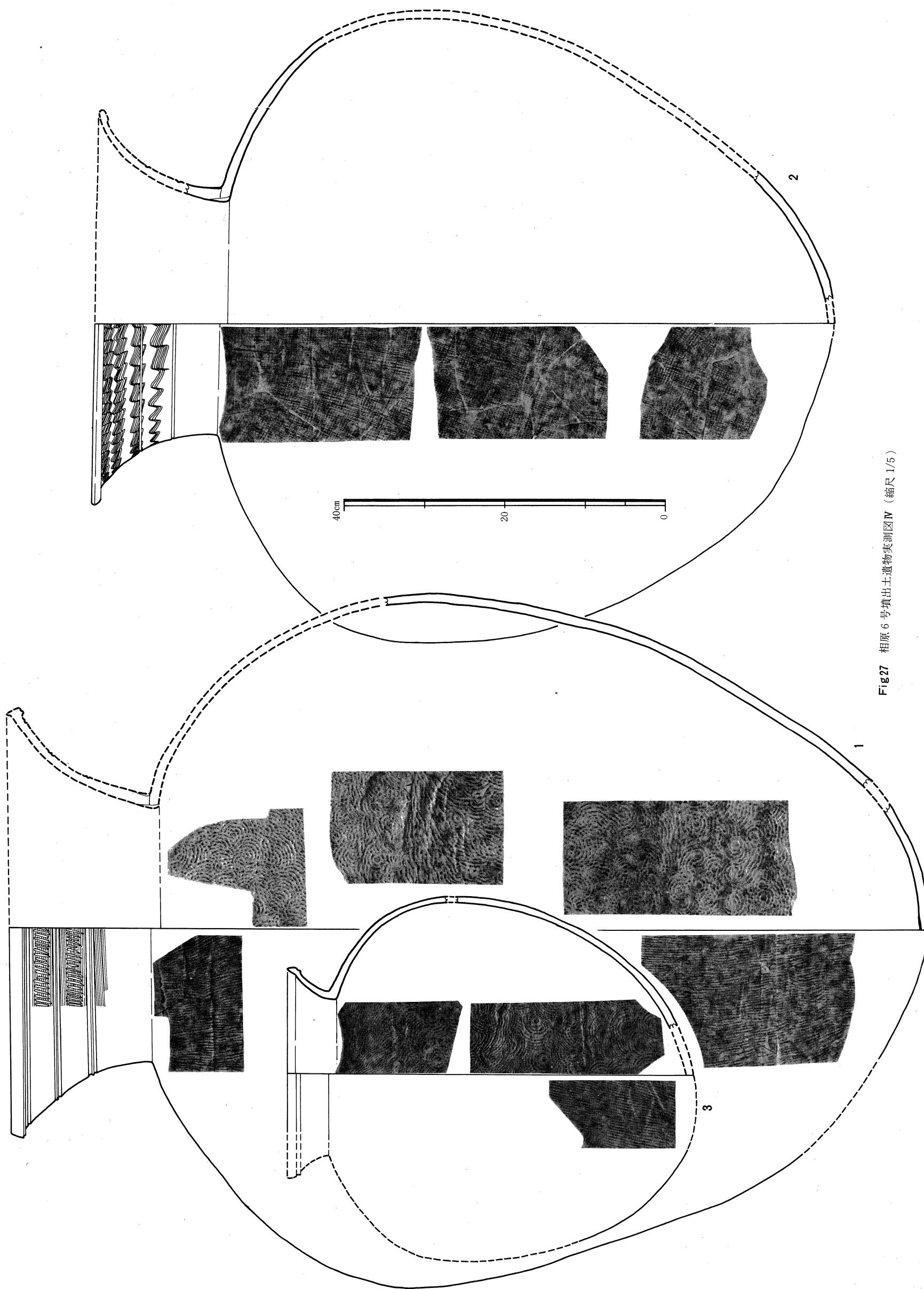


Fig26 相原6号墳出土遺物実測図III (縮尺1/5)

Fig.27 相原 6 号墳出土遺物実測図 IV (縮尺 1/5)



の波状文が付されている。杯部は底部と体部のさかいに接合部の段がつく。底部の内面には同心円文、外面には格子目ふう叩き目文が残っている。体部は上外方に外反する。口縁部は端面下に凹線が入り、端部は上内方に低く引きだされている。接合部の段と口端面のあいだには脚部と同様の波状文がめぐる。杯部の調整は横ナデによって丁寧に行なわれている。脚部の内面には巾1~1.5cm位の粘土ひもの痕跡がみとめられる。色調は淡黒褐色を呈するが脚端部ではセピア色のところもある。胎土は砂粒を含み、器表には多少のザラつきがみられる。

II類 (Fig26-41・42) ともに脚部を欠失する。口径は41が24cm、42が28cmをはかるが、成形・整形手法は一致している。形態上は底部と体部の接合部で41は段をなし、42はゆるく屈曲する程度のちがいがみられる。底部にはカキ目が施されている。

中型壺 (Fig27-3) 復原値によると口径26.4cm、体部最大径46cm、器高50.5cmほどをしめす。短い口頸部は上外方に外反し、口端面下に凸帶を付す。端部は上内方に鋭く引きだされている。体部は最大径を上位において徐々にすぼまる。内面には同心円文が残り、外面は平行叩き目文の上にカキ目調整を施している。

大型壺 (Fig28-1・2) 1の復原値は口径54cm、体部最大径86.5cm、器高115cmである。本土器は墓道右側の墳丘裾部に地山を穿って裾えた状態の底部が検出されたものである。頸部は上外方に外開し、中途でカーブを変え大きく外反する。口端面下に一条の凸帶を付し、端部は上内方に鋭く引きだされている。頸部には2本1組の凹線が2条めぐり、口端面下の凹線とのあいだを文様帶として、カキ目の上にヘラによる斜行文線をめぐらしている。体部はナデ肩で最大径を中位よりやや上におき底部にむかって徐々にすぼまる。内面には同心円文が残り、その変化から一応5段構成と考えることができる。同心円文の上にカキ目を施されているところもある。外面は平行叩き目文が残るが底部付近では磨消されている。口頸部と体部の接合法は頸部の剝離した面まで叩き目文が残っていることから、図示したごとく体部の生がわきを俟ってから頸部を重ねたものと思われる。2は復原口径49.5cm、体部最大径79cm、器高92cmをはかる。口頸部は1と同様に上外方に外開し、口端面は折り返し状に肥厚する。頸部には2条の凹線をめぐらし、口端面下とのあいだに4条の櫛状施文具による波状文を付して文様帶としている。体部はやや肩部が外方に張り、最大径を上位におきハート形状をしめす。内面には単位の荒い同心円文が、外面には格子目ふう叩き目文が残る。内面の同心円文は浅いため詳しい観察ができなかった。1・2ともに灰色を呈し、焼成は充分であるが、体下半部から底部にかけて、1は灰褐色、2は淡セピア色をしめしている。器壁は0.8~1.4cmほどでほぼ一定する。

土師質須恵器 (Fig28-1・2) 色調が赤褐色を呈し成形・整形手法は須恵器に一致するが、焼成において窯窓中で環元化された痕跡をとどめない、いわゆる赤焼き須恵器といわれるもの。1・2はセットになるものであろう。1は復原口径13cmで天井部の回転利用のヘラ削りが体部とのさかいまで広い範囲に施される。口縁内面は肥厚し、端部は尖りぎみにおさめる。2は口

径12cm、最大部径14cmをはかる。たちあがりは1cmほどで内傾し端部は丸みにおさめる。受け部はほぼ水平に外方に引きだされている。底部の回転利用のヘラ削りは受け部の下まで施され、杯蓋のそれに一致して広い範囲に行なわれている。胎土は小砂粒を含む。焼成は充分で極めて堅緻である。

土 師 器

高 杯

I類 (Fig28-3・4) 4は杯部を失うが、3と同形態になると思われる。3は杯底部を欠失するが、全体をよくしめしており、口径16.4cm、脚端径14.5cm、器高17.3cmをはかる。杯部は内外面とも丁寧にヘラみがきされ、内面には一部にハケ目が残っていて、ヘラみがきが暗文様をしめすところがある。脚部外面は上下方向のヘラみがきがみられるが杯部に比して荒ざがめだつ。内面は横位のヘラ削りの上に縦位のヘラによるナデづけを施し、暗文風に仕上げる。4には内面のヘラナデはない。

II類 (Fig28-5・6) ともに脚部の破片であり、杯部の形態は知りえない。5は脚柱

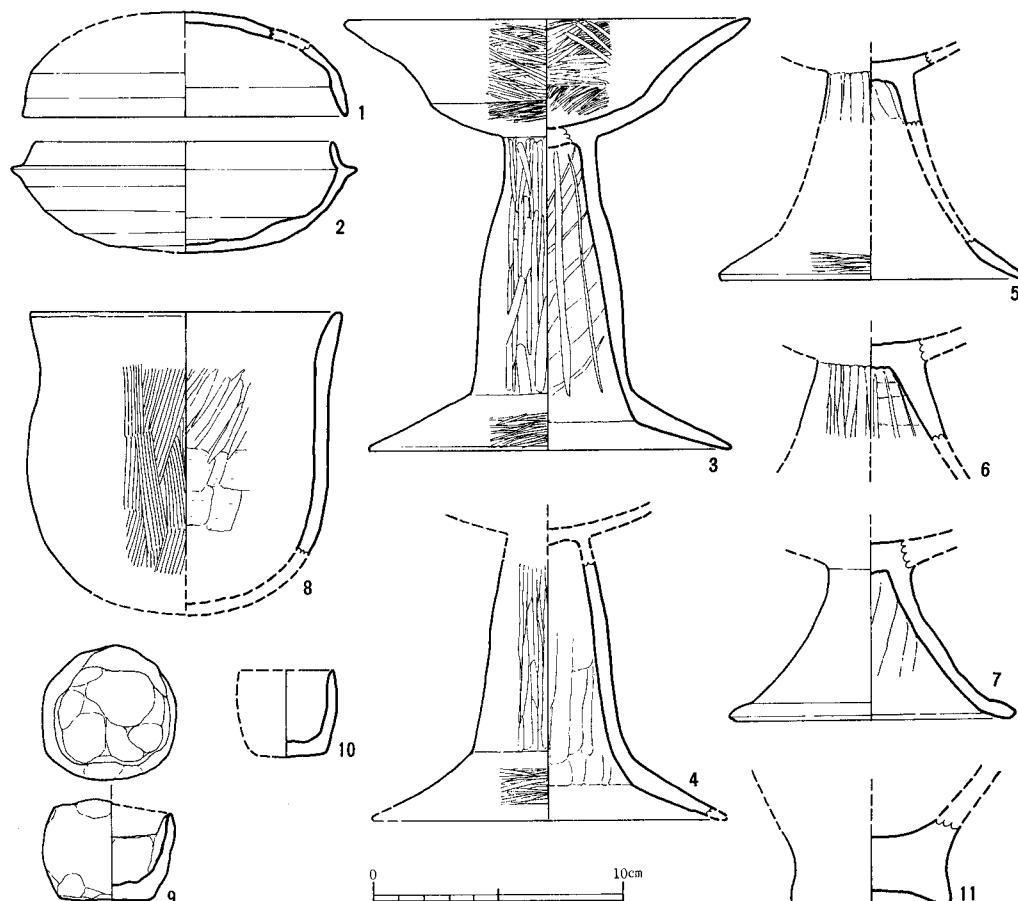


Fig28 相原6号墳出土遺物実測図V (縮尺1/3)

部内面に暗文風のヘラによるナデつけがみられ、外面には荒いが上下方向のヘラみがきを施している。

III類 (Fig28-7) 回転台を使用して成形されたもので、脚柱部にはシボリ痕が残る。脚端部は傾斜を変え外下方に引きだされ弱い段を付しておわる。

甕 (Fig28-8) 西南墳丘裾部から2mほど離れたところから出土した。口径12.5cmをはかり、底部は欠失するが丸底になるものである。器外表は上下方向のハケ目を施すが口縁下部なナデによって摩消している。内面は横位のヘラ削りの上に斜位のヘラナデを加えている。胎土に多量の砂粒を含み、焼成は不充分で脆い。

手づくね (Fig28-9・10) 9は口縁端部を一部欠失する。全体に不整形で指頭による成形痕を残す。底部は掌持ちのヘラ削りを施している。10は半欠のもので、成形後にナデ調整されており指頭痕を残さない。ともに淡茶褐色を呈し、焼成は充分である。

その他の遺物

甕 (Fig28-11) 底部の小破片である。胎土に多くの砂粒（石英粒が多い）を含む。器壁は厚く底部はあげ底状にくぼみがみとめられ、弥生時代中期初頭の特徴を備えている。

(5) 小 結

本墳の調査は林道の位置を決めるために、主に墳丘南側の裾線の確認に重点をおき、墳丘北側半分は調査対象外とした。したがって墳丘全体の容相を明らかにすることはできなかったが、以下得られた所見をまとめておきたい。

まず墳丘の規模と形態は、南北で約9.5m、東西は明確にしがたいが約9.6m前後のほぼ正円を呈する円墳である。その位置は丘陵線上にあって、墳丘築造にあたって南側の高い斜面を削りとり墳丘基底面を整えていることが明らかになった。低い側は未調査のため不明である。石室は墳丘のほぼ中央に傾斜面に直交する墓塙を穿ち、その中から構築されている。壁体の構築法は最下段に大ぶりの腰石を配置し、上部には主に割石を横積みあるいは小口積にして強い持ち送りをもたせている。底面から天井部まで約2.8mあって、天井石は比較的扁平で小さな石材を使用している。

つぎに出土した遺物であるが、玄室内からは杯・杯蓋IV類のセットが出土したのみで、大半は墳丘裾部と墓道の黒色土中からの出土で当初の原位置をしめすものは皆無である。その中でも杯・杯蓋I類・大型甕・器台・有蓋高杯の須恵器と土師器高杯の組みあわせは本墳造営期を決める材料となりうるものである。そして玄室内から出土した杯・杯蓋III類のセットは、追葬などによって使用された期間の最終期をしめすものとすれば、本墳の造営は須恵器編年のIII A期に、使用の最終末はIV期に比定されるであろう。

(柳沢)

第3章 横穴式石室平面図形の検討

1

古墳時代の中ごろに、以降の墓制を大きく変化させる要因となった横穴式石室の伝来は、彼地がいづれにあったにせよ、厳密な企画性とその企画を具体的構造物として構築する技術体系を、石室のスタイルと同時に伴なったものにちがいない。群馬県内の多くの調査例から、横穴式石室が厳密な企画のうえに造営されたものであり、その企画にあたっては一定の尺度を用いていることを明らかにした尾崎喜左雄博士の一連の研究は、上田宏範博士によって明らかにされた前方後円墳の平面企画の研究の成果とともに戦後の日本考古学の大きな前進とされよう。^(註20)

筆者も尾崎博士の研究に導びかれ、一昨年調査した福岡市西区に所在する片江古墳群の横穴式石室の分析を介して、北部九州の石室にも厳密な平面企画と企画にあたっての使用尺度（高麗尺）^(註21)の存在について指摘した。尾崎・上田両博士の問題提起をうけて、ここ数年来各地において、両説の検討が具体的な地域相のなかで行なわれている。しかし横穴式石室の研究分野においては、調査によって得られた石室各部データの単純な数値分解の操作だけによって否定的見解を示されたりするものがあって、いまだに分析方法のうえで若干の混乱をきたしているようと思われる。

さて古墳の企画築造において用いられた尺度は今まで、漢尺・晋尺・宋尺・六朝系尺・南朝系尺・高麗尺・唐尺という7種類が析出されている。各尺度について簡単にふれておこう。

漢尺（1尺=23cm=周尺・晋前尺） 甘粕健氏によって前方後円墳の平面企画の分析から析出され、^(註22)その使用年代は5世紀の前半頃までとされている。

晋尺（1尺=24cm） 森浩一氏が畿内の前方後円墳墳丘の企画から析出されたもので、氏は畿内の古い型式の横穴式石室についても、石室各部の計測値から、初期の横穴式石室が晋尺を使用して企画、築造されたことを論じられているが、具体的な論証は示されていない。また鴨国男氏は関東地方の豊穴住居址のプランの分析から、鬼高峰期に属するものが晋尺で企画されているものがあるとされている。

宋尺（1尺=24.7cm） 愛知県豊田市に所在する大塚古墳の横穴式石室の検討から久永春男氏によって提唱された尺度である。^(註23)いまのところ1基のみの石室各部データの数値分解的操作によっており、疑問点を残す。また下津谷達男氏は東海地方において古式の横穴式石室には宋尺使用のものがあるとされているが具体的には明らかにされていない。^(註24)

六朝系尺（1尺=25cm） 甘粕氏によって前方後円墳の墳丘企画の分析から析出されたもので、5世紀前半以降に漢尺にとってかわり使用された尺度とされている。なお氏は千葉県我孫子古墳群の分析によって、なお7世紀代まで使用されている地域もあるとしている。^(註25)

南朝系尺（1尺=27cm） 秋山日出雄氏が畿内前方後円墳の墳丘地割によって析出されたものである。^(註29) 尺度比定にあたっては藤田元春氏の得られた資料にもとづいておられるが、近年中國研究者によって算定されている数値とは相当な違いがみられる。

高麗尺（1尺=35cm、1尺=36cm） 1尺35cmとする高麗尺は尾崎博士によって、36cmとする高麗尺は上田博士によって析出されている。^(註30) 両博士とも高麗尺の源流を東魏尺とみることは一致しているが、主要な分析対象を尾崎博士は横穴式石室に求められ、また上田博士は前方後円墳の方格地割におかれしており、平行線をたどっている。高麗尺伝来の時期についても上田博士は古墳時代中期あるいはそれ以前とされるのに対し、尾崎博士は6世紀中葉以降という見解をしめされている。

唐尺（1尺=30cm） 群馬県内の横穴式石室の諸例から尾崎博士によって、本尺使用の石室の存在を指摘された。^(註31) 上記6種の尺度について実長をしめすものさしは今のところ発見されていないが、唐尺については正倉院をはじめとした現存するもの、また近年大宰府蔵司西地区から出土した裏面を木簡に利用した奈良時代物尺などによってその実長を知ることが可能である。しかしながら、これらの長さは29.45~30.7cmのあいだをしめしていく必ずしも一定ではない。^(註32) ちなみに中国に現存するものでも一定値をしめすものではない。^(註33)

以上7種が現在までのところ検出されているわけであるが、唐尺伝来以前については甘粕氏は漢尺→六朝系尺→高麗尺、森・鶴氏は晋尺→高麗尺、秋山氏は南朝尺→高麗尺、尾崎博士は晋尺→高麗尺^(註34) という使用尺度の変化をみとめられている。現在までの資料では日本における横穴式石室の最古のものは、福岡市老司古墳の第3号石室が5世紀の前半代として推定されている。^(註35) したがって漢尺が以降の石室の企画使用尺度として用いられることは困難であろう。また晋尺~六朝系尺とされるものでは1尺が24~25cmのあいだにあるとされ、石材によって構築される横穴式石室においては使用尺の誇長や技術的限界から生じる誤差もあり使用単位が小さいことも相俟って、いづれの尺を用いたか比定困難といわざるをえない。また正倉院御物の各唐

		石室全長	玄室長	羨道長	奥壁~第1樋石	奥壁~第2樋石	奥壁~天井部先端		玄室巾	羨道巾
3号墳	左	528	217	311				奥	171	119
	左	526	205	321	412	279	484	前	192	125
	主軸							中央	180	120
4号墳	右	230	108	123				奥	76	38
	左	188	108	74	112	155		前	60	48
	主軸							中央	62	48
6号墳	右	455	215	242				奥	198	96
	左	484	241	243	350	270	418	前	196	103
	主軸							中央	194	100

Tab 2 相原3・4・6号墳石室各部計測値一覧（単位はcm）

尺によっても相当の謬長がみとめられ、これをひとり唐尺のみの現象とすることはできず、謬長の問題も勘合せねばなるまい。したがって本稿では一応24.5cmを1尺として晋後尺名を用いて、高麗尺以前に使用された尺度としておきたい。

横穴式石室の分析にあたっては、石川正之助氏の用いられている方法、すなわち第1の操作として石室各部データから使用尺度を推定し、第2の操作として使用尺度の方眼の上に同一スケールのトレースした実測図を重ねて、方眼と石室各部の適合関係を検討してゆく方法にした
(註36)がっておきたい。

2

3号墳石室

石室各部の計測値はTab 3にしめしたごとくである。これらの数値はおおむね35cm前後を最大公約数とすることことができ、一応使用尺度を高麗尺と推定した。つぎに第2の操作によって得られた結果がFig29である（この方法によれば数値分解では理解できない部分でも、方眼上に一致することもある）。

まず石室全長についてみてみよう。天井部架構の必然的な技術的配慮から玄室および羨道部の最下壁には大ぶりの腰石を使用して安定を保っているが、羨道入口部では前面に貼石状の石組が存在していることは第2章2で触れている。この貼石状の石組は羨道入口部の壁体とかみ合う部分もあるが、左壁では完全に独立した石組として前面に付加されていて、企画される石室平面図形内には含まれず、基本的には石室構築後に羨道入口部の前面に設けられた装飾的な施設と考えられる。したがってこの貼石状石組を除いた石室全長は右壁5、28m、左壁5、26mとなり、羨道入部端の位置はFig 29縦線の15にほぼ一致していることがみとめられる。すなわち当初企画は全長15尺に求めたものとして妥当と考えることができる。

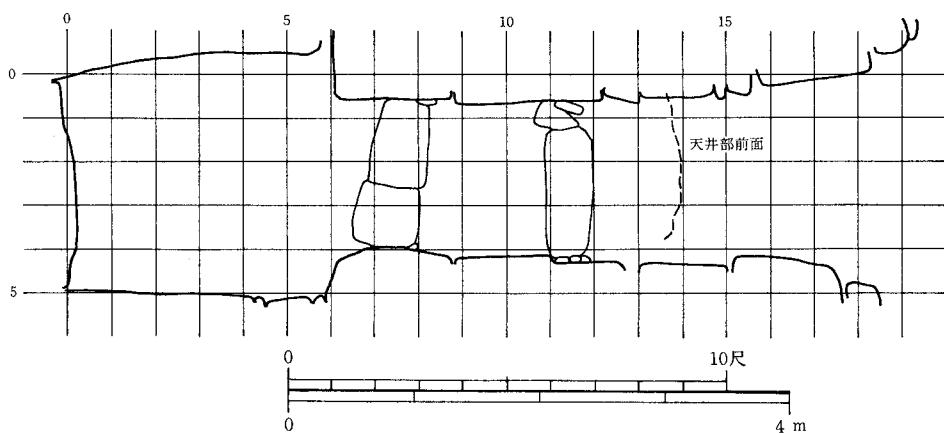


Fig29 相原3号墳石室の方眼による操作結果（縮尺1/60） 方眼1単位は35cm

玄室の奥壁と前壁壁線はほぼ平行してその間6コマ分、6尺にあたる。左壁は横線5に壁線をそろえているが、右壁は大きく外開していて問題を残すことになろう。羨道部はその長さが縦線6から15までのあいだにあって9コマ分、9尺をあてている。また羨道床面に配置している樋石についてもその前面がそれぞれ縦線8と12にほぼ一致しており、当初から企画された位置にあったものと考えられる。入口部巾には高麗尺4尺をあてているが奥巾の120cmは3尺(105cm)の誇長したものと考えるには、他の各部計測値が1尺35cmとする高麗尺によってほぼ完値を得ており、奥巾にのみ誇長を認めることはできない。また仮りに3尺あるいは4尺としたにもかかわらず施工時における技術的限界から生じた誤差とするにも、玄室長6尺は整然と守られており、これもまたあたらないことは明らかであろう(こうした場合の対処方法として誇長とか、施行時の誤差をもってすべてを解釈してしまえば、横穴式石室の分析は方法論上の原則を失い、数値のゴロ合わせに惰してしまう)。尾崎博士・石川氏の研究によって、羨道奥巾は玄室前巾とともに最も計測値の安定する位置とされており、片江古墳群の各石室でも完尺をとっている。数少ない資料とはいえ福岡市内の調査例でも例外はほとんどない。とすれば羨道奥巾120cmと、前に問題点として残しておいた玄室前巾192cmは、基準尺度があったのか、それともまさしく施工時の操作によって生じた誤差なのであろうか。

再び実測図にもどって、2者の計測値を $\sqrt{2}$ 尺、すなわち裏尺の使用という観点からみてみよう。まず玄室前巾は羨道入口巾4尺の裏尺、 $4\sqrt{2}$ 尺(196cm)にきわめて接近した数値であることが知られる。そして羨道奥巾は玄室奥巾5尺の裏尺、 $5\sqrt{2}$ 尺(240cm)の1/2に一致する。したがって本石室平面図形の企画にあたっては尺の表目と裏目を使用して、玄室奥巾から羨道奥巾を設定し、羨道入口巾から玄室前巾を割りだす方法がとられたと推定される。一見複雑に感じられるが、石室平面構成からすれば各部の配置については一定の相関性のなかで行なわれていたことの証左となるものであろう。以上の操作によって本石室の当初平面図形の企画をつぎのごとく復原することができる。(使用単位は高麗尺)

石室全長	15尺	玄室奥巾	5尺
玄室長	6尺	玄室前巾	$4\sqrt{2}$ 尺
羨道長	9尺	羨道奥巾	$\frac{5\sqrt{2}}{2}$ 尺
奥壁～第1樋石	12尺	入口部巾	4尺
奥壁～第2樋石	8尺	袖巾 右	1尺
奥壁～天井部先端	14尺	袖巾 左	1尺

6号墳石室

玄室は周壁最下段に大ぶりの花崗岩の平坦面をそろえて腰石を使用している。2段目以上は小ぶりの転石や割石を使って、小口積あるいは横積みによって強い持ち送りを保つつつ、見かけの高さ2.6m以上に構築し、その上に2枚の天井石を架構している。壁体断面形がドーム状

をなすこと、また小口積、横積みなどの使用法などから古いタイプの石室とされているものである。この種の横穴式石室について装飾古墳や複室墳との関係のなかで触れられたことはあるが、平面图形の観点から使用尺度と企画性について論じられたものは少ない。森氏は畿内の初期の横穴式石室においては晋尺を使用した可能性を指摘されたが、いままでのところ具体的に検証をしめされていない。また尾崎博士は高麗尺以前に晋尺が使用されていたが、横穴式石室は高麗尺とともに伝來したものとされて、晋尺を使用尺度とした横穴式石室の存在を否定されている。^(註38) 以下、今回調査した相原6号墳の石室の平面图形について、平面構成の検討と使用尺度を推定し、同じく福岡市内に所在する近似したプランをもつ石室を比較資料として、高麗尺伝来以前の尺度を使用して企画された横穴式石室の存在について検討してゆきたい。^(註39)

まず、6号墳石室は、玄室周壁および羨道側壁の壁線に凹凸が少なく、きわめて整美なプランをしめし、玄室左右の側壁と奥壁との接合でも隅角を直角にとっていることがみとめられる。袖は素形で、冠石・櫛石などの設備をもたないものであり、その配置において左・右壁では袖巾と奥壁からの長さに大きなズレがみとめられる。羨道は奥部から入口部にむかってやや開きぎみの壁線をしめしており、羨道入口部の前面には、右壁にのみ貼石状の石組みが付加されている。左壁は入口部腰石の上に垂直にたちあがっている。したがって本横穴式石室は矩形の玄室に、ほぼ玄室長と同じ長さの羨道を付した素形の両袖型石室であるといえよう。

石室各部の計測値の最大公約数を求めるとおおむね24~25cmが求められ、この単位による換尺によって、ほとんどが完尺をしめすことが知られた。それをしめすとつぎのようになる（ちなみに高麗尺による換尺値を併記する）。

	(24~25cmを 1単位とする尺)		高麗尺 (35cm)		(24~25cmを 1単位とする尺)		高麗尺 (35cm)	
石室全長	右	19尺	13尺	玄室奥巾	8尺	5.6尺(4 $\sqrt{2}$ 尺)		
	左	20尺	≈14尺	前巾	8尺	5.6尺(4 $\sqrt{2}$ 尺)		
玄室長	右	9尺	6尺	羨道奥巾	4尺	2.7尺($\frac{5\sqrt{2}}{2}$ 尺)		
	左	10尺	7尺	入口巾	≈4尺	3尺		

* 小端数は切り捨てた。

以上の操作によって得られた換尺値は、24~25cmを1単位とした尺度ではかなり安定した数値をしめし、各部に相関性をうかがうことができる。しかし高麗尺による換尺では長さ・巾ともにバラツキがあって相関的な数値の配列はみられないのである。尾崎博士は群馬県内の多くの諸例から、巾は縮み、長さにおいては延びる傾向があるとされており、仮りに玄室巾を本来6尺とした場合、羨道奥巾にも同様の傾向をみとめない限り3尺とはならない。したがって換尺した数値の相関性が石室平面構成のうえで一つの大きな要素であると仮定するならば、高麗尺よりも24~25cmの尺度をより妥当とするべあろう。さて24~25cmを1尺とする尺度は具体的には前述したように晋尺・宋尺・六朝系尺の3種があげられている。これらを中国側の資料と

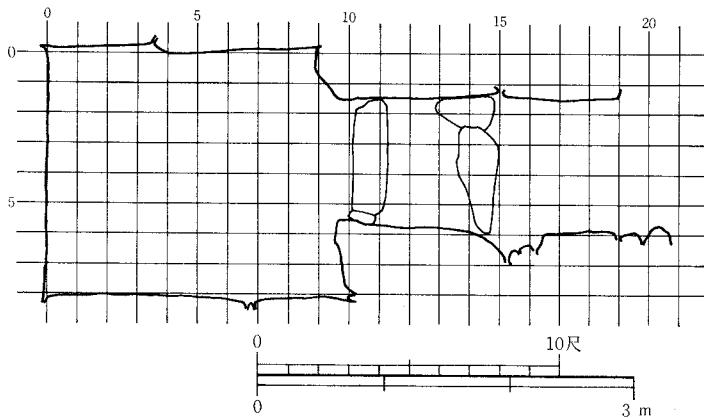


Fig 30 相原 6号墳石室の方眼による操作結果（縮尺 1/60） 方眼 1 単位は24cm

対比してみると、魏尺（24.1～24.2cm）・晋後尺（24.5cm）・劉造尺（24.4cm）・宋尺（24.5～24.7cm）・梁尺（23.6～25.1cm）などにあたる数値をもつものである。日本の場合、上記3種の尺はいづれも前方後円墳の墳丘企画から導きだされたものであって、やはり使用単位の小さいこと、および石を素材としての構築物であることからの施工上の誤差などによって、使用尺度に1cm未満の小さな変化を求めるることは横穴式石室の平面企画では不可能といわねばならない。したがってここでは一応24～24.5cmを1単位として考えておき、その名称として晋後尺と仮称しておきたい。

さて晋後尺の方眼の上にトレースした石室平面図をかさねて方眼目との適合関係を検討した結果が Fig 30である。玄室側壁線は横線0と8にはほとんど一致し、奥壁線も縦線0に一致している。また袖部にみられたズレは右壁側が一コマ分玄室に入りこんでいるわけである。羨道入口部は右壁が縦線の19に、左壁がほぼ20の線に一致している。また羨道長は左・右壁とも10コマ分の長さをとっていて、玄室の左壁長と一致している。したがって本石室は、当初の石室長20尺、玄室長10尺という企画にたちながらも、右壁側にみられるように、何らかの操作を経て玄室長を1尺減じたのではなかろうか。羨道巾は玄室巾の1/2の4尺をあてているが、袖巾を2尺づつとらずに左右異なった巾をとっているため羨道の位置は玄室の中央よりやや右壁よりに接合している。羨道床面には樋石を2ヶ所に配置しており、第1樋石の前面は縦線15に一致する。しかし第2樋石は縦線11より前面に突出している。また天井部先端面も縦線17と18のあいだに位置している。多くの例によって知られるようにこの両者の位置は完尺値をとるものが多く、当初設計企画のなかに含まれる配置と考えられる。本墳の場合、施工時における誤差として解釈できないわけでもないが、晋後尺を使用尺として企画された横穴式石室の資料も未だ収集段階にあるので、今後の問題点として残しておきたい。以上述べたところから本石室の平面企画を復原するとつぎのようになる（使用尺度は晋後尺）。

石室全長	20尺	玄室奥巾	8尺
玄室長	10尺	前巾	8尺
羨道長	10尺	羨道奥巾	4尺
奥壁～第1樋石	15尺	入口巾	4尺
奥壁～第2樋石 (11尺)		袖巾	{ 右 (1.5尺) 左 (2.5尺)
奥壁～天井部先端 (18尺)			

* () 内は推定。なお袖巾のとり方には特殊な比定配分があるようである。

参考資料I 今宿1号墳 (福岡市西区今宿字谷上)^(註41)

今回調査した相原古墳群から 0.7kmほど北西に存在したものである。昭和42年に調査された今宿古墳群（その後古墳分布調査によって周辺の古墳群が明らかとなつたため字名をとって谷上古墳群としている）中の一基で、尾根の突端に立地していた。南北径23m、東西径30m、高7mの墳丘に、南西に開口する素形の両袖型横穴式石室を内部主体としていた。石室内はすでに盗掘をうけていたが、須恵器・土師器・武器などの遺物を出土している。出土した須恵器には器台も含まれており、相原6号墳の杯I類と同時期か、若干先行する造営が考えられる。

参考資料II 高崎2号墳 (福岡市西区拾六町字高崎)^(註42)

相原古墳群の北東、長垂丘陵をあいだに狭み直線距離にして約 2.5kmほど離れたところに位置し昭和44年に調査された。丘陵の傾斜面上に築造されたもので、調査結果1辺15mをはかる方墳とされているが報告文ではその詳細は明らかではない。玄室内はすでに盗掘をうけていたが幸いにも袖部から羨道にかけては盗掘から免がれており、140個体以上の須恵器のほか、鐘形の鉄地金銅張り杏葉を含む馬具類、単鳳の透しのある環頭など多数出土している。造営時期は出土した須恵器によって相原6号墳と同時平行か、やや下降する可能性が強い。

叙上の2基の石室を1単位24cmの方眼によって各部の適合関係を検討し、操作した結果はFig 31にしめすごとくである。

高崎2号墳は玄室の左右側壁の中央部が内側に張りだして撥形のプランをしめしているが、玄室の各隅角は縦線0・14と横線0・10の交点にはば一致しており、巾10尺・長14尺をあてた矩形の企画に何らかの操作を加えてかかる形状を求めたものと考えられる。袖巾は右壁に2尺・左壁に3尺をあて、羨道奥巾5尺を求めている。羨道壁線は右壁は横線2の、左壁は7の線上にはば一致して直線状に入口部まで延びている。Fig 31では石室入口端は右壁が縦線の33に、左壁が34にあたっているが、相原6号墳と同じように腰石を据えた羨道端の前面には貼石状の石組みがあつて腰石の先端面は左右側壁とも縦線32に一致している。

今宿1号墳は、図示していないが玄室と羨道部の側壁の積みかたに違いがあり、玄室は相原6号・高崎2号墳と同じく最下段に腰石を配置するが、羨道部は腰石を据えず直接に横積みある

横穴式石室平面図形の検討

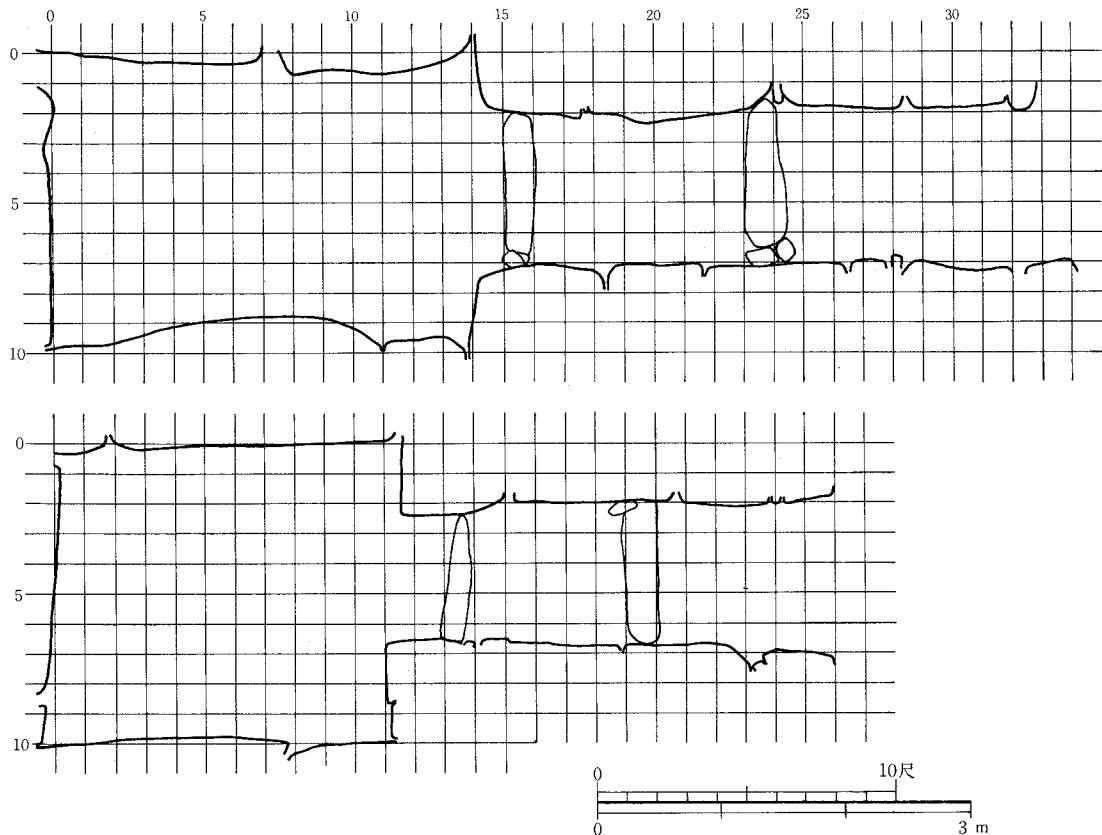


Fig31 (上) 高崎2号墳 (下) 今宿1号墳石室の方眼による操作結果 (縮尺1/60) 方眼1単位は24cm

いは小口積で壁体を構築している。羨道入口部は先端の根石からほぼ垂直にたちあがって貼石状の石組みは設けていない。したがって Fig 31の下図のように、羨道入口部先端は縦線26に一致し、石室全長は26尺をあてていることがわかる。玄室部は側壁と奥壁・袖との接合する隅角が直角になっておらず歪んでいる。しかしその歪みも奥壁と前壁が平行すること、各側壁長が11コマ分に正確に周縁されることから施工時の誤差とするよりも意図された企画内での操作と考えてよいであろう。玄室奥巾・前巾ともに10尺とすることに問題はない。羨道部では奥巾に4尺、入口巾に5尺をあてているが、左右袖巾のとりかたがシンメトリーになっておらず玄室中央よりもやや右壁側に偏して接合している。玄室巾を左右各1尺づつ減じて相原6号墳石室プランと重ねてみると、袖巾のとりかたと羨道側壁線はまさに一致することが知られる。羨道長は左壁で縦線11から26のあいだに含まれる。右壁では玄室奥壁の位置のズレによって玄室長が張りだしているために羨道長を若干減じているようである。羨道床面の施設をみてみると今宿1号・高崎2号墳とも2ヶ所の樋石の配置がみとめられ、その位置は方眼による操作によつて縦線によく一致する。今宿1号墳では第1樋石が20、第2樋石が14の縦線にその前面が一致しており、高崎2号墳では第1樋石は前面は24と25のあいだであるが第2樋石は16の縦線に一

致している。天井部については両者とも袖石上に架構したものしか残存していなかったので、その先端の位置については明らかにしがたい。以上のような検討によって石室各部データはつきのように換尺値を求めることができる。（使用尺度は晋後尺）

高崎2号墳 今宿1号墳			高崎2号墳 今宿1号墳		
石室全長	32尺	26尺	玄室奥巾	10尺	10尺
玄室長	14尺	11尺	玄室前巾	10尺	10尺
羨道長	18尺	15尺	羨道奥巾	5尺	4尺
奥壁～第1樋石	(25尺)	20尺	羨道前巾	5尺	5尺
奥壁～第2樋石	16尺	14尺	袖巾 左	2尺 3尺	(2.5尺) (3.5尺)

* () 内は推定

これらのほとんどが完尺をしめしてほぼ当初の平面企画に近い復原値と考えられ、2基間における数値は一定の相関性をみとめることができる。さて前に復原した相原6号墳の平面企画と比較してみるとつぎのようになる。（使用尺度は晋後尺）

高崎1号墳	今宿1号墳	相原6号墳
石室全長	32尺	26尺
玄室長	14尺	11尺
羨道長	18尺	15尺
玄室巾	10尺	10尺
羨道巾 奥 入口	5尺 5尺	4尺 5尺
奥壁～第1樋石	(25尺)	20尺
奥壁～第2樋石	16尺	14尺

* () 内は推定

これらの数値にしめされる石室平面図形の構成から以上3基は ①石室全長は相原6号墳の20尺を最小として6尺単位に規模を増している ②玄室長あるいは玄室巾に10尺の単位を使用していること、そして高崎2号墳は側壁が内側に張りだしてはいるが各隅角部は 10×14 コマ分に周縁されることから、いづれも奥巾と前巾に同一の長さをあてている。また高崎2号墳の玄室長14尺は巾10尺の $\sqrt{2}$ 、すなわち裏尺をあてた可能性も強い。今宿1号墳の玄室長は石室全長の配分に際して羨道長を15尺にしたために11尺という数値がとられた長さと考えられる ③羨道長は相原6号墳を最小として、石室全長にしめる羨道の比は今宿1号→高崎2号墳としだいに大きくなる ④羨道巾には4尺と5尺があてられており相原6号墳と今宿1号墳では奥巾の設定に同一の方法を使っている ⑤羨道床面に配置されている樋石も羨道が長くなるにつれ

て、その間隔を広げているが、ほぼその位置に完尺値が求められ、たとえば今宿1号墳を例にとると、奥壁から第1棺石までの長さは相原6号墳の石室全長に一致し、第2棺石までの長さは高崎2号墳の玄室全長に一致する。また相原6号墳の第2棺石までの長さは、ほぼ今宿1号墳の玄室長に一致する、などによって同一の尺度を使用して企画された石室であるとみとめてよいと思われる。そしてその企画にあたっては、無原則的な数値の配列ではなく一定の相関的関係のなかで求められていると考えられる。

横穴式石室はあくまでも死者埋葬のための空間構築が目的であり、壁体の構築も平面図形と同様に石室の大きな要素であろう。よって壁体の構築法からみてみると叙上3基には ①玄室同壁には最下段には大きな腰石を据え、その上には比較的に割石や削り石などの加工を施した石材を多く使って横積みあるいは小口積みに積み上げる ②羨道側壁も玄室と同じ方法をとるが、今宿1号墳は腰石を据えずに根石から横積み手法をとる ③袖部はいづれも素形で、5～6段の横積みで構築されている。高崎2号墳の場合は縦位に腰石を据え、横積み手法をとらないなどの共通点と相違するところがみとめられる。

以上石室平面図形と壁体構築からみて、叙上の3基は、北部九州における高麗尺を使用尺度として企画された石室とは明確に異なった手法をみとめることができ、これをもって晋後尺を使用尺度とした企画による横穴式石室が先行したことの証左としたい。

3

本調査によって得られた相原3号墳と6号墳の石室の検討の結果は上述のごとくに企画の復原が可能になった。一昨年の片江古墳群以来すすめてきた横穴式石室平面図形の検討によって福岡市周辺においては、高麗尺伝来以前には別の尺度の企画による石室があることが知られ、これを1尺24.5cm（本稿での方眼使用では24cmを使用した）とする晋後尺にその源流を求めるのがもっとも妥当であることを知った。そして晋後尺から高麗尺への使用尺度の変化は6世紀中葉を遡らない時期、おおむね後半代に行なわれたと推定される。これは高麗尺を使用尺度とした石室の造営時期が須恵器編年を参考にすることによってIII B期以降に限定され、管見によればII期あるいはIII A期の須恵器も出土した例は今のところはいまだその例をしらない。^(註43)

したがって尾崎博士によって明らかにされたように、高麗尺の伝来時期を6世紀中葉以降後半にかけてとされた所論にしたがっておきたい。しかし北部九州には横穴式石室の伝来は5世紀前半代まで遡ることが明らかにされており、横穴式石室の伝来を高麗尺と同時とされる所論にはしたがいがない。最古の横穴式石室ではないかと推定されている老司古墳については本報告未刊のための詳細を知ることはできなかったが、丸隈山古墳石室は、実測図の検討によって晋後尺の使用が確実である。しかし高麗尺の伝来は造寺技術を含めて新たな技術体系をもたらしたことは疑う余地がない。全国的に巨石・巨室墳がつくり始められたのは、まさしく高麗尺の伝来以降に求められるのである。

結語にかえて

今回の調査は林道開設工事にともなう事前調査として行なわれたものである。そのため調査範囲は相原古墳群の一部を横断する林道予定線にとどめたのであり、古墳群全体の形成過程や性格を解明するには至っていない。一応ここでは調査のまとめとして、2、3の問題点をとりあげ結語にかえたい。

まず各古墳の造営時期と追葬などによる使用期間についてみておこう。調査した3基のうちで最も古い須恵器を出土したのは6号墳である。杯一杯蓋I類と器台・大型甕の組み合わせはIII A期の特徴をよく備えている。ついでIII B期のものが認められ、玄室内より出土した杯一杯蓋のセットが最も新しい特徴をしめしIV期に比定できる。玄室内はすでに盜掘を受け被葬者の数を推定する資料は何一つ得られなかった。一応IV期を最後の追葬時の副葬品とすれば、その造営は大略6世紀の中葉～後半代に求められ、追葬などによる使用は7世紀前半をもって終了したことが推定される。3号墳の場合は、杯一杯蓋I類と大型甕の組み合わせがIII B期に比定でき、また杯一杯蓋IV類のセットは高台の特徴と蓋内面のかえりなどからVI期の特徴をよく備えている。石室内は6号墳同様に盜掘や以降の乱掘によって被葬者数やその位置は全く不明としなければならないが、須恵器のしめすところからすれば、6号墳よりやや遅れて6世紀後半～終末頃に造営され7世紀後半前後までの使用が推定される。4号墳は石室の規模と構造からみて小児の一回完結的な埋葬で後の追葬を可能とするものではない。石室内からは奥壁側から出土した刀子と側壁に沿って出土した小型短頸壺があり、副葬品の内容としては乏しい。この2点の遺物のみでは如何ともしがたいが、墳丘盛土中から出土した須恵器杯を勘案すれば3号墳と近接した造営年代が推定できる。

出土した遺物のなかで注意されねばならないものとしては3号墳の鉄鋸と堀状の土師器があげられよう。これらは出土状況からみて明らかに供献品であり、被葬者の性格が一定程度関与していることは疑いえない。福岡市域内では後期古墳の調査によって鉄鋸を供献品として用いていることが極めて多いことが知られている。三島格氏の研究によれば今宿地区の製鉄関係遺跡は福岡市内でも密度の濃い地域であって、あらためて鉄生産と古墳被葬者の強い関係をうかがうことができるわけである。堀状の土師器は類例がないため断言できないが、その可能性は極めて強い。また同じ3号墳の墳丘東南裾の墳丘盛土上に、穴を掘って底部を埋め込んだ甕の配置があったことも興味深い。同じように6号墳でも墳丘裾部に据えられた甕の底部だけが残存していた。これらの甕のなかには復原したところ口径54cm、器高115cmという超大型のものになったもの（Fig 27-1）もあって、後期古墳に通有な墳丘上あるいは裾部からの須恵器大甕の出土について今一度注意をはらわねばならないであろう。

本 文 註

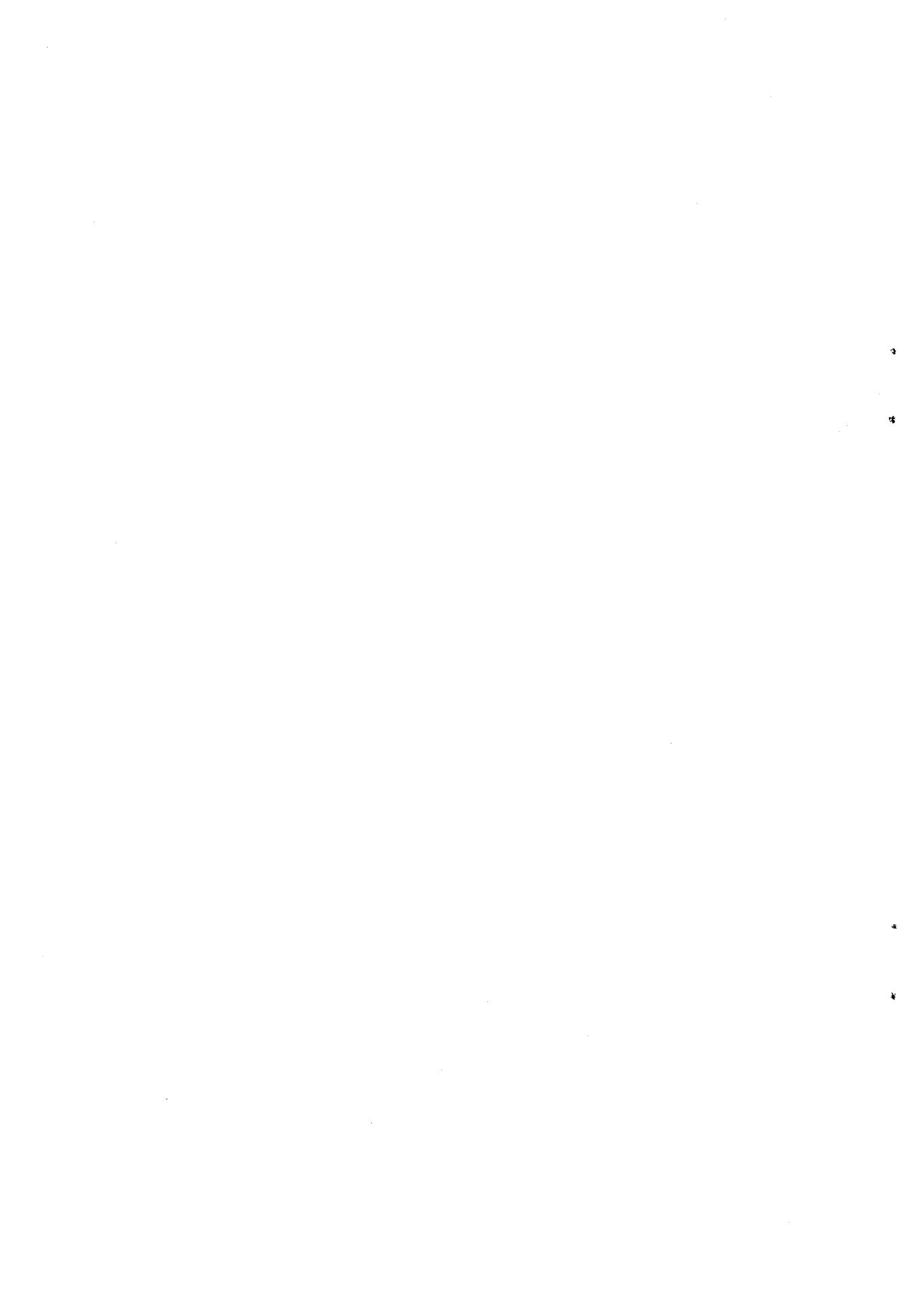
- P 2 註1 経済企画庁総合開発局編「土地分類図（福岡県）」1970、松本達郎ほか「日本地方地質誌・九州地方」1952、蒲田英夫「福岡市附近の平坦面の地史学的研究」『九州大学教養部地学研究報告』8. 1962 などが詳しい。
- P 2 註2 『糸島郡志』前編 P 9 1925
- P 2 註3 下條信行「貴重な志摩半島の自然と歴史」『ふるさとの自然と歴史』31号 1973. 12
- P 4 註4 副島邦弘「飯氏馬場遺跡」・柳田康雄ほか「若八幡宮古墳」『今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告第2集』1971
- P 4 註5 註4文献
- P 4 註6 下條信行『今山遺跡(1)』福岡市埋蔵文化財調査報告書 第22集 1971
- P 4 註7 下條信行・高倉洋彰ほか『宮の前遺跡』1971
- P 4 註8 宮小路賀宏『今宿古墳群』福岡県文化財調査報告書 第38集 1968
- P 4 註9 註9文献
- P 6 註10 九州考古学会編『北九州古文化図鑑』第1集 1950
- P 6 註11 註4文献・福岡市教育委員会編『福岡市埋蔵文化財遺跡地名表—総集編一』福岡市埋蔵文化財調査報告書第12集 1971
- P 7 註12 主軸全長、横穴式石室の数値は下條信行氏の教示による。
- P 7 註13 小林行雄「中期古墳時代文化とその伝播」『史林』第33巻3・4号 1950、小田富士雄・三島格ほか『丸隈山古墳』福岡市埋蔵文化財調査報告書第10集 1970
- P 7 註14 森貞次郎・岡崎敬ほか『老司古墳—調査概報一』福岡市埋蔵文化財調査報告書第5集 1969
- P 7 註15 福岡市教育委員会編『福岡市とその周辺の文化財』1969
- P 14 註16 柳田純孝・塩屋勝利ほか『和白遺跡群』福岡市埋蔵文化財調査報告第18集 1971
- P 14 註17 横穴式石室各部の名称は尾崎喜左雄博士の所論にしたがった。尾崎『横穴式古墳の研究』 1965
- P 14 註18 本墳の排水溝は床面の傾斜からすれば充分その機能をはたしたと考えられる。排水溝については次の文献が詳しい。猪熊兼勝「横穴式石室の排水溝——岩橋千塚の場合——」『岩橋千塚』 1967
- P 14 註19 須恵器の器形・成形・整形手法の名称は田辺昭三氏の所論にしたがった『陶邑古窯址群 I』平安学園 1966
- P 42 註20 つぎの文献が詳しい。白石太一郎「日本における横穴式の系譜—横穴式石室の受

本文 誌

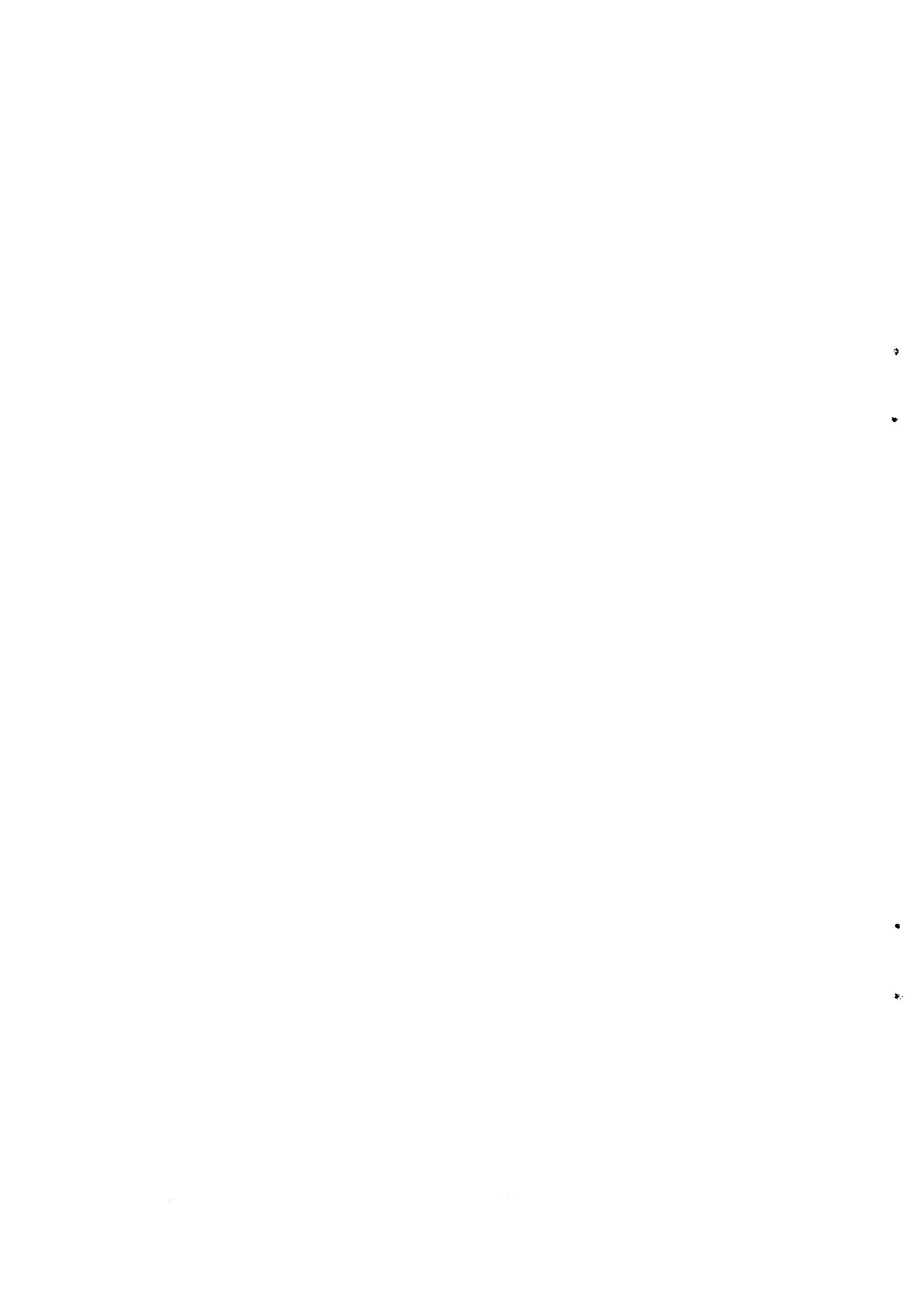
- 容に関する一考察ー」『先史学研究』5 1965
- P 42 註21 文献17のほか「横穴式石室平面図形の企画」『考古学雑誌』48卷4号 1962
『前橋市史』等1巻 1971 などが詳しい。
- P 42 註22 上田宏範「前方後円墳築造の計画性」『古代学研究』2号 1950、「前方後円墳
における築造企画の展開」『近畿古文化論叢』1962、「土木技術」『日本の考古
学』VI 1966、『前方後円墳』1969 などが詳しい。
- P 42 註23 拙稿 「横穴式石室の平面構成について」『片江古墳群』福岡市埋蔵文化財調査
報告書第24集 1973
- P 42 註24 甘粕健「前方後円墳の研究ーその形態と尺度」『東洋文化研究所紀要』第37冊
1967. 3
- P 42 註25 森浩一『古墳の発掘』1965
- P 42 註26 久永春男ほか『豊田大塚』豊田市教育委員会 1966
- P 42 註27 下津谷達男「中部」『新版考古学講座ー有史時代』1970
- P 42 註28 甘粕健「墳丘の形態」『我孫子古墳群』1969
- P 43 註29 秋山日出雄「前方後円墳の企画性と条理制地割」『末永先生古稀記念古代学論
叢』1967
- P 43 註30 尾崎喜左雄 文献17 第3章第7節3
上田宏範「土木技術」『日本の考古学』VIと『前方後円墳』に詳述している。
- P 43 註31 尾崎喜左雄 文献17 第3章第7節4
- P 43 註32 亀井明徳ほか『大宰府史跡ー昭和45年度発掘調査の概要ー』福岡県文化財調査報
告書第47集 1971
- P 43 註33 矩斎「古尺考」文物参考資料第3期 1957 羅福頤「伝世歴代古尺図録」
楊寛「中国古尺概説」序説(蔽田嘉一郎編訳註『中国古尺集説』1969 所収)
そのうち「古尺考」を主に参考にした。
- P 43 註34 尾崎喜左雄「尺度「尋」による群馬県初期古墳への追求」『石田川』1968
- P 43 註35 註34文献
- P 44 註36 石川正之助「野殿天王塚古墳の石室平面構成について」『共愛学園論集』第1集
1967 「総社二子山古墳前方部石室の平面構成について」『考古学雑誌』第54巻
4号 1968
- P 45 註37 註17文献 註36文献
- P 46 註38 小林行雄編『装飾古墳』1964、小田富士雄「横穴式石室における複室構造の形成」
『史苑』100号 1968. 3
- P 46 註39 註34文献

- P 47 註40 註33文献
- P 48 註41 註8文献
- P 48 註42 浜田信也「高崎2号墳」『今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告 第1集』1970
- P 51 註43 小田富士雄ほか「塚ノ谷窯跡群」1969、「中尾谷窯跡群」1970、「管の谷窯跡群」1971、「立山山窯跡群」1972
- P 51 註44 註17文献 第3章第7節3
- P 52 註45 註43文献を参考にし、その編年にしたがった。
- P 52 註46 三島格「福岡平野の製鉄遺跡」『和白遺跡群』福岡市埋蔵文化財調査報告書第18集 1971、地名表によれば11ヶ所の鉄錆散布地が知られている。
- P 52 註47 かかる出土状況の意味については尾崎博士の論攷がある「古墳からみた宗教觀」『上代文化』第35輯 1965

(補註) 本書校正中に『鹿部山遺跡』(鹿部山遺跡調査団編)が刊行された。そのなかの唐ヶ坪古墳群・浦口古墳群中の多くに竪穴系横口式石室がみとめられ、それらはいずれもIII A期以前に比定される須恵器を出土している。本書第3章でみたようにIII A類以前に造営された横穴式石室は晋後尺を企画尺度としているが、上記古墳石室も報告書掲載の実測図によっていずれも平面企画にあたって晋後尺を用いていることが知られた。竪穴系横口式石室の平面企画に晋後尺が用いていることは、たとえば丸隈山古墳石室など初期石室と同様である。なお初期横穴式石室の平面图形と企画使用尺度については機をえて詳述したい。



圖版





相原古墳群遠景(北西から)



相原古墳群遠景(北から)



相原古墳群近景・手前より3号、6号墳(東から)



相原古墳群3・4・6号墳 発掘調査終了時全景(南から)



3号墳 発掘前全景(東から)



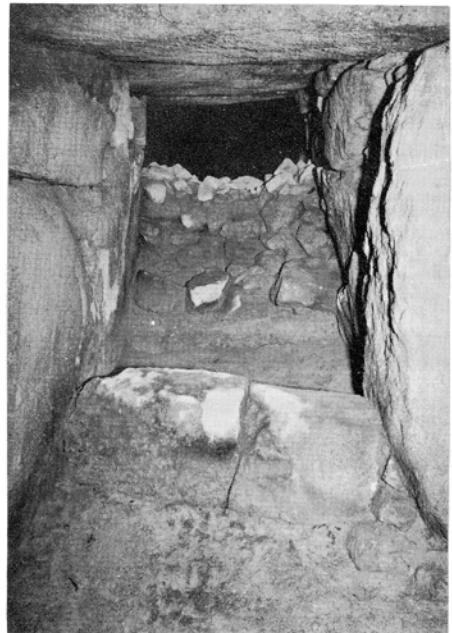
3号墳 発掘後全景(東南から)



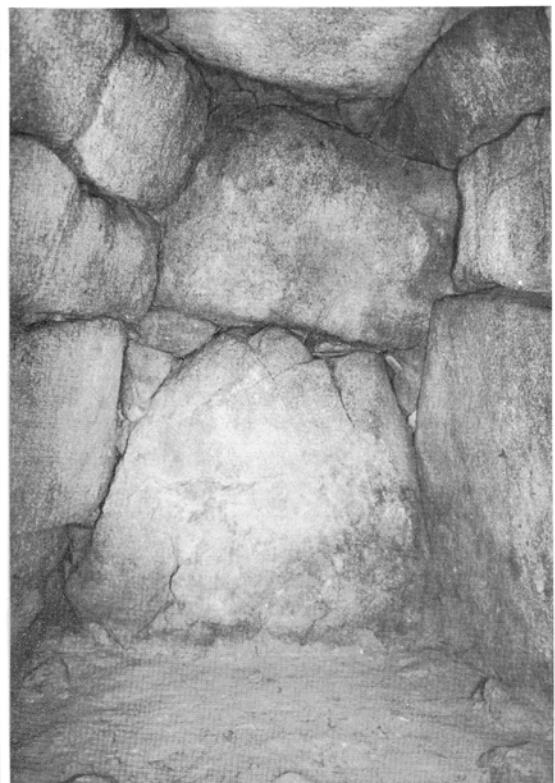
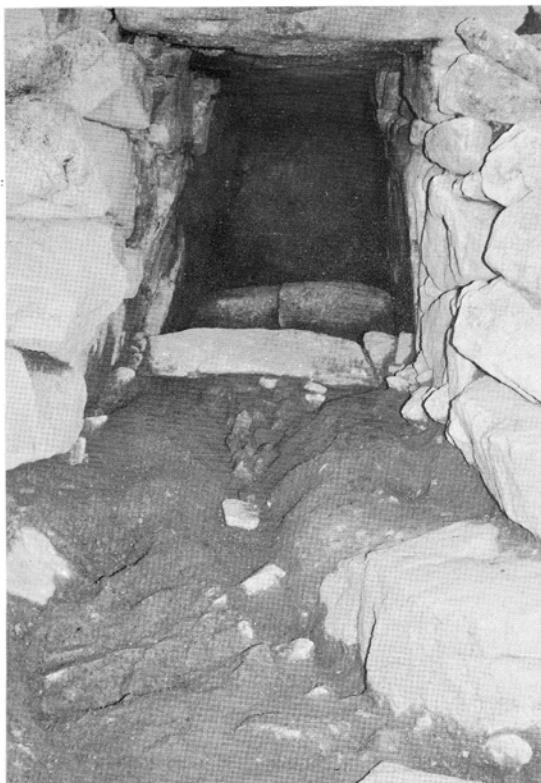
3号墳 羨道入口部と墓道(東南から)

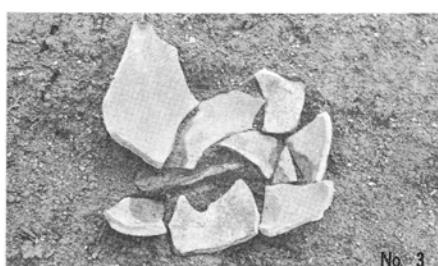
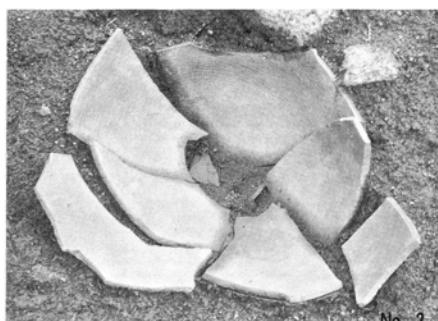
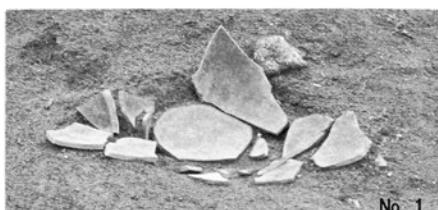
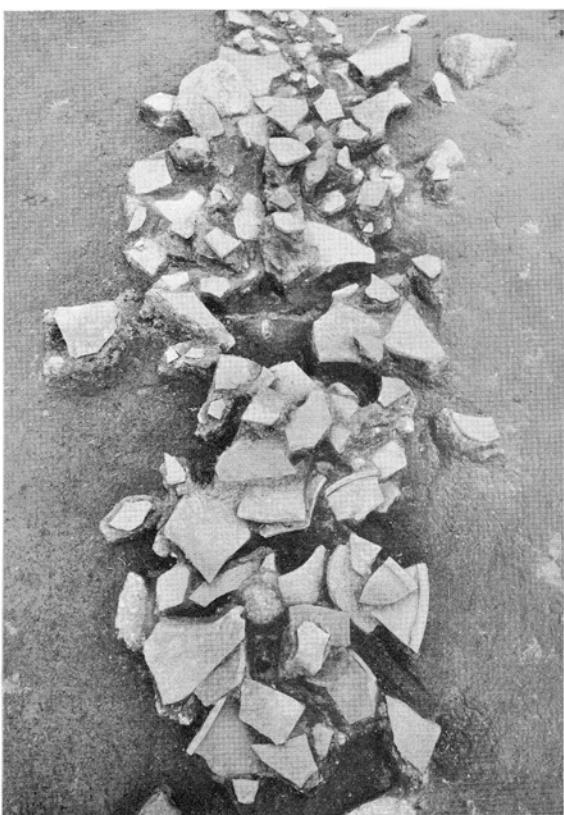
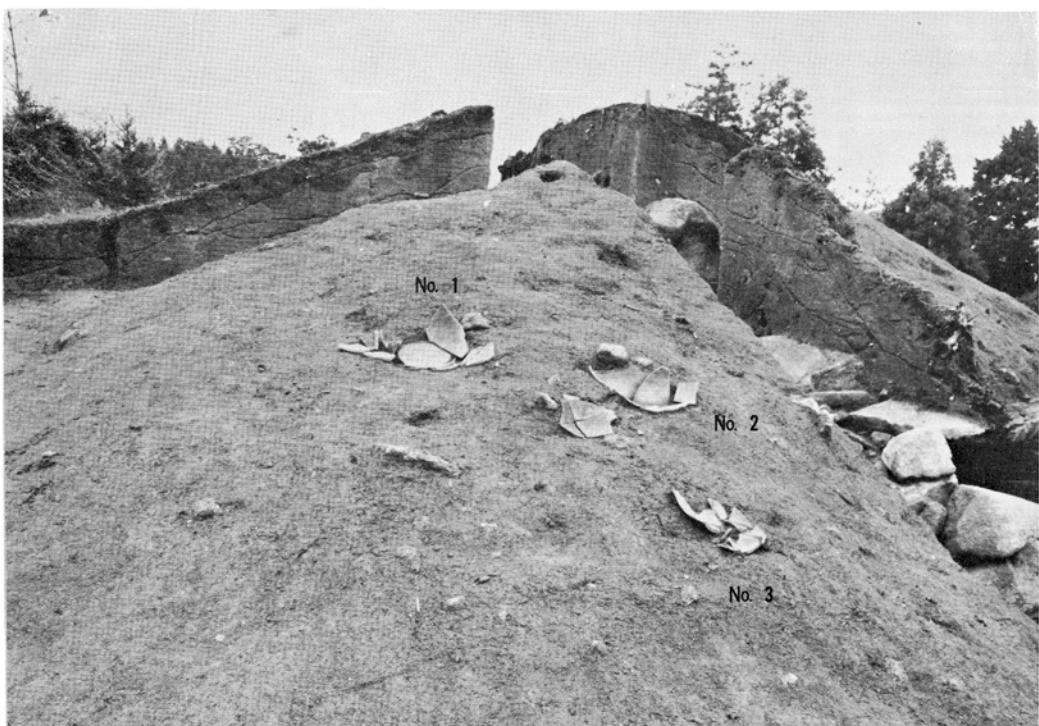


3号墳 墓丘と溝(北から)



閉塞部(墓道から) | 閉塞部(玄室から)
排水溝(墓道から) | 玄室奥壁





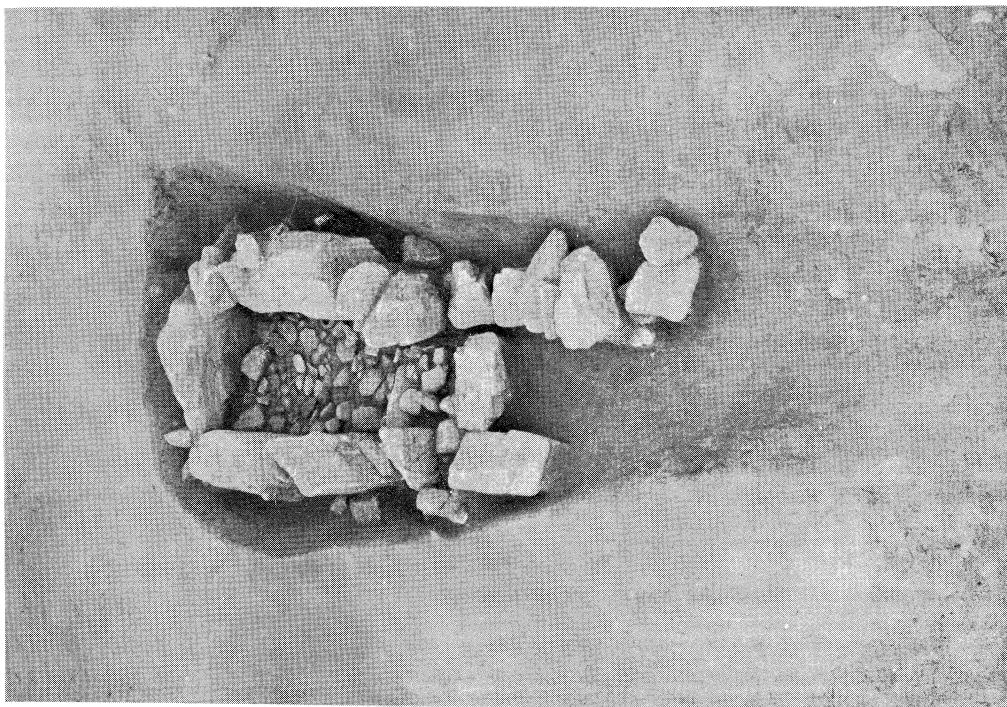
墳丘西南裾部甕
墓道底面甕 | 同上甕拡大



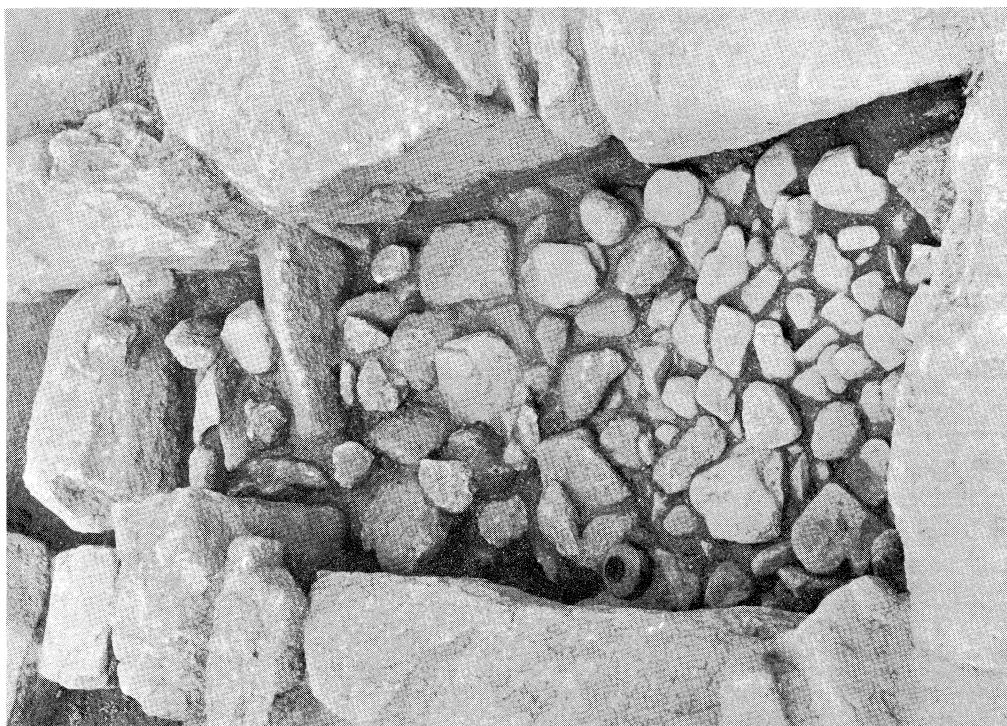
4号墳 発掘前全景(南から)



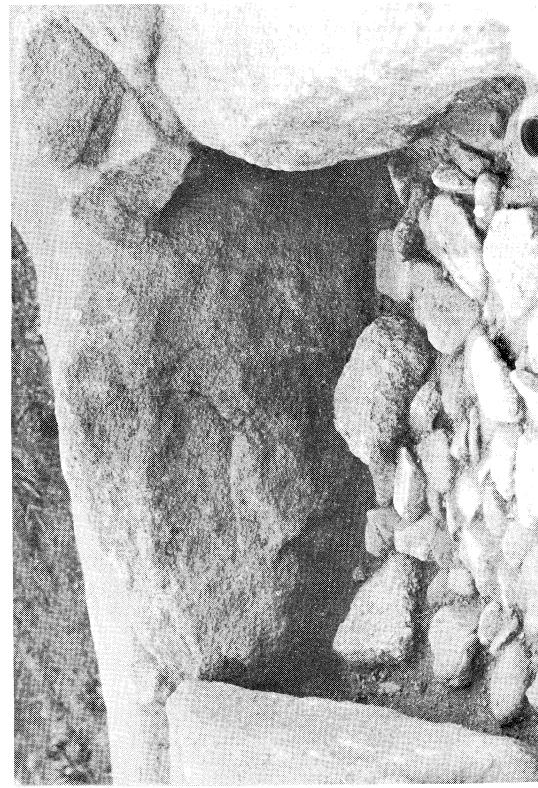
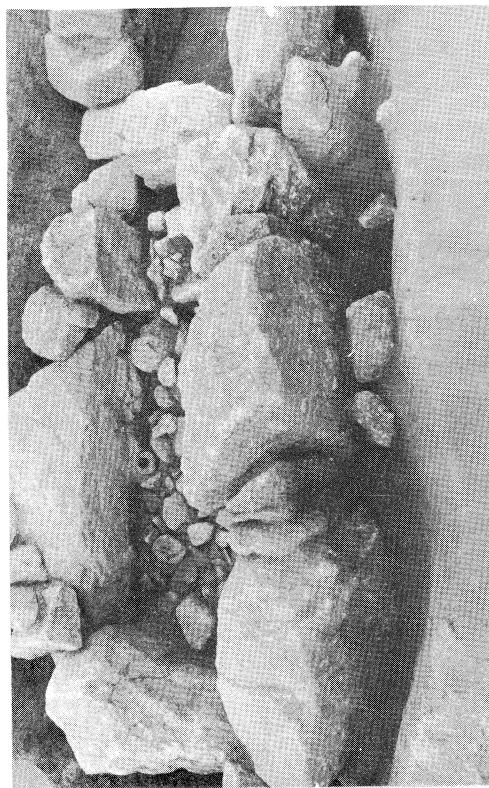
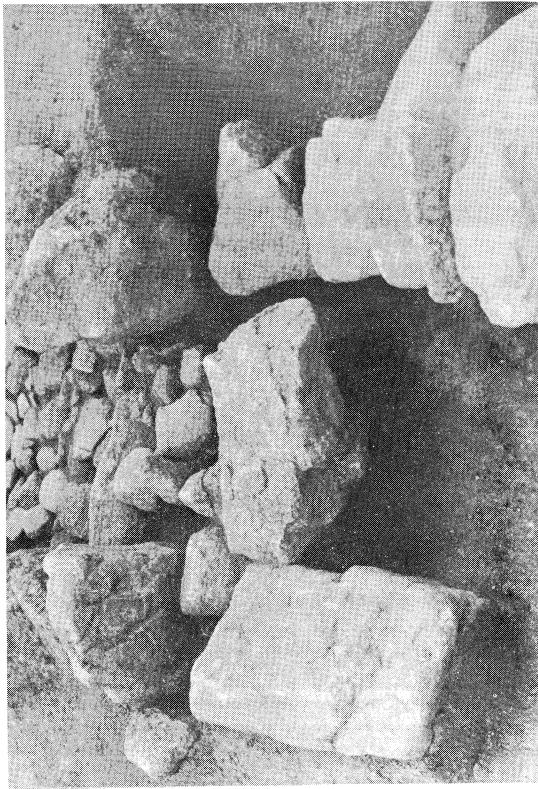
4号墳 発掘後全景(南から)



4 号墳 墓坑と石室(西から)



4 号墳 石室内部(東から)



墓壇と側壁(南から) | 墓壇と側壁(南から)
玄室奥壁 | 横石と袖石



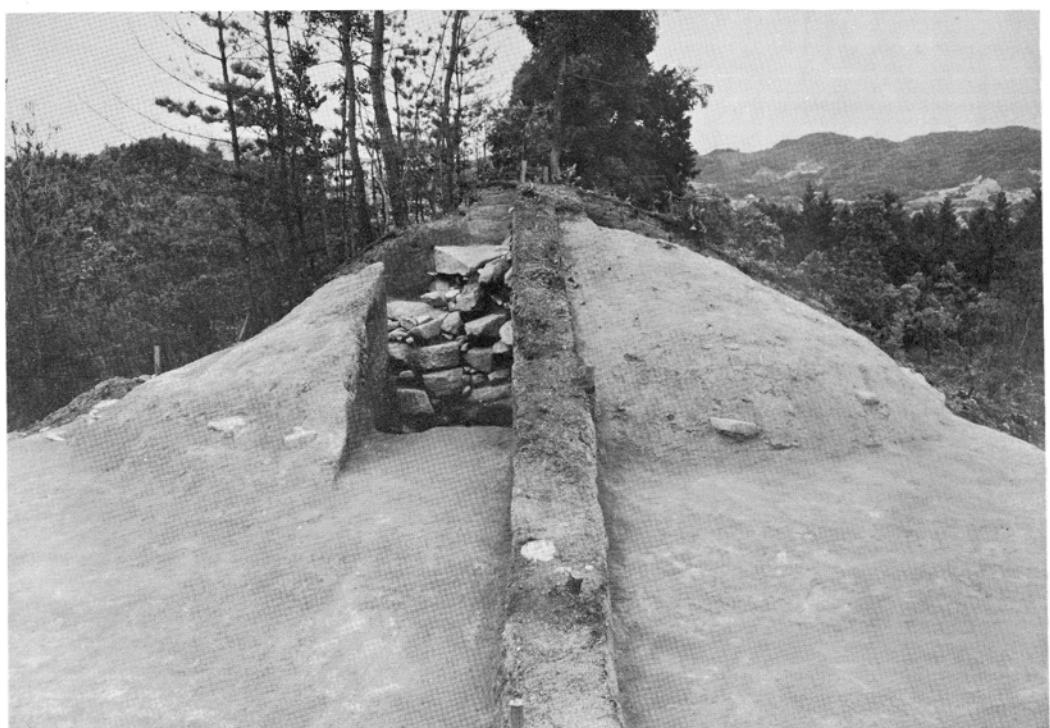
6号墳 発掘前全景(西から)



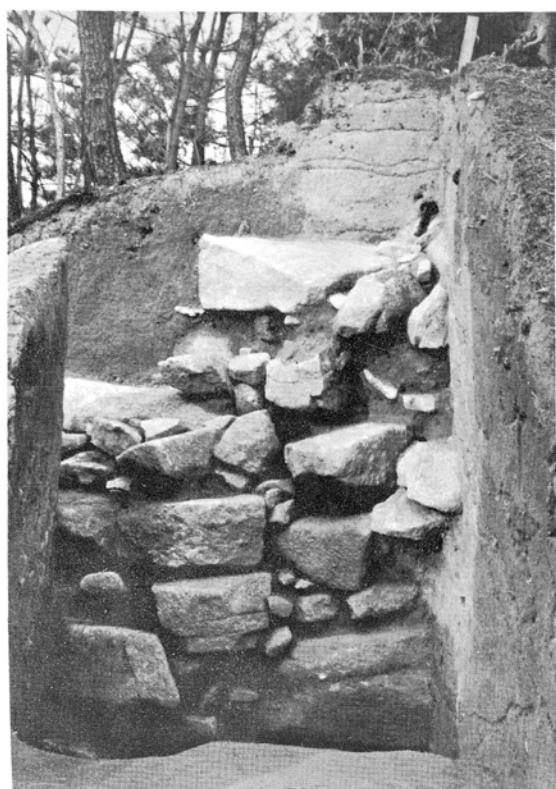
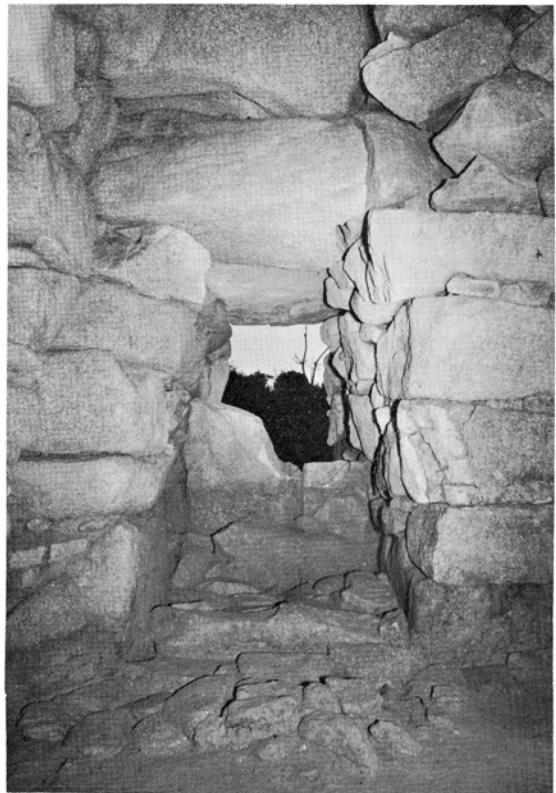
6号墳 発掘後全景(西から)



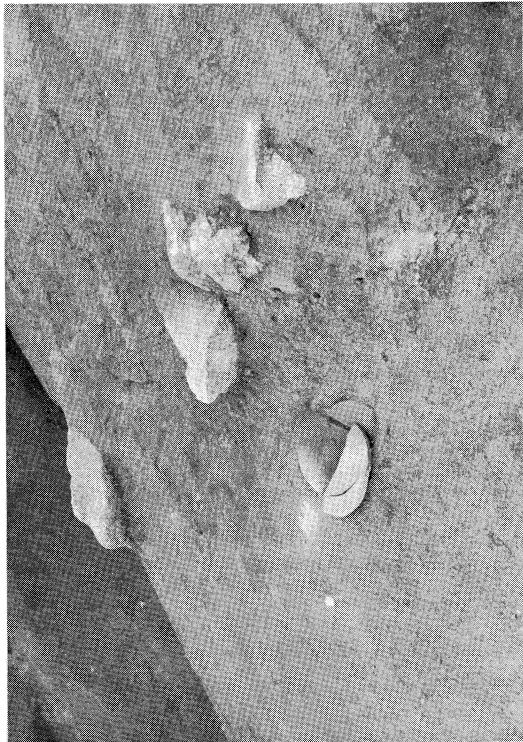
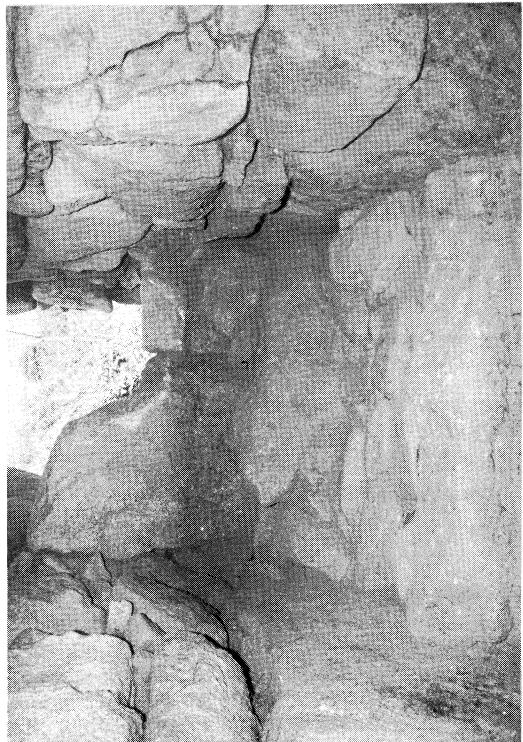
6号墳 羨道入口部と墓道(西から)



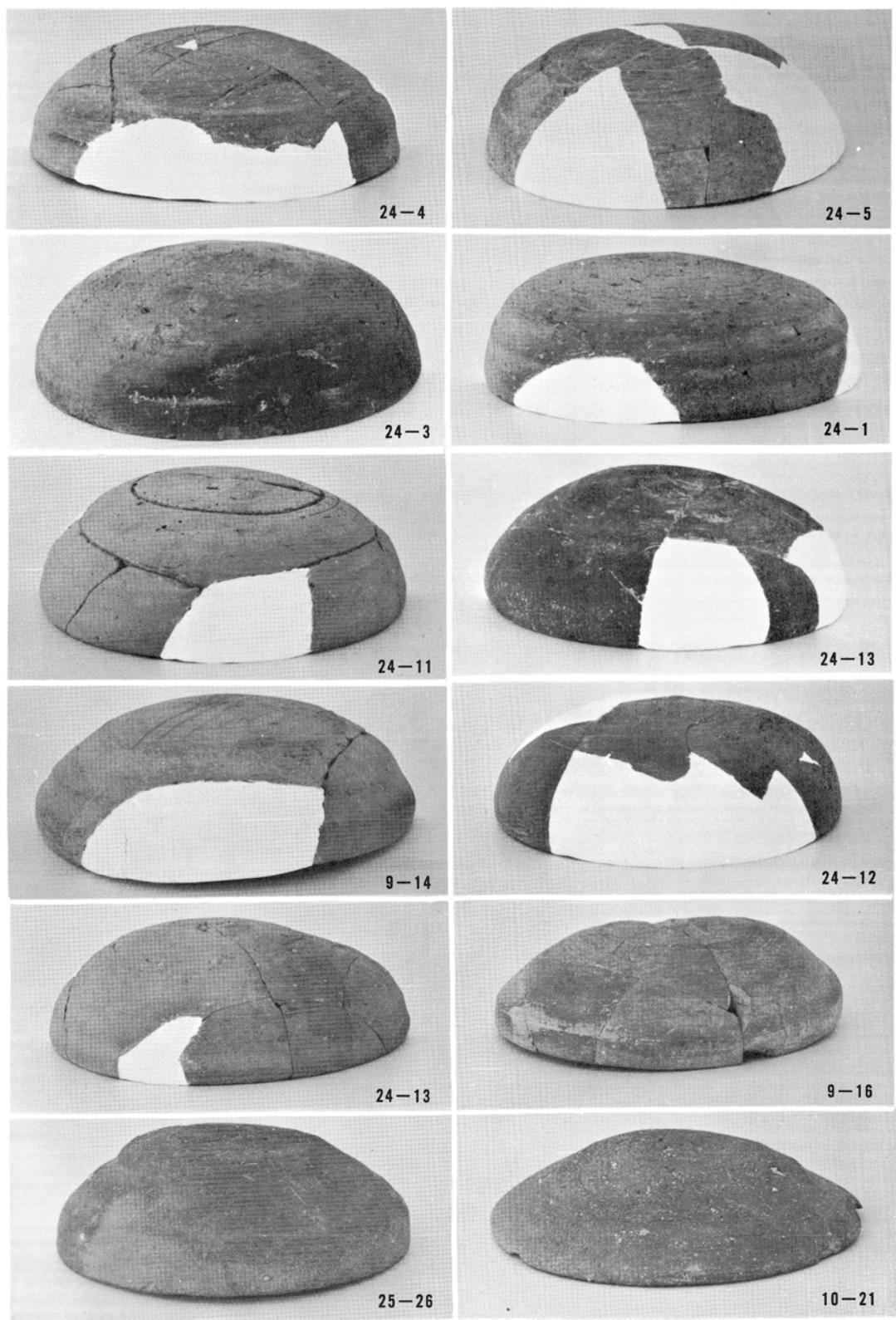
6号墳 墳丘と列石(南から)

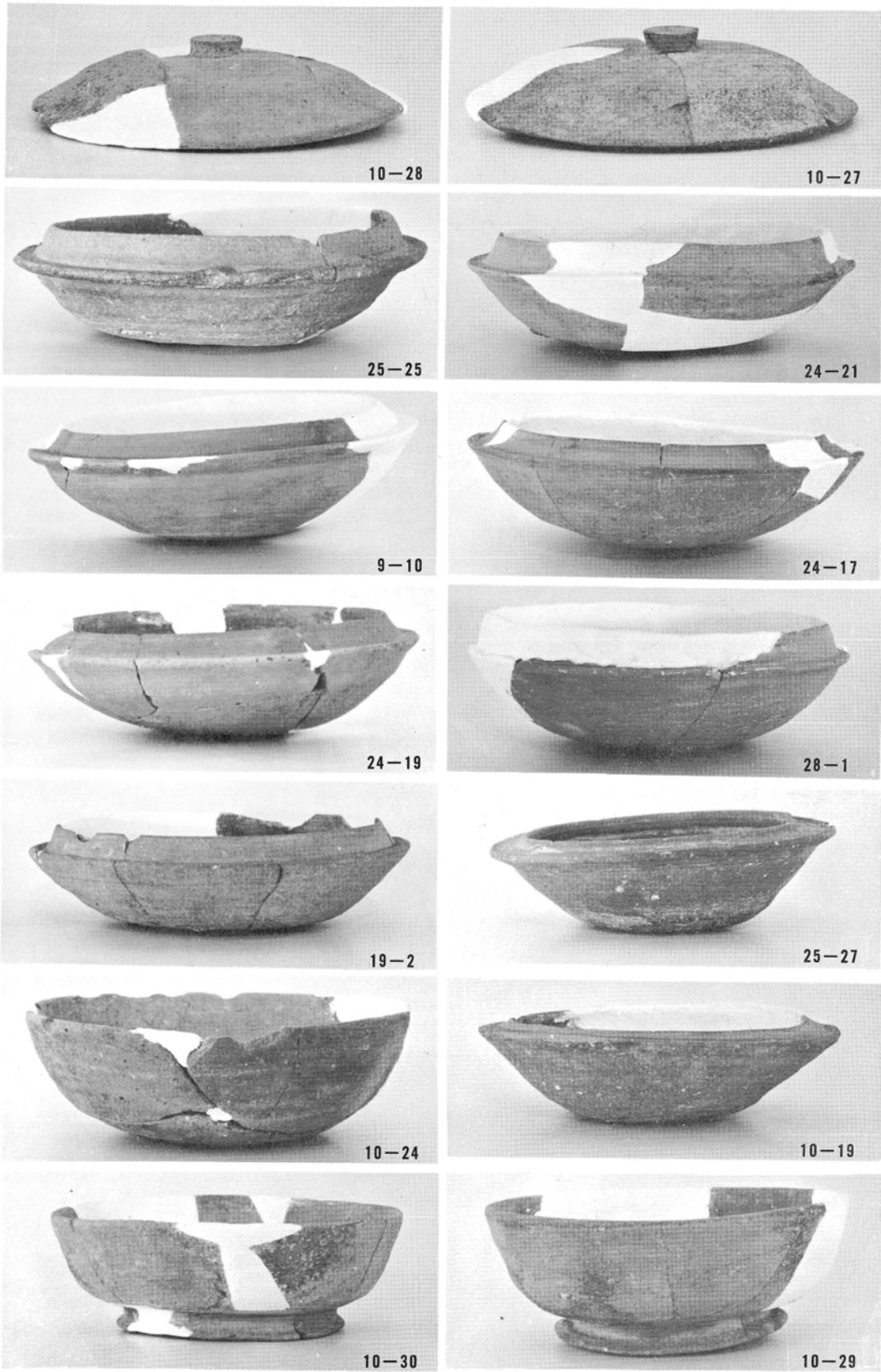


玄室奥壁
B トレンチ奥壁裏側 | 玄室前壁
A トレンチ側壁裏側



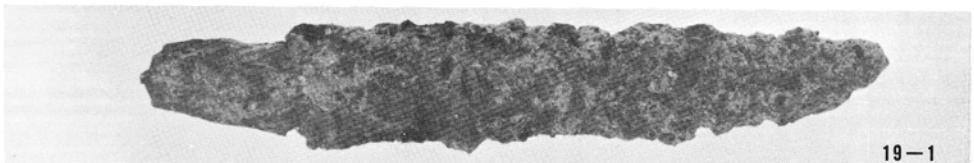
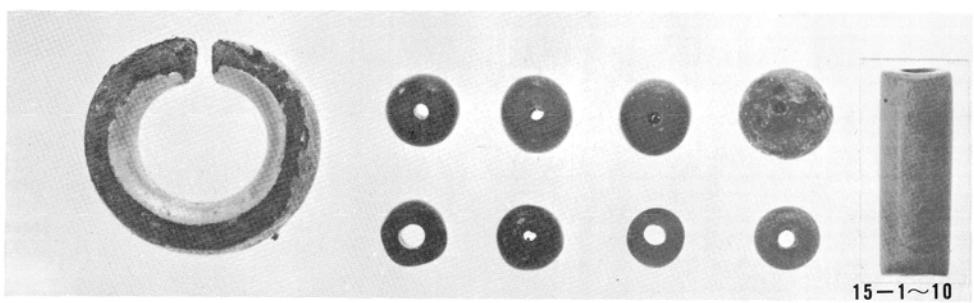
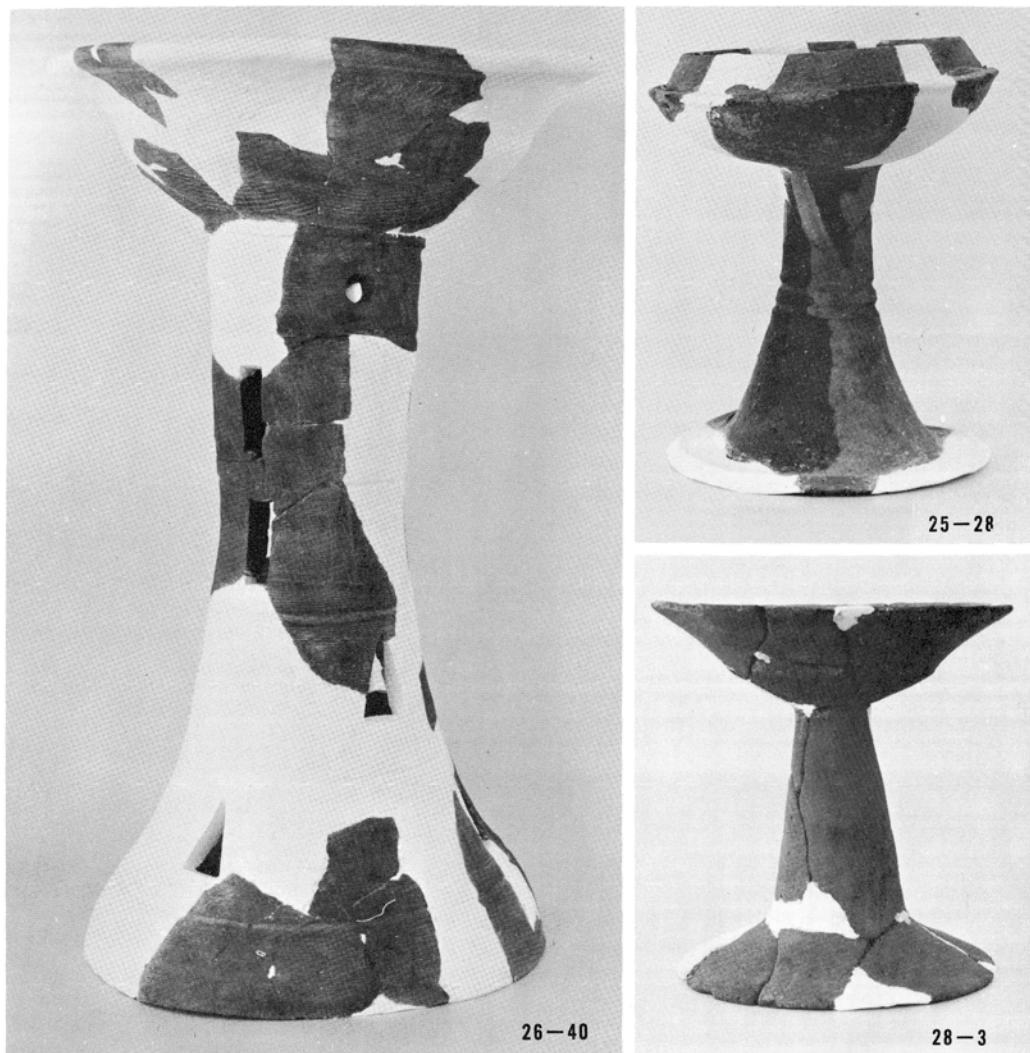
玄室内出土物状況 | 開塞部(墓道から)
北西墳丘裾部底部出土状況 | 開塞部(玄室から)











福岡市埋蔵文化財調査報告書 第28集

昭和49年3月31日

発行 福岡市教育委員会

福岡市中央区天神1-7-23

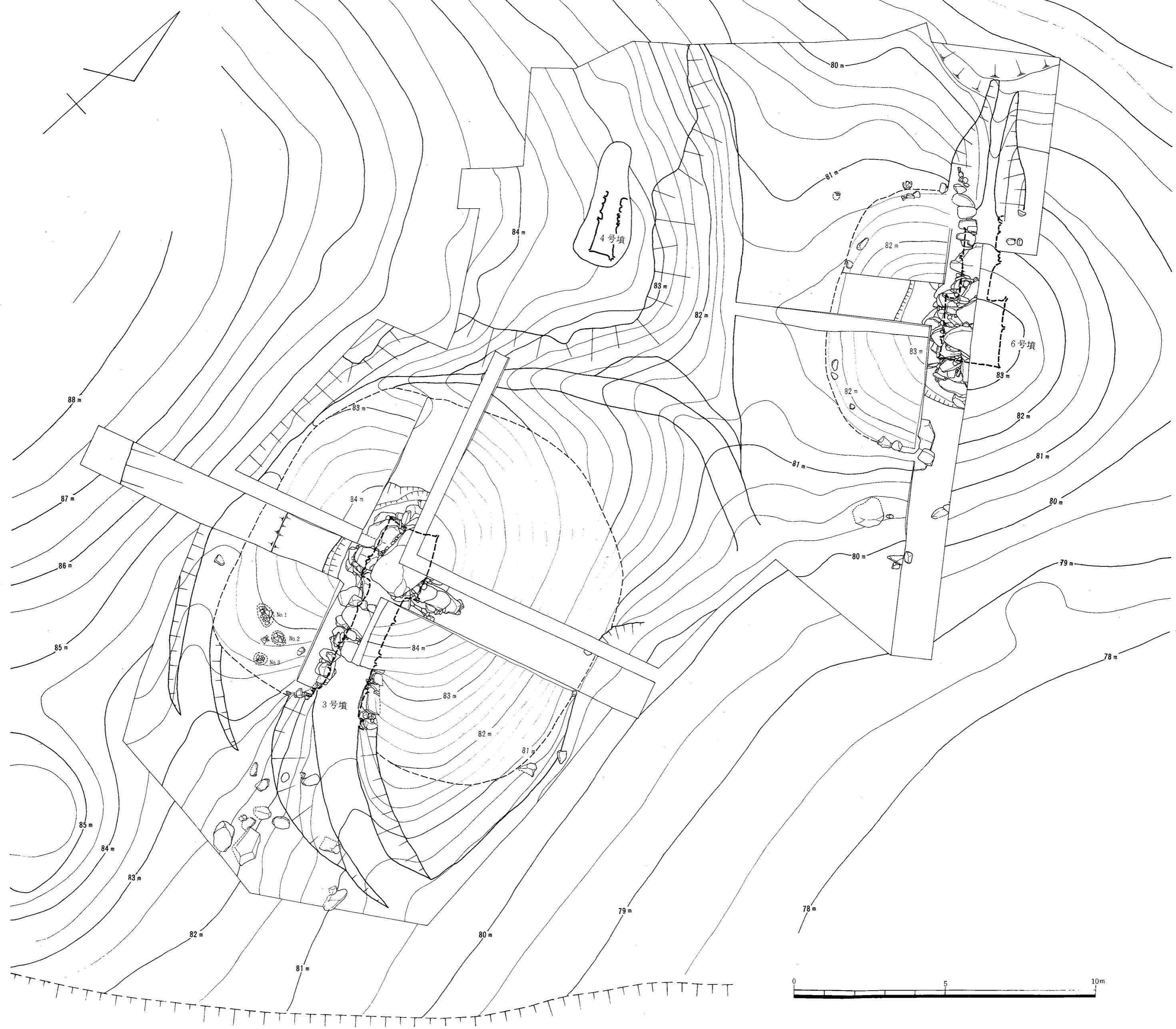
印刷 祥文社印刷株式会社

相
原
古
墳
群

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第二十八集

福岡市





付図 相原3・4・6号墳地山整形測量図（縮尺1/100） 黒線は地山、赤線は現存墳丘面をしめす。